



TITLE:

第2章 京都大学吉田南構内AM21区 の発掘調査

AUTHOR(S):

伊藤, 淳史; 富井, 眞; 内記, 理

CITATION:

伊藤, 淳史 ...[et al]. 第2章 京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査. 京都大学構内遺跡調査研究年報 2016, 2014: 3-110

ISSUE DATE:

2016-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226462>

RIGHT:

第2章 京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査

伊藤淳史 富井 眞 内記 理

1 調査の概要

今回の調査地点は、京都大学吉田南構内の西南隅、鴨川の東方約600mに位置し、吉田二本松町遺跡に含まれる（図版1，図1-399・401）。ここに、京都大学学生寄宿舍吉田寮新棟および学生集会所の新営工事が計画されたため、それぞれの予定地全面を発掘調査した。両地点は南北に隣接しており、説明の便宜上、以後「北区」「南区」と呼称する（図1）。調査面積と出土遺物総量は、北区が923㎡で整理用コンテナ70箱、南区が945㎡で84箱。調査期間は、北区が2013年7月8日から11月22日まで、南区が同年10月7日から2014年2月14日まで。これらは、届け出上は2件の発掘調査として取り扱われているが、隣接地で調査期間も重複することから、共通の担当者が発掘と出土遺物の整理作業をおこなってきた。よってここでは、双方の調査成果を一括して報告する。

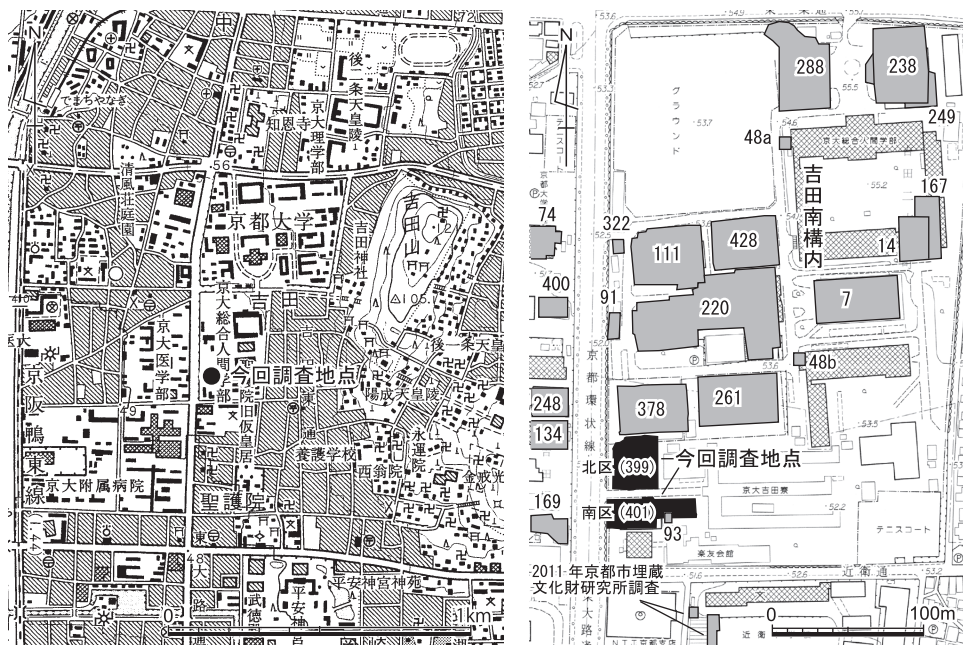


図1 調査地点の位置（左1/25000，右1/5000）

吉田南構内の位置する吉田二本松町遺跡は、縄文時代から近世に至るまでの各時代の濃密な遺跡のひろがりが見られてきた。とくに、構内の南西域一帯は、これまで広い面積での調査機会が多く、それらの調査成果から重要度の高い空間と認識されてきた。111地点南縁と220地点北西辺の双方では、平安時代中期の梵鐘鑄造土坑群が見つかり、現地に埋め戻し保存されている。また、220地点東半では弥生時代前期の小区画水田がきわめて良好な状態で検出されており、261地点では弥生時代中期の方形周溝墓も見発されている。これら3つの地点では、さらに古墳時代の方形墳や中世各期の建物跡や溝群など、多様な遺構と大量の遺物が見つかり、そして、2011年には、今回の北側隣接地となる378地点の調査において、古墳時代の方形墳（吉田二本松9号墳）の周溝から、円筒埴輪や各種の形象埴輪がまとまって出土し、注目されたところである〔富井ほか2015〕。

今回の調査は、これらの南西一帯をひろく調査することとなり、同様な状況のおよぶ範囲について、関心の持たれるところであった。同時に、調査地の東～南方一帯にかけては、古代末～中世前半期にかけて存在したとされる寺院「福勝院」の立地も比定されていることから〔吉江2006〕、寺域との関連にも注意が払われるところであった。なお、南区に接する位置では、昭和55年度の立合調査で（図1－93地点）、常滑産大甕と完形の瓦器盤が出土する土坑と東西方向の石列も確認されている〔泉・浜崎1981 pp.38-39〕。

調査の結果、先史時代では弥生時代前期の流路、古代では奈良時代の井戸や平安時代の東西溝、中世では鎌倉・室町時代の南北や東西方向の大溝、建物跡、土器溜、集石遺構など、縄文時代～近世にわたる各時代の多様な遺構・遺物が出土し、濃密な遺跡のひろがりが見られることが示された。なかでも鎌倉時代の建物跡については、小規模ながら布堀の基礎をもつ特異なもので、構内遺跡では初例となる。さらに、土器溜からは、「乙訓在地産」などと呼ばれている異系統の土師器皿がまとまって出土し、注目される。しかし、寺院の存在やそれとの関連を示唆するような調査成果は得られなかった。

また、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の方形墳については、北区の北壁際において、378地点で見つかり、吉田二本松9号墳の南周溝を、かろうじて確認できたのみにとどまった。このほかにも、古代以前とみられる黒色や淡褐色の埋土をもつ溝はいくつか確認されており、方形周溝墓や方形墳の周溝である可能性は残されているものの、全く遺物が出土していないため、時期や性格を特定できないままに終わっている。

なお、今回の発掘では、北区の広い範囲が、ごく最近に基盤の粘土層に達するまで大きく攪乱されていたことが判明した。この事情については後述する。加えて南・北両調査区

調査の概要

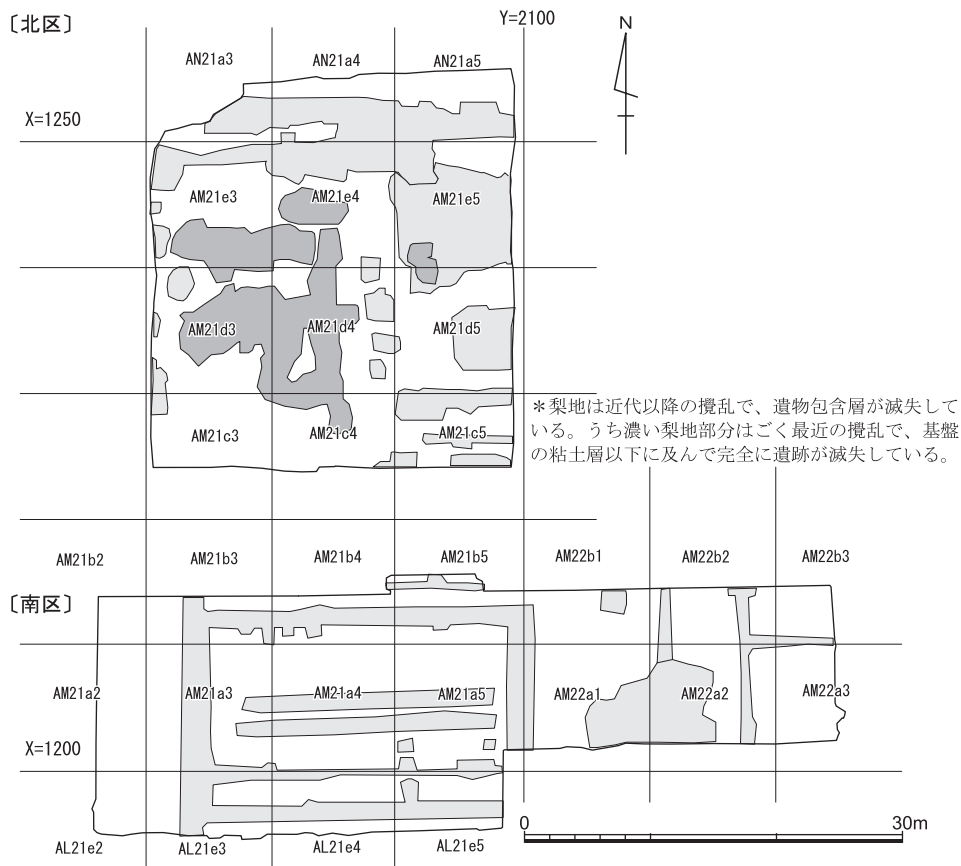


図2 調査区の地区割りと近代以降の攪乱範囲概略 縮尺1/600

とも近代以降の基礎や管路による攪乱もかなりの範囲に及んでおり（図2参照）、さらに西半部一帯は、中・近世に基盤の粘土層を採取した跡である不定形土坑（土取穴）も全面にひろがっている。このため、遺跡の遺存は総じて不良であり、とくに弥生・古墳時代の遺構については、本来あったものが滅失している可能性も十分考慮しておく必要がある。

今回の発掘調査と遺物整理作業については、伊藤淳史・富井眞・内記理が担当した。その際には、伊藤菜穂・太田那優・佐々木夏妃・霜鳥聖響・鈴木はるか・高木康裕・鶴来航介・中西常雄・西田陽子・安岡早穂の助力を得た。

本章は、第2節を富井、第4節(2)を内記、それ以外を伊藤が執筆した。全体の調節編集は伊藤がおこなった。

2 層 位

(1) 北区の層位 (図3～5)

発掘前の北区は、標高52m程度でおおよそ平坦だった。表土・攪乱層（第1層）は、平均的には1m前後の厚みに達するが、薄いところでは30cmほどにとどまる一方で、黄褐色粘質土（第12層）まで達する深い攪乱も広く分布する。第7節で述べるように、大学関連の近代陶磁器がまとまって廃棄されているのを確認している。

表土の薄いところでは、近世の遺物包含層である灰褐色土（第2層）が見られる。北辺では、下面の標高は、東部で約52.0mに達している部分もあり、Y=2090付近でも51.9mほどだが、Y=2080辺りから西辺に分布する近世の不定形土坑の埋土の最上部に堆積する耕作土の下面では51.2mまで下がる。また、東辺では、X=1240辺りでは51.2m程度なので南に大きく下がるが、X=1236辺りでは51.5m程度まで再び上昇し、さらにX=1230付近には南上がりの段差となっていたようでそれ以南では51.7mをはかる。

茶褐色土（第3層）は、中世の遺物包含層だが、多くは遺構埋土として残存し、近世以降の削平を免れて本来の耕作面をとどめているのは、東辺の一部と思われる。東壁ではX=1234辺りで、第3層内部で不明瞭になる砂脈を確認した。また北壁では、南北溝SD10の直下で、溝の埋土の最下層を押し上げたような状況を呈する砂脈を検出した（図版5-4）。さらに、東西溝SD13の東壁断面では（図版5-5）、北壁の下半が溝内に引き裂かれたような状況が認められるほか、溝の埋土も下半だけは堆積が乱れたような状況が認められる。こうしたことから、これらの大溝が掘削されて以降でまだ溝として機能していた頃に、大きな地震があったと判断する。なお第3層は、西辺では、X=1238以南では黄褐色粘質土ブロック群とともに不定形土坑埋土の主たる構成要素となっており（図版5-6）、その埋土が、褐色粘質土（第10層）に貫入する花崗岩粒から成る砂層（第13層）起源の砂脈を切っている。この砂脈も同じ地震によるものかはわからないが、層準としては、北接する378地点西辺での地層変形〔富井ほか2015〕に対応できるだろう。

黒褐色土（第4層）は粗砂質で、同じく粗砂質で淡褐色を基調とする砂質土（第5層）の上部に分布する。安定的に広がる遺物包含層ではなく遺構埋土として残存するのみである。出土遺物から、弥生時代から古代までの年代幅に収まるとと思われる。

弥生時代前期末中期初頭の砂質土石流堆積物である黄色砂（第6層）は、攪乱や中世以降の土取りを免れた部分から推し量れば、全域に分布していたことがうかがわれる。もっ

層 位

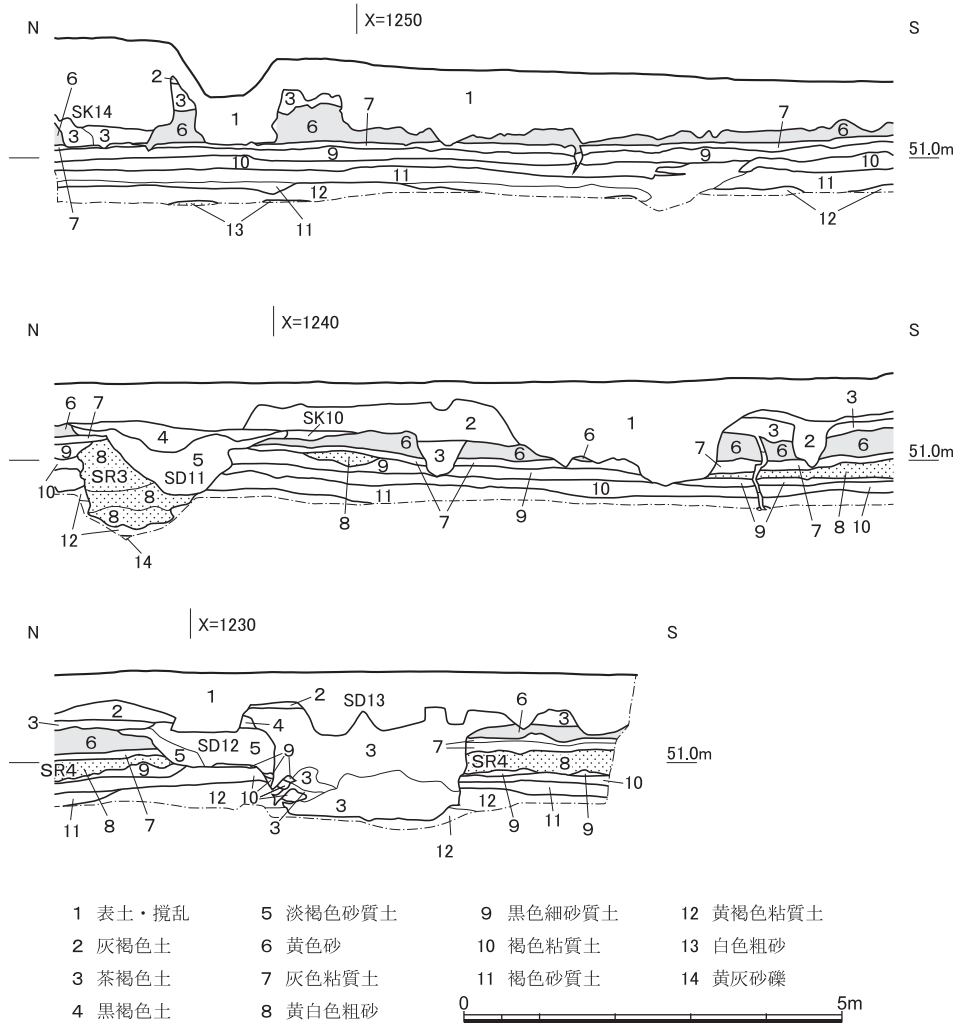


図3 北区東壁の層位 縮尺1/100

ともよく残っているところでは、最下部の粘土～シルト質から上方粗粒化して1mm程度の粒径になってから再びやや上方細粒化する、という傾向がうかがえる。流路SR1を最終的に埋積したのもこの黄色砂である。

SR1は、南壁近くでは底面がやや急勾配で上昇する。また、SR1の埋積過程では、黄色砂の最下部の細粒分が流路を横断して全面を薄く覆っている部分があるので（図版4-2）、黄色砂の堆積直前には水流がほとんどなかった可能性がある。

黄色砂に覆われていた弥生時代の旧地表が上面となるのは、主に灰色を呈する粘質土(第

7層)で、西北辺は明るめの色調で粘質の傾向が強いのに対し、東南辺では褐色がかり下部が粗砂質になる。第7層の上面の標高は、西壁中央付近で50.9m、南壁の西辺で50.7～50.9m、東壁では51.4～51.0mをはかる。

第8層は、流路SR1の下部や流路SR3・4を構成する灰白色から黄白色の粗砂。SR1下部は堆積岩も含む。SR3・4は、花崗岩粒から成るので白川系の砂層と判断できる。SR4の分布する東南部では上方粗粒化が認められ、特に南辺では粒径が10mmまで達する。SR1の側方に堆積する青灰色シルトも第8層をもたらした水流によると思われるので、便宜的に第8層とした。なお、SR3は、SR1下部が流向を変えたときに形成した旧河道と判断できる。

第9層は、黒色～灰色を基調とする細砂質土。西辺には分布せず、また南辺では、分布が途切れがちになるとともに、上部が第8層の浸食を受ける部分もある。第10層は、褐色～暗褐色を呈する粘質土。北壁の東隅付近では、拳ほどの大きさのものも含む炭化物の集積を検出しており、そのうちの大型の炭化物の放射性炭素年代測定により、 $2713 \text{BP} \pm 24$ の年代値を得ている(株式会社加速器分析研究所に委託:IAAA-133677)。第10層よりも砂質に富むとともに色調が薄く褐色～明褐色を呈するのが、褐色砂質土(第11層)で、 $X = 1247$ 付近では、堆積の乱れを認め得るほか、基質の粒径が細かい部分も狭からず分布するが、褐色砂質土としてまとめた。出土遺物から、縄文後晩期の地層と思われる。

第12層は、黄褐色粘質土で、調査区全体に広く厚く分布していたと思われるが、調査区東半では中世に土取りの対象となった。この第12層を掘削上の基盤層として捉えている。ごく希に縄文後期の土器片を含むことから、堆積の開始は4000年前頃より新しいと判断できる。

それより下位の地層は、第13層は花崗岩粒から成る白色系の粗砂で、第14層は、礫径50mmに達するものを含め多くの堆積岩を多く含む。礫種から、前者は白川系で後者は高野川系と判断する。第13層は、西辺では第11・12層を切り裂く砂脈として検出できたほか、西壁では第11層を上下に分断するような水平方向の砂脈としても確認できる。なお、北壁でSD10に切られる差脈を構成する砂層については、第13層なのか第14層なのか判断できなかった。

(2) 南区の層位 (図6～8)

南区も、発掘前はおおよそ平坦で標高52m程度だった。基本的な層序も北区と変わらない。第1層はおおよそ50～100cmの厚みだが、西辺では近代に下層を深く掘り込み、その最下部

層 位

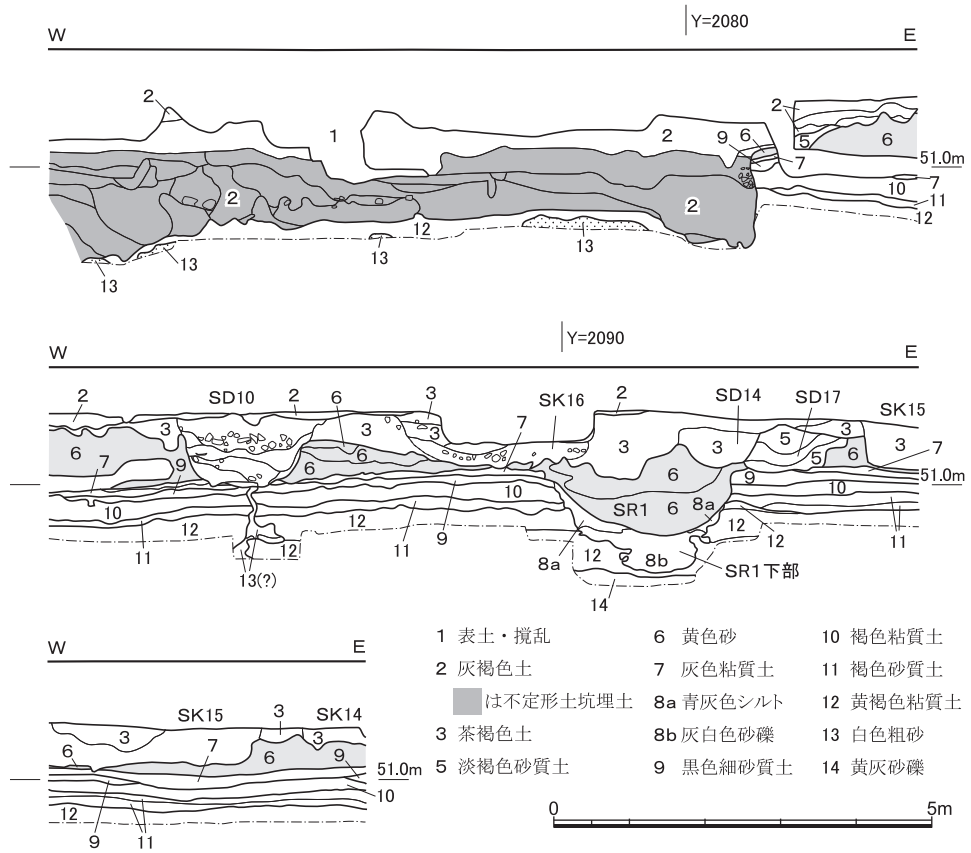


図4 北区北壁の層位 縮尺1/100

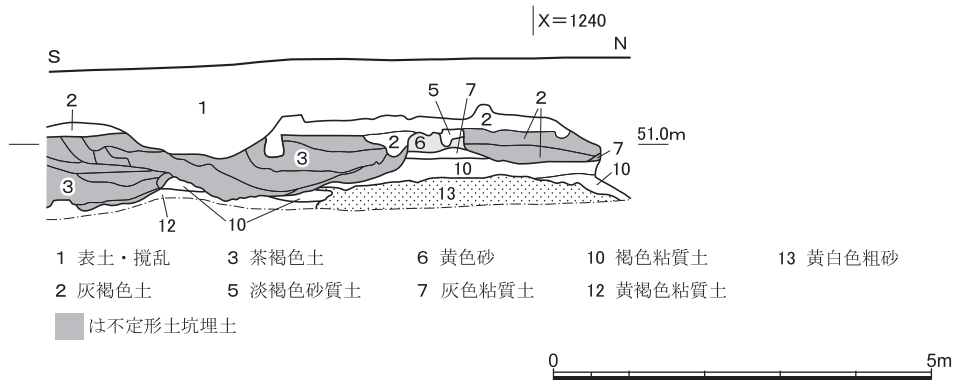


図5 北区西壁の層位 縮尺1/100

京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査

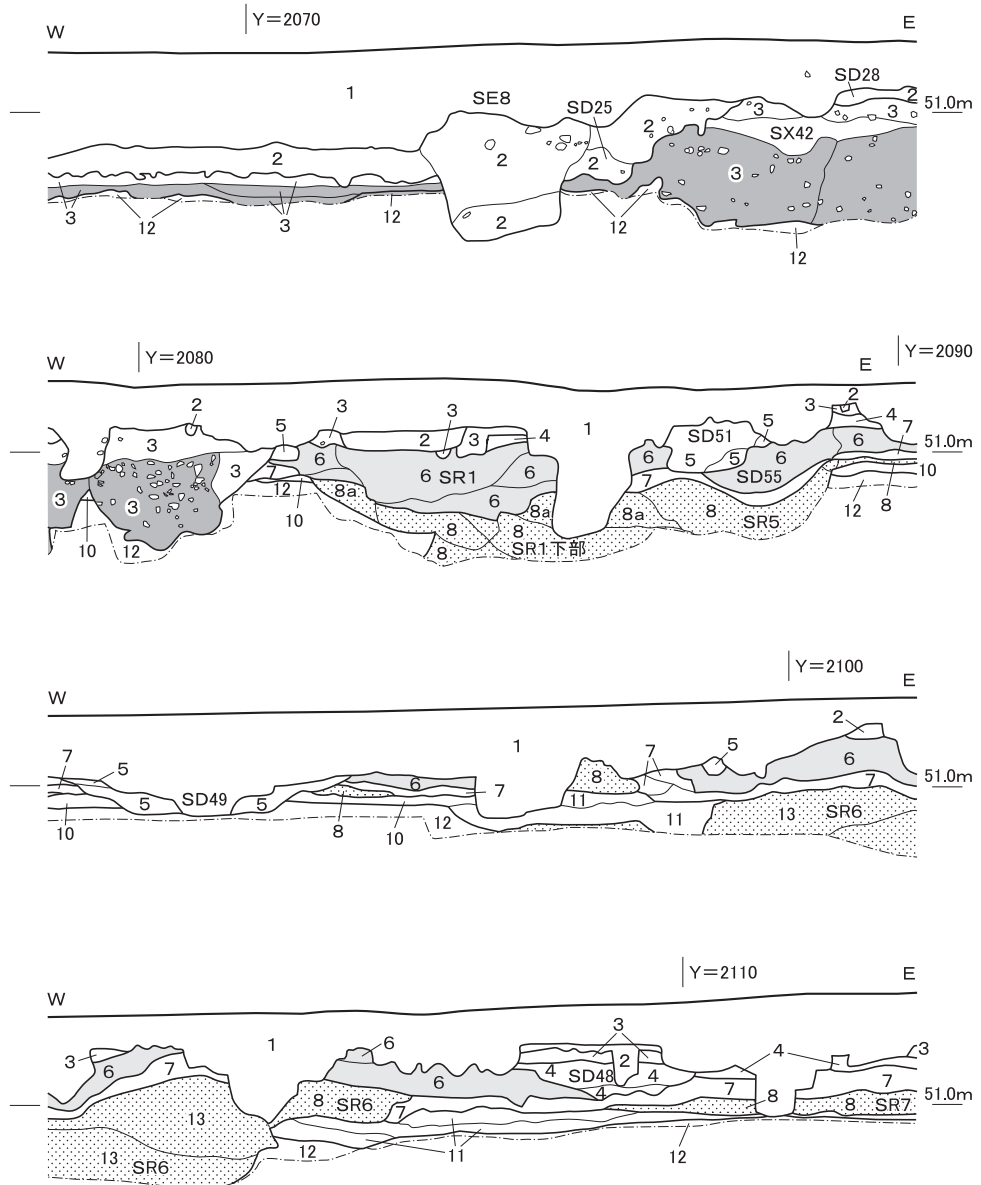


図6 南区北壁の層位 縮尺1/100

層 位

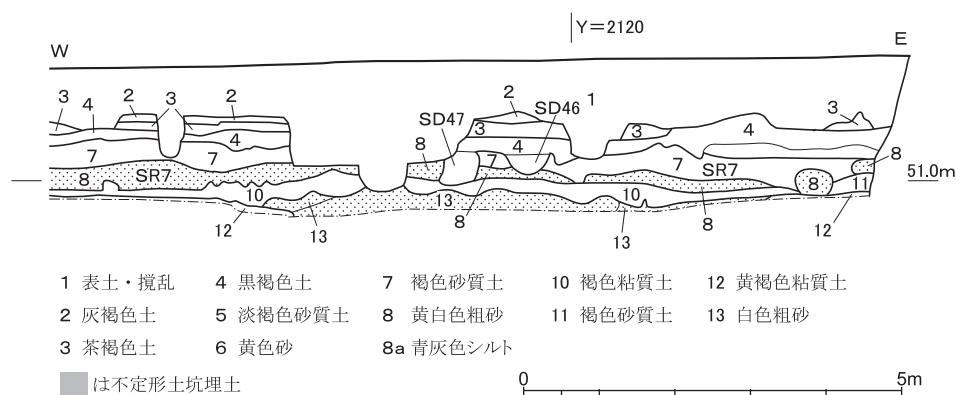


図6 つづき

に陶磁器の集積を見る。近世の遺物包含層である灰褐色土（第2層）の下面は、およそ南下がりおよび西下がりだが、標高を細かく見ると、Y=2105辺りがおよそ南北方向にわずかに高まっていた可能性がある。北壁際ではY=2120付近から東では51.8mより高く、Y=2120辺りから少なくとも5mは51.8mのままで、Y=2110辺りでは51.7cmと一段下がるが、Y=2106～2102では51.8mでも第6層が残存する。そこから西へは大きく攪乱を受けているが、Y=2089でも51.6mで、Y=2080付近でも51.4mで、それぞれ茶褐色土が残存し、Y=2079では立ち上がりの削平された溝SD28の底面が51.2mをはかる。SD28の西から大きく西へ落ちるが、Y=2072以西は50.2mで平坦となる。

南辺は、Y=2118以东は51.6mで、そこから西へは大きく攪乱を受けているが、Y=2097でも51.6mをはかる。Y=2083付近には、51.3mから51.1mへと約20cmの西落ちの段差があり、Y=2076までは平坦であることを確認できる。Y=2075辺りをはしるSD28以西は大きく西へ落ち、Y=2074以西は50.1mで平坦となる。

中世の遺物包含層である茶褐色土（第3層）は、比較的安定して存在し、北壁でいえば、Y=2076～2085とY=2108以东に西落ちの地形を確認できる。ただし、近世と同様に、Y=2105辺りがおよそ南北方向にわずかに高まっていた可能性がある。すなわち、下面の標高でみると、Y=2121で、西へ10cm以上落ちてそれ以西がおそらくY=2108までは51.6mで平坦となる段差があるが、Y=2106～2102では51.8mでも第6層が残存し、Y=2090辺りでは51.5mとなっていて、Y=2085では51.2mをはかる。

弥生～古代の遺物包含層である黒褐色土（第4層）は、東辺では安定した堆積がみられる。さらに、北壁ではY=2109以东、南壁ではY=2090以东で、黄色砂（第6層）の分布

が見られない一方で、第3節で述べるように、遺存状態の良好な弥生前期末～中期初頭の土器がピットから出土している。こうしたことから、東辺は遅くとも弥生時代までには黄色砂がほとんど堆積しないような高まった地形になっていたと考えられる。

北区の東南部では黄色砂直下の弥生時代の遺物包含層（第7層）は褐色がかり砂質になっていたが、南区ではその傾向がさらに強まる。ただし、黄色砂直下でも、先史時代の流路SR1の埋没過程の流路変化で形成された溝状の凹みSD55の直下はシルト質である。

白色砂（第8層）で埋積される流路SR5も、北区のSR3と同様に、SR1の流路変化で生じたと判断できる。SR1下部では、北区と同じく側方に青灰色シルトが堆積しているが、それを切る白色砂との関係から、流れは徐々に東に移行してSR5となった後で放棄流路SD55となり、その後再び水流が来てSR1の上部を形成したと判断できる（図版4-5）。SR1上部を埋積したのは黄色砂だが、以上の見解を踏まえ、SR1下部は第8層としてまとめている。なお、SD55は、北区のSR1の底面の上昇に対応すると思われる、第6層をもたらしした土石流の直前にはSR1は少し西側に膨れていたと考えられる。

第9層の黒みがかった細砂質土は、南区では断面図作成部分には分布しないが、第10層の褐色粘質土から縄文晩期の突帯文土器など300点前後の破片が集中して出土したエリアでは（図9）、下位の第10層に漸次的に移行するかたちで、数点の土器や炭化物を包含して薄く分布している。採取した炭化物の放射性炭素年代測定値は、 $2492 \text{BP} \pm 26$ である（株式会社加速器分析研究所に委託：IAAA-133676）。

第10～12層の様相は北区と同様である。黄褐色粘質土（第12層）の直下では、白川系流路の堆積物である白色系の花崗岩粒から成る砂層を確認できていないが、SR6の下部の堆積断面を北壁で見ると、 $Y=2098$ 辺りで、第11層と第12層の間に貫入しているように見えることと、 $Y=2101\sim2104$ で、第7層に相当すると思われるやや土壌化したシルト質土とその上位の土石流堆積物と思われる黄白色粗砂層（第6層）の下面が波打っていることから、SR6は、北区西辺の状況と同様、第12層の下位に堆積した白川系流路堆積物が地震による変形を被ったと判断する。そして、北壁の $Y=2105$ 辺りを通過しながらおよそ北北東から南南西の方向にはしる中近世の尾根状の微高地は、この変形を踏襲した可能性もある。北接する378地点の東南部では中世に生じたとされる北北東－南南西方向の断層状の地層変形を確認しており〔富井ほか2015〕、それと対応するならば、花折断層との対比が検討課題として浮かび上がってくる。なお、高野川系の堆積物と思われる第14層の堆積は確認できていない。

層 位

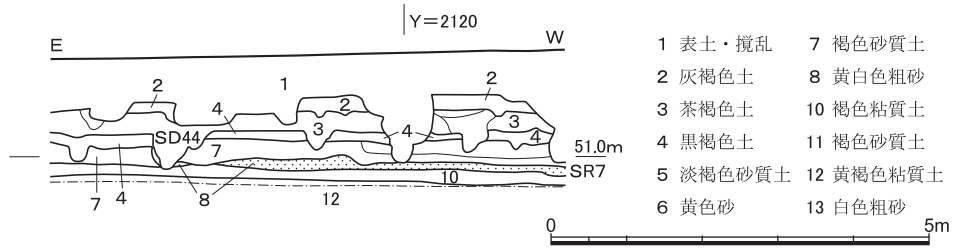


図7 南区南壁の層位（東部） 縮尺1/100

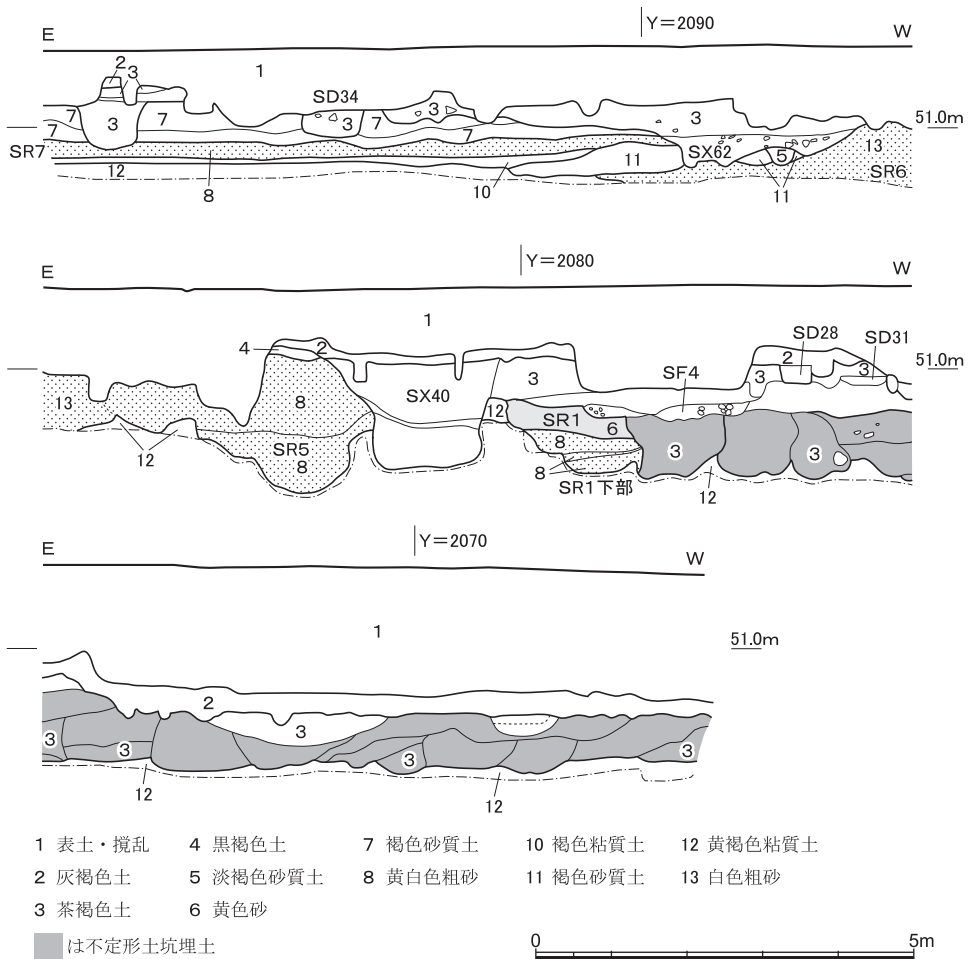


図8 南区南壁の層位（西部） 縮尺1/100

3 縄文・弥生時代の遺跡

(1) 遺 構 (図版2～4, 図9)

前節でも触れたように、広域で確認される大規模な土石流堆積で、弥生前期末～中期初頭の鍵層となっている黄色砂や、その下部の弥生前期以前の遺物包含層については、攪乱や中世以降の土取りによる削平があり、安定した確認は一部の範囲にとどまった。とくにY=2080ライン付近以西は、全域で滅失している(図9)。そうした状態の中で、北区・南区とも、人為的な掘削によるものと確実に認定できる遺構は確認されず、砂層で埋積する流路が複数見つかったにとどまった。なお、南区の東半では黄色砂に相当する砂層は確認されず、古代以降の遺物と混在して、褐色砂質土や黒褐色土から遺存の良い縄文～弥生土器が出土した。この一帯が北東側から張り出す尾根状の微高地にあたり、先史遺物包含層と古代以降のそれとが黄色砂を介在させずに接して堆積していたことに起因するのであろう。(図9)においては、黄色砂が堆積している範囲を中心に、その直下の灰色粘土層上面の地形の概略を等高線で示した。北区の北東域と南区の東半域がほぼ同じ高さで尾根状の微高地として張り出しており、両者に挟まれた北区南東域一帯が窪地状の地形となっている様子がうかがえる。

以下、流路などの概略を述べておく。流路には、最終的に黄色砂が埋積しているSR1と、白色の粗砂が埋積しているそれ以外のSR3～SR7がある。

SR1は、幅2m深さ1mを越える規模の断面U字形の流路で、北区から南区にかけて南北方向にはしる。下半部には粗砂や砂礫が互層に埋積しており、弥生前期以前の土器が出土する。これら砂礫のレベルは北区北端で50.1m、南区南端で49.7m程度であり、南へと流水のあった状況が推察される。砂礫で埋積が進んでいたところに、黄色砂により一気に埋没し平坦化している。このSR1の上流に相当する流路は、北側の378地点、さらには220地点や111地点の調査でも確認されており、吉田地区一帯の基幹的な水利を担う存在であったと評価できる。

SR3は、北区の北東側から流入し、蛇行しながら南流していったとみられる。大半をSR1に切られてしまい、輪郭や規模がはっきりしない範囲がほとんどだが、幅・深さとも1m以上とみられる。SR4も、北区の北東側より流入している流路で、調査区東南一帯に浅く幅広く白色粗砂の堆積が広がっていることから、輪郭や規模は不鮮明ながら、流路の存在を認識した。SR5は、南区を南北にはしる細い流路。SR1にほぼ並行しては

縄文・弥生時代の遺跡

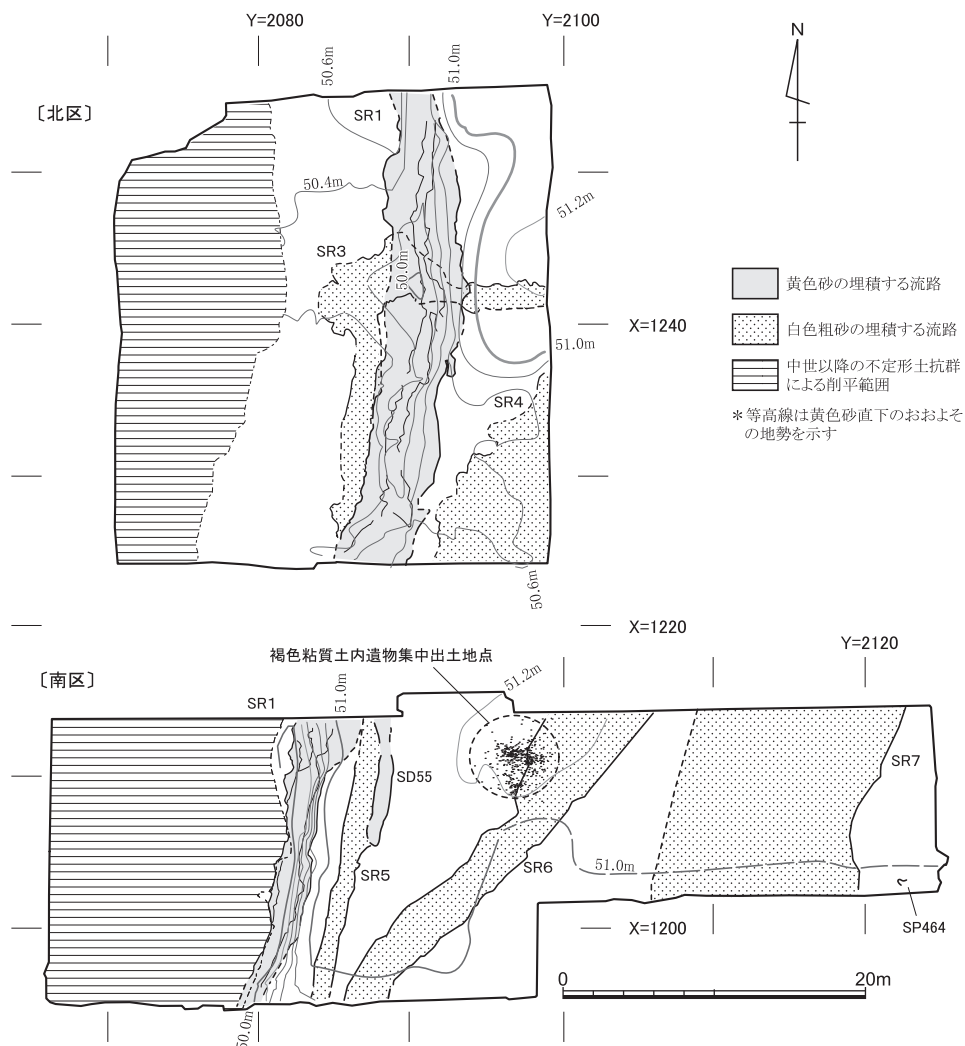


図9 弥生時代以前の主要遺構配置図 縮尺1/500

しる。北区のSR3やSR4が合流した南への流れに相当する可能性がある。SR6は、南区中央付近を北東-南西方向にはしるもので、幅2～3m程度、深さは1m以上をはかる。SR7は、南区の東域に南北方向に幅広く10m以上にわたって堆積する白色粗砂のひろがりを見出し、流路と認識した。最深部は確かめられていない。これらSR3～SR7の存続時期については、SR3やSR5についてはSR1に先行するものであること、またSR6埋積後の西肩付近において、褐色粘質土中より縄文晩期後葉の突帯文土器（I43・I44）と同一個体とみられる破片が集中して出土していることから（図9で遺物集中地点と表

示), いずれも縄文晩期後葉までには埋積して機能を終えていた流路とみられる。SR4やSR7についても, 晩期以前の流路とみて良からう。

以上のほか, 遺構であるかどうか定かではないが, 南区において, 黄色砂が埋積している南北方向の溝状のごく浅い凹みをSD55とした。遺物は出土していない。また, 南区東南隅の小ピットからは弥生前期末～中期初頭の甕(I87)が一括出土しており, SP464とした。さきにも述べたように, この南区東半帯は黄色砂が堆積せず, 褐色砂質土や黒褐色土中から, 古代の土器と混在して弥生土器が出土する。これらの層は, 黄色砂より下位にあたる弥生前期以前の遺物包含層が東へ連続して堆積しているもので, 層準としては西域の褐色粘質土と同一であるものが, 古代以降に攪拌や削平を被ったものと評価される。先史時代層と古代遺構の層との弁別を為し得なかったので, SP464の一括出土についても, 後世の2次堆積である可能性もあるが, 遺存良好のため原位置を保っているとみて, 遺構としてとりあつかった。

(2) 遺物 (図版10～13, 図10～15)

第6層黄色砂より下位の層や流路内からは弥生前期以前の土器のほか, 微量の石器類が出土している。南北両地区あわせて, 位置を記録できた破片は接合前の状態で682点のとりあげを数える。それらの半数近くは, (図9)に示した褐色粘質土中の遺物集中地点から出土しており, 多くは同一個体の破片とみられるので, 位置を記録できず流路内の砂礫中などから出土している少量の土器を加えても, 出土个体数としてはかなり少なくなるとみて良い。また, 南区東域の褐色砂質土や黒褐色土中や, 黄色砂より上位の包含層や遺構埋土中からは, 後世の土器に混入して縄文～弥生時代中期までの資料が認められる。以下, ここであわせて報告する。なお, 図中で断面が灰色のものは, 角閃石を多量に含む胎土の个体である。

縄文後期～晩期の土器 (I1～I64) このうちI1～I44・I46・I48は黄色砂より下位に相当する層からの出土であり, それ以外が古代以降の遺構や包含層からの混入出土である。I1～I27・I44～I55は後期以前の有文土器。I1はSR5に埋積する白色粗砂を断ち割り中にその下部から出土した。黒灰色を呈する波状口縁の破片で, 端面を細かく刻む。波状の山形部に相当する位置に, 胴部に斜行気味に湾曲する突帯が貼り付けられている。色調や質感が類似する口縁部片にI10があり, 低平なつぶれたような突帯が, 口縁端部から斜行して貼り付けられており, 突帯上には連続して押捺がされるが, 輪郭が不鮮明である。これら2点は中期以前の可能性があるが, ほかは, 直線・曲線の沈線文や

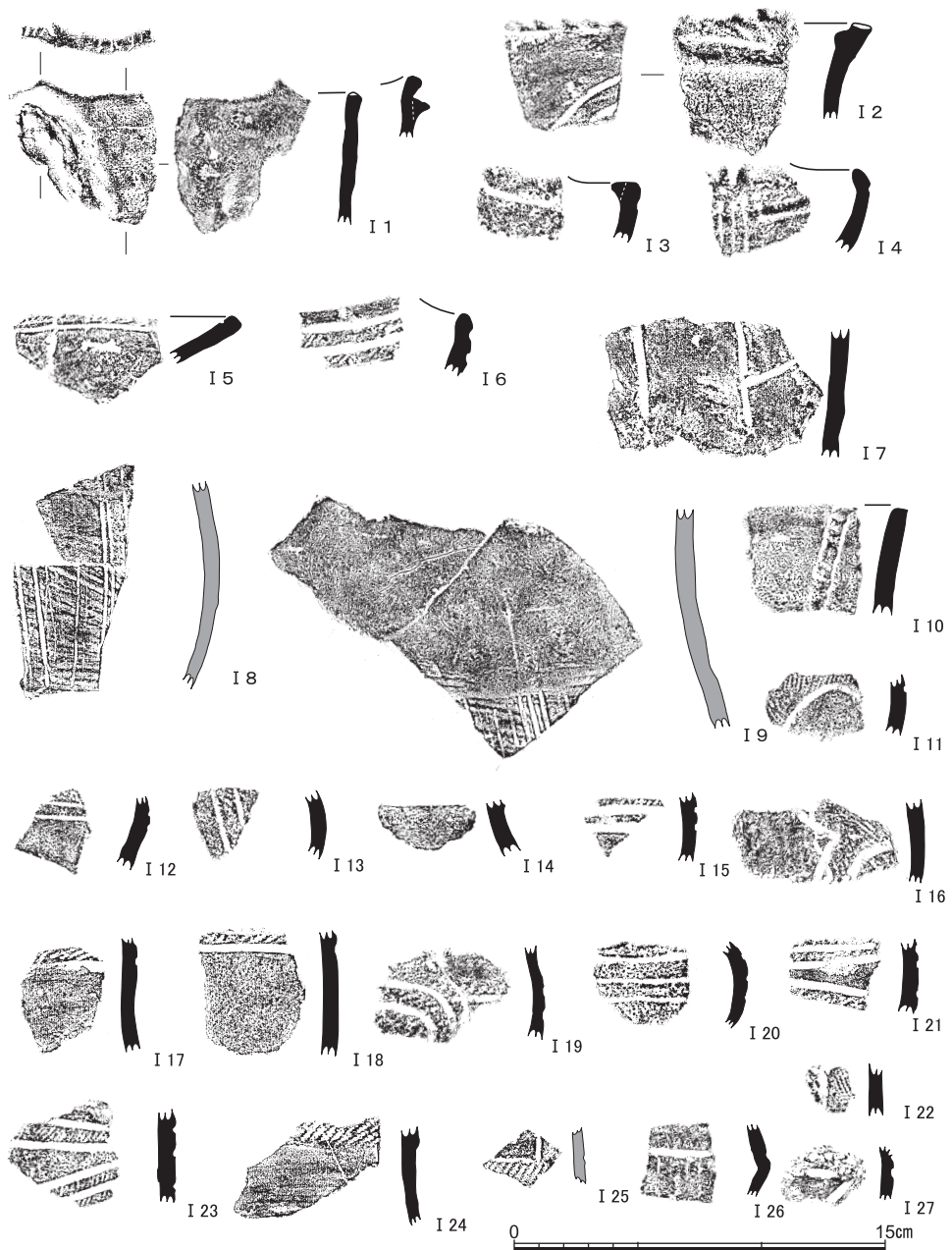


図10 縄文時代の土器(1) (I 1 : SR 5, I 2・I 4・I 8～I 14・I 16・I 20・I 22・I 23・I 26 : SR 1, I 3・I 5・I 6・I 15・I 17～I 19・I 21 : 褐色粘質土, I 7・I 27 : SR 3, I 24 : 淡褐色シルト, I 25 : 褐色砂質土出土) 縮尺1/3

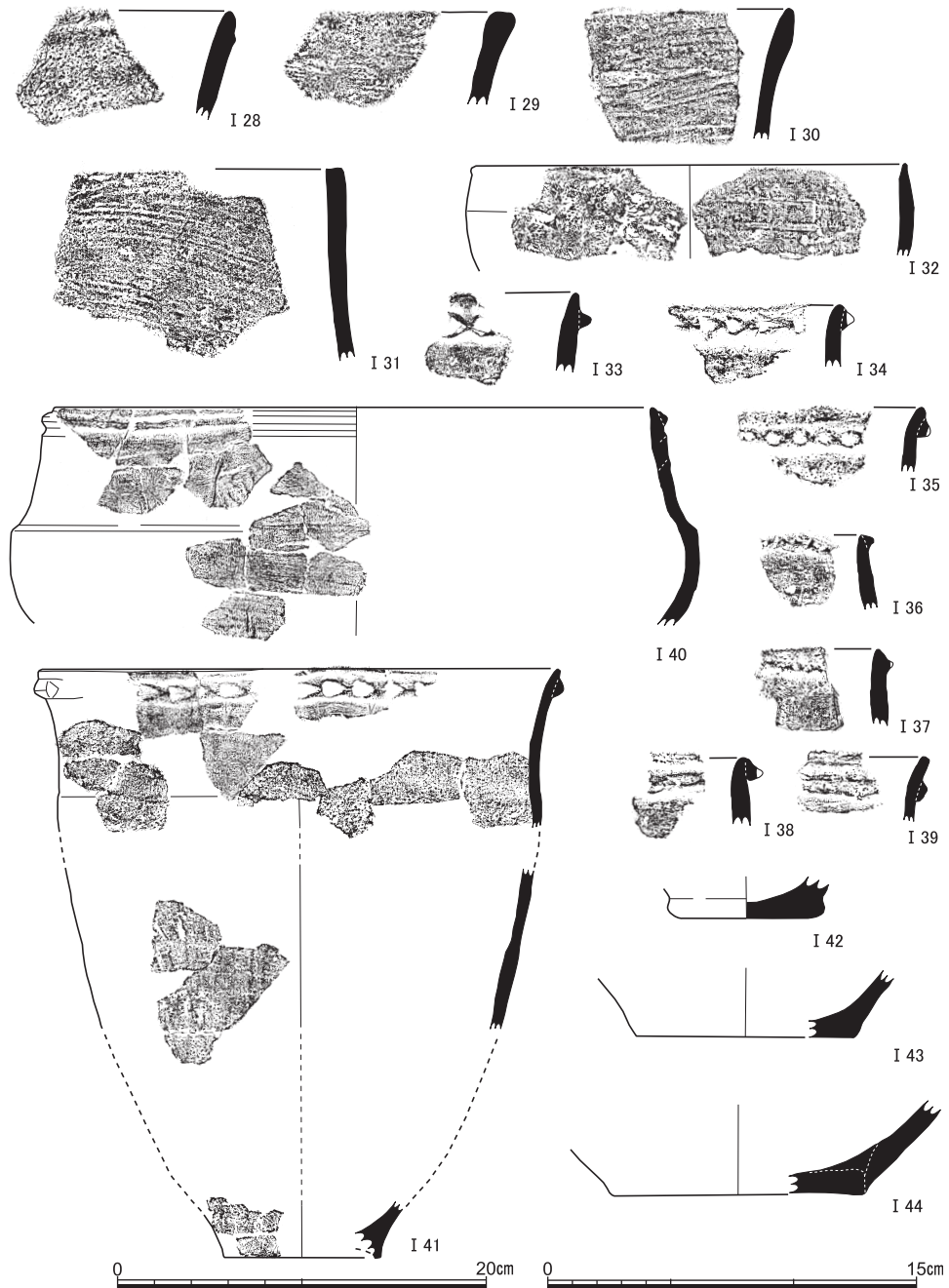


図11 縄文時代の土器(2) (I 28・I 29・I 32・I 34・I 35・I 37・I 42～I 44:SR 1, I 30:黄褐色粘質土, I 31:SR 3, I 33:褐色砂質土, I 36:灰色粘質土, I 38～I 41:褐色粘質土出土) I 40・I 41縮尺1/4, ほか縮尺1/3

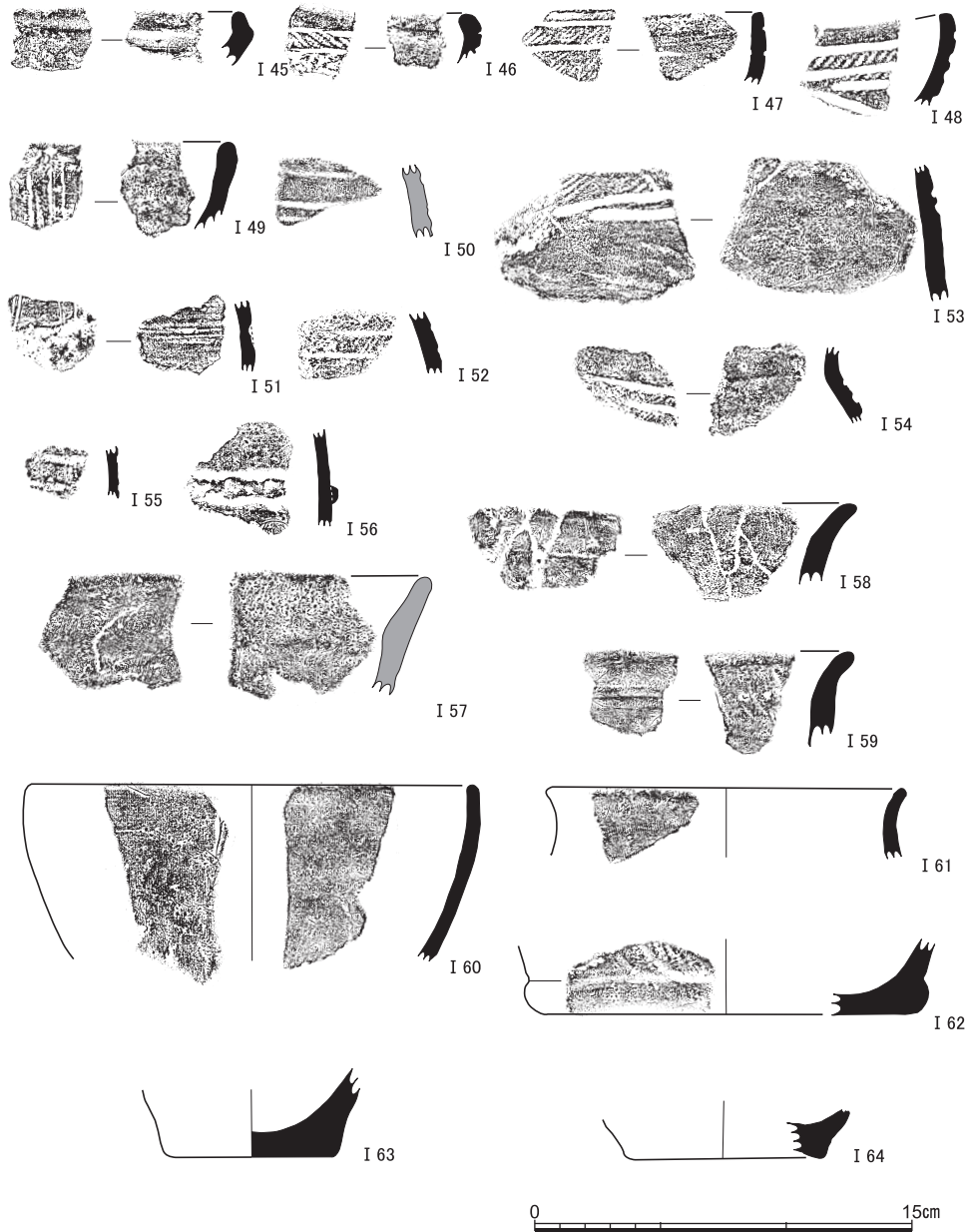


図12 縄文時代の土器(3) (I 46: 黒褐色土, I 48: 褐色粘質土, ほかは古代以降の遺構・包含層からの混入出土) 縮尺1/3

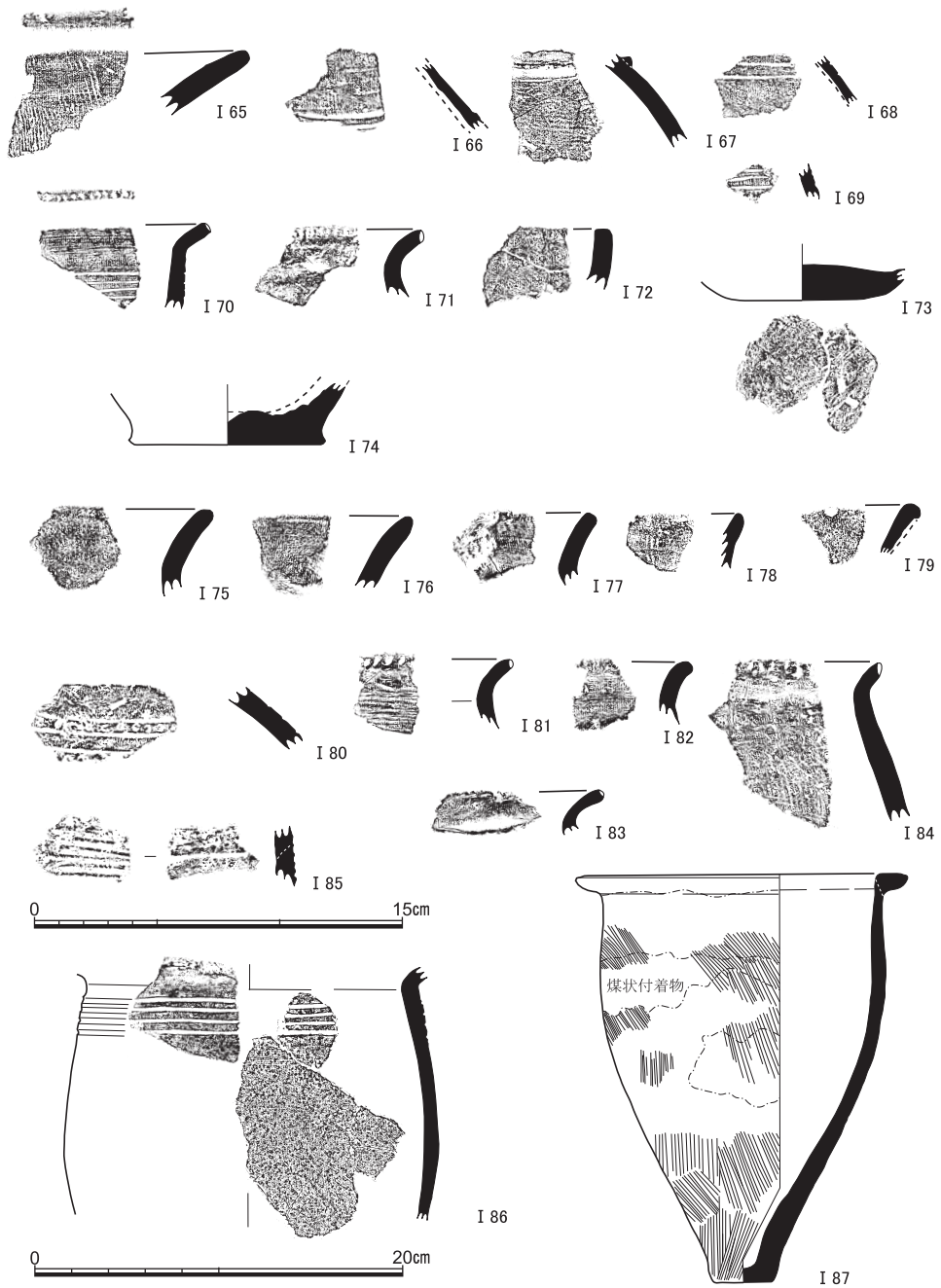


図13 弥生時代の土器(I) (I 65～I 68・I 70・I 71・I 78：SR 1, I 69・I 74：褐色砂質土, I 73：褐色粘質土, I 87：SP 464, ほかは古代以降の遺構・包含層からの混入出土) I 86・I 87縮尺1/4, ほか縮尺1/3

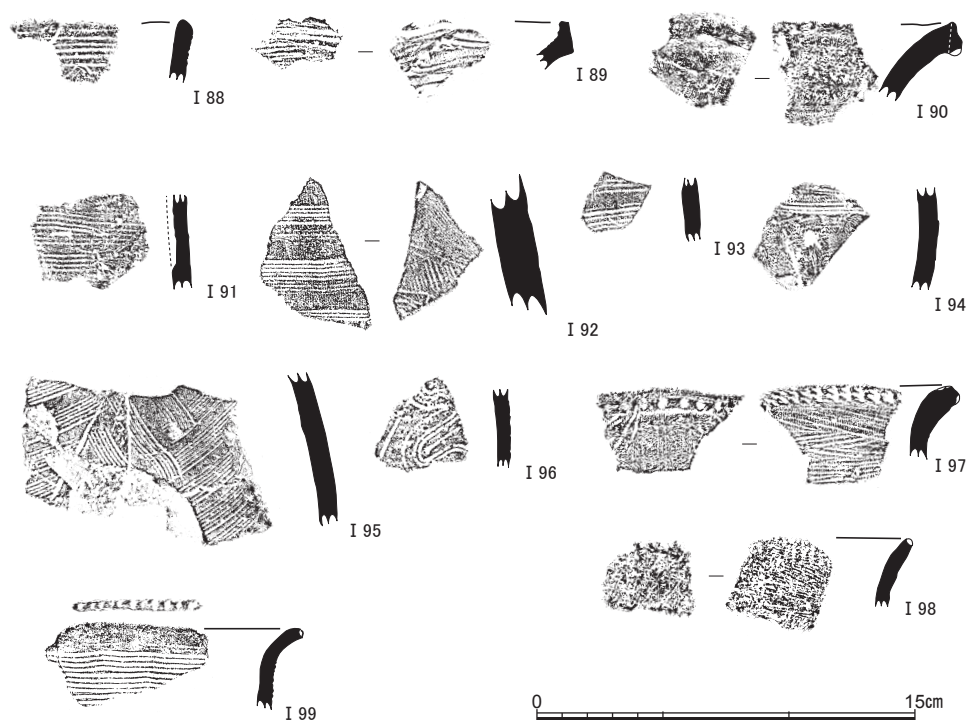


図14 弥生時代の土器(2) (I 88褐色砂質土, I 93黒褐色土, ほかは古代以降の遺構・包含層からの混入出土) 縮尺1/3

磨消縄文による文様を基本とするもので、縄文後期前葉～中葉のものであろう。特定の型式・時期にまとまるものではなく、北白川上層式1～2期ごろを中心としながら、その前後のものも若干含んでいる内容とみてよからう。

I 28～32は粗製土器。I 28～I 31は後期で、I 32は外面を横位に篋削りしており、晩期とみられる。

I 33～I 41・I 56は縄文晩期後葉の突帯文土器、I 42～I 44は後晩期の底部。うち後世混入のI 56のみ深鉢胴部の突帯文で、ほかはいずれも口縁部の破片である。I 33～I 35は器壁が厚く、しっかりとしたO字やD字の刻みを施す丈高な突帯が貼り付けられる。I 36～I 39は、やや薄手で、I 36・I 37は口縁端部に接して貼り付けられる小ぶりな突帯に、細かな刻みが施される。I 38の突帯も、口縁端部に貼り付けられるが、横長のO字状に押捺される特異なものである。I 39は口縁端部からかなり下がった位置に扁平な突帯が貼り付けられる。I 40・I 41は、ともに褐色粘質土中から、同一個体とみられる破片が多数集中して出土しているものの、接合率は低く、完形には復元できない。I 40は浅鉢風の器形

になるもので、無刻の突帯が口縁端部からやや下がって貼り付けられ、頸胴部界には明瞭な段差を設ける。外面は全面横位に研磨され、暗赤褐色を呈する。内面は黒色を呈するが、撫でのみで放置される。I 41は1条の刻目突帯文深鉢で、口縁端部からやや下がってしっかりとD字状刻みを施す突帯がめぐり、頸部がややくびれる器形となるようで、胴部は縦位の削りとみられる。器壁は薄い。以上の突帯文土器は、突帯の形状や特徴から、I 36～I 39がやや型式的に後出の特徴を示すとみられるものの、それ以外は、おおむね晩期後葉の滋賀里Ⅳ式～船橋式に位置づけられるものといえる。

弥生前期の土器（I 65～I 86） 縄文後・晩期の土器よりも少量である。削り出し突帯（I 66）や貼付突帯（I 67）の壺胴部片や、4条以上の匏描沈線文をめぐらす甕口縁部（I 70）や頸胴部（I 86）などが認められ、中～新段階に位置づけられる遠賀川式土器が中心となる。I 73の底部は靱圧痕状のものがある。I 85は外面に横位の条痕調整のみられる小片で、明瞭な粘土紐積み上げ痕を内面にとどめる特徴など勘案すると、伊勢湾地方にみられる内傾口縁土器とみてよい。周辺では、288地点で多く出土している。

弥生中期の土器（I 87～I 99） I 87は、S P 464で一括出土した甕。ほぼ完形に復元される。口縁部が逆L字状に外折しており、「瀬戸内系甕」と呼称されている特徴を呈する。胴部は張らず、底径が小さくすばまり不安定な器形である。口唇に刻みはなく無装飾で、頸部から胴部にかけても、縦位の浅い刷毛調整のみで文様はもたない。器表面に、帯状やパッチ状に煤状の黒褐色付着物を認め、内面にも焦げ状付着物を一部に認める。使用にともなう痕跡であろう。瀬戸内系甕については、前期後葉の近畿地方を中心にしばしば出土が知られるものであるが、遠賀川式土器の甕と同様な口唇部の刻みや多条の沈線文を頸部に施すことが通有である。しかし本例は全くの無装飾であり、後出する中期初頭段階の可能性が高いと判断する。

I 88は直口壺の口縁部片で、半截竹管状の工具を用いた櫛描直線文と波状文の組み合わせが認められる。I 89は端部が短く上方に立ち上がる受け口状の口縁部で、内外面に粗い刷毛調整が認められる。I 90は広口壺の口縁部片で、下端を刻む。I 91～I 96は櫛描文を施す壺の胴部片。I 91は複帯構成で、数帯の櫛描文が互いに重なり合っている。I 95は縦位の匏描線を軸とした羽状の櫛描施文を施す特異なモチーフである。中期前半の近江の湖南地域から中部地方の条痕文系土器の調整や装飾手法に類例が知られるパターンと言える〔例えば、山本ほか2000 図8-24など〕。I 96はやや崩れた縦形流水文モチーフであろう。I 97～I 99は甕の口縁部片。I 97は厚手の器壁で口唇部下端を刻むとともに、口縁端部に

縄文・弥生時代の遺跡

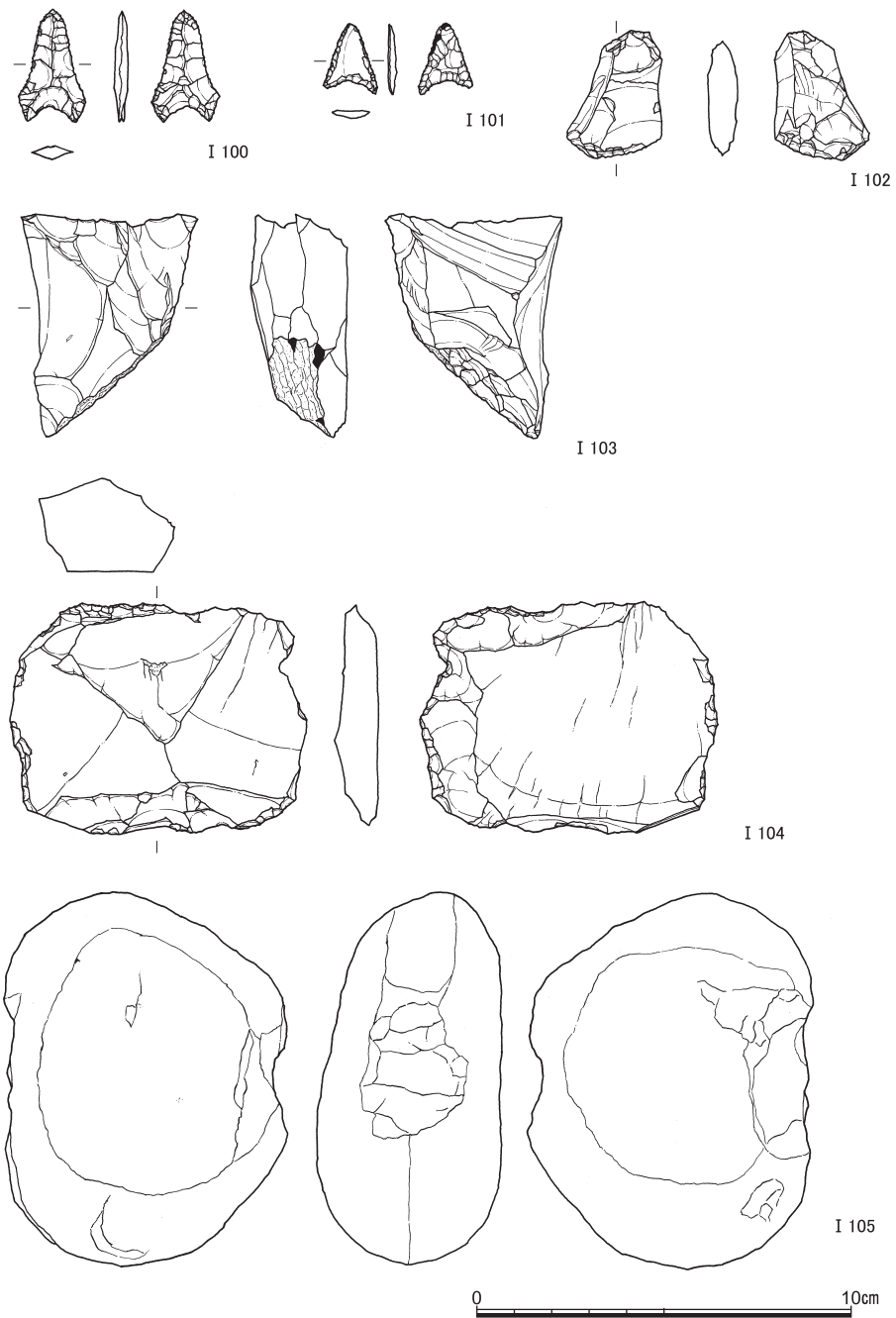


図15 縄文～弥生時代の石器・石製品（I 100・I 101：褐色粘質土，I 103：褐色砂質土，I 105：S R 1，I 102・I 104：S X64への混入） 縮尺1/2

接した内面側に刷毛調整と、刷毛工具による押し引き状の刺突列がめぐっている。I 98は薄手でもろい器壁で、口唇部端面を刻み、やはり内面側に細かな刷毛調整と刷毛工具の刺突列がめぐる。質感は互いに異なるが、特徴から近江～大和地域の中期前半の甕の特徴を備えたものと評価する。I 99は口唇部に篋刻み、頸部に複帯構成の櫛描文を施す。中期初頭のものであろう。

以上の弥生中期の土器は、おおむね前半のうちに収まる時期に位置づけられる点、I 87の甕とあわせて、少量であるが時期的なまとまりをうかがうこともできる。近辺では北側の261・378地点などで中期後半の方形周溝墓が見つかったりしているけれども、それとは異なる時期の活動域が吉田南構内南辺に存在することを示していよう。

石器・石製品（I 100～I 105） 石鏃 2点、楔形石器 1点、石核 1点、削器 1点、敲石 1点がある。ほか図示していないが、ごく微量の剥片も出土している。石鏃 I 100・I 101は南区の遺物集中地点で褐色粘質土中から、石核 I 103は南区東辺の褐色砂質土中から、敲石 I 105は北区のS R 1砂礫内からの出土であり、I 102・I 104はS X64への混入である。I 100は最大長3.0cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gをはかる凹基式石鏃。金山産のサヌカイト製とみられる（以下、石材、石器技法の観察所見については高木康裕の教示による）。I 101は最大長1.9cm、幅1.4cm、厚さ0.2、重さ0.5gの凹基式石鏃。片面にフラットな素材面を残す。二上山北麓産サヌカイト製とみられる。I 102は楔形石器。最大長3.7cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm、重さ7.7g。両側面に剪断痕があるほか、ごく一部に海綿状の自然面が残る。両面の上下に密集する潰れ痕があり、両極打法の残核としての楔形石器と認定される。二条山北麓産サヌカイト製とみられる。I 103は石器素材の剥片を直接打法により剥離した石核。最大長5.9cm、幅4.7cm、厚さ2.6cm、重さ61.1g。海綿状の原礫面が残存しており、二条山北麓産サヌカイト製とみられる。I 104は削器。最大長7.9cm、幅7.1cm、厚さ1.3cm、重さ72.8g。図上の右側に示した面は大きなボジ面であり、直接打法で剥離された剥片を素材としている。二上山北麓産サヌカイト製とみられ、二次加工された刃部は、白っぽい黒灰色である素材に対して、明らかに風化度が異なっている。I 105は敲石。最大長10.0cm、幅7.9cm、厚さ4.9cm、重さ541.1g、花崗斑岩の円礫を用いている。両側面の2カ所に主使用部位とみられる大きな凹みがある。

以上の石器は、石鏃については、形状からみて縄文後期～晩期のものとみられ、出土土器の時期幅と大きく矛盾しない。その他の資料については、縄文後期～弥生前期までの幅の中でとらえられよう。

4 古墳時代および古代の遺跡

(1) 遺 構 (図版2・3・7・8, 図16・17)

北区・南区とも、おおむねY=2080ライン以西については、中世以降の土取りにより基盤の黄褐色粘質土上部まで削平されてしまっており、深い掘り込みをともなった井戸SE12を除いて、遺構・遺物包含層とも全く確認できなかった。そのほかの遺構も、近現代の攪乱や中世以降の遺構に寸断されて、とくに北区では遺存が芳しくなかったが、南区では

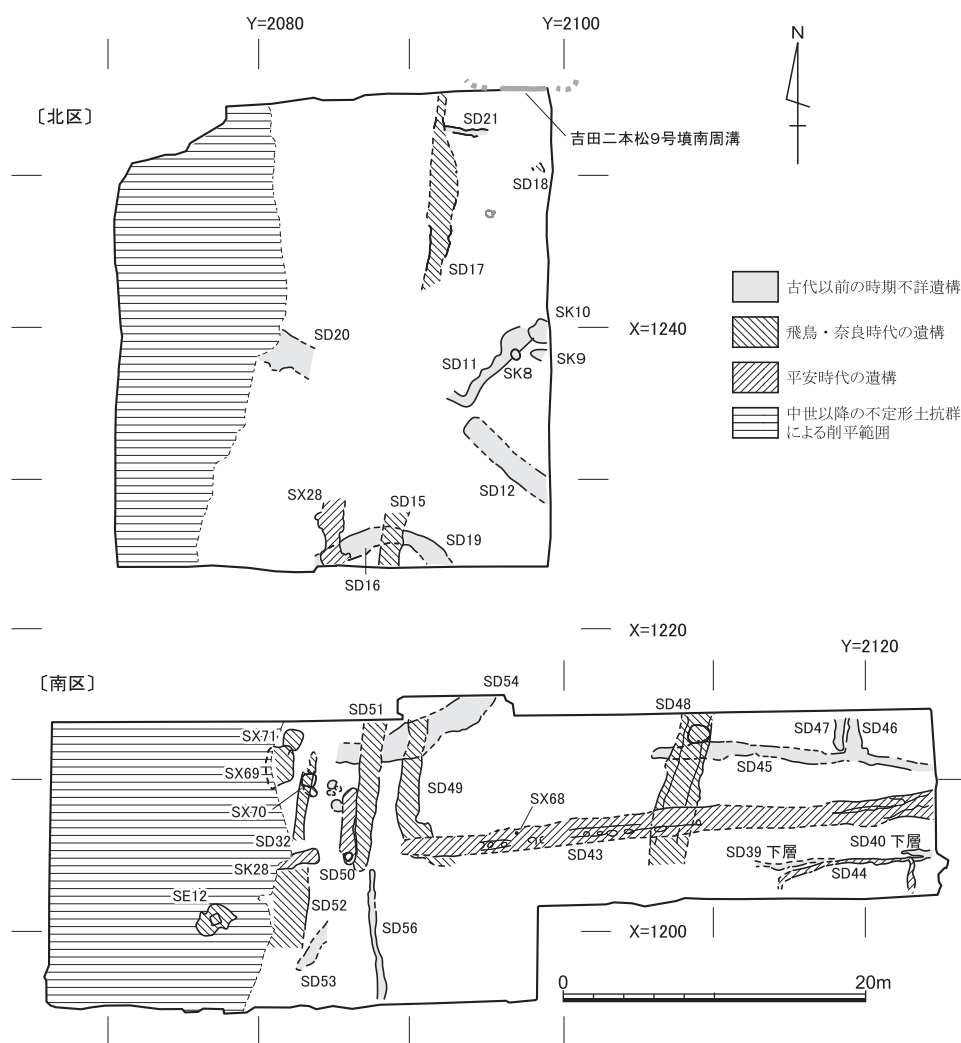


図16 古墳時代～古代の主要遺構配置図 縮尺1/500

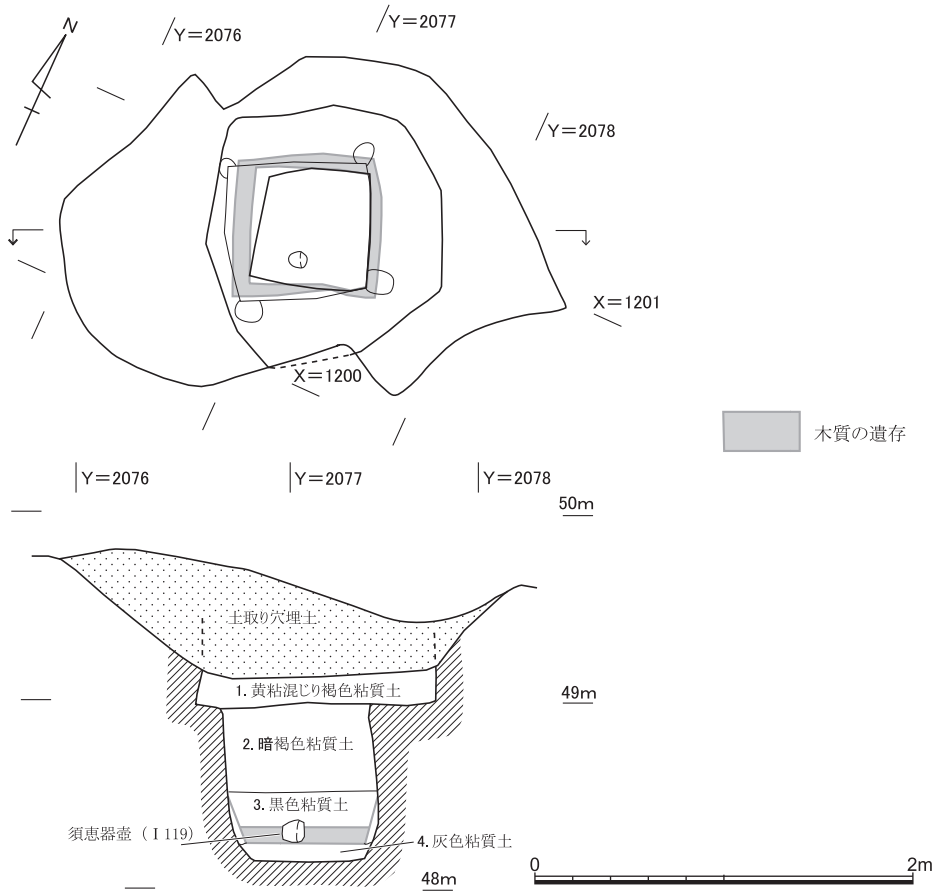


図17 井戸SE12 縮尺1/40

奈良・平安時代の溝を中心に複数が確認できている。当該地点付近が、古代において土地区画上の意味ある位置であったことを示している。以下、時期不詳のものも含め、おおむね時代順に報告する。

古代以前の時期不詳遺構 埋土からの出土遺物が無いために時期が特定できない遺構が複数ある。これらは、輪郭不鮮明なものも多いが、淡褐色土や黒褐色土を埋土とする溝状の遺構の可能性が高いのは、北区のSD11・12・16・19・20、南区のSD45～47・53・54などである。切り合い関係などから、遺構とすれば奈良時代以前と考えられ、北側に隣接する361地点で弥生時代中期の方形周溝墓や5世紀代の方墳が検出されていることや、溝の方向性を考慮すると、それらの周溝の残存であったのかもしれない。直接はともなわれないが、弥生時代中期や古墳時代の須恵器が少量出土していることも、その可能性を裏付

けると言えるが、決め手は欠いている。

なお、調査区北壁付近で、361地点で見つかった9号墳の南周溝に相当する溝を確認している。位置関係から周溝であるのは確実だが、溝内からの出土遺物はない。

飛鳥・奈良時代の遺構 黒褐色土を埋土とする溝状遺構がほとんどで、出土土器から、南区のS D 52が7世紀前半の飛鳥時代の可能性があり、それ以外はおおむね8世紀半ばの奈良時代とみられる。奈良時代はおもに南北方向にはしるもので、北区のS D 15・17と南区のS D 51は、一連のものかも知れない。S D 48・49は幅1.5～2 m深さ0.5m前後の浅く広い溝で、S D 49は東へと屈曲するように検出されている。S X 69・71は方形の深い土坑で、土壌混じりの粗砂で埋積していた。奈良時代の遺物しか含まれておらず、便宜的にその時期に位置づけておくと、下の時期の土取りの遺構であった可能性もある。

奈良時代の井戸 S E 12 中世の土取り穴である不定形土坑の底面に、基盤の黄褐色粘質土を掘り込んだ方形井戸の残存として確認できた(図版8, 図17)。検出時には、1.2m程度の不正方形の輪郭が、黄粘混じり茶褐色土を埋土として検出されたが、掘り下げはじめるとすぐに暗褐色粘質土が密に詰まった80cm四方程度の方形の輪郭が現れた。遺物をほとんど含まないこの暗褐色粘質土を60cm程掘り下げると、黒色の粘質土へと埋土が変わり、壁面に枅板の木質が残存するようになった。そして、黒色粘質土に包まれるように、須恵器壺胴部(図19-I 119, 頸部は分離して出土)が横倒しで出土し、この時点で壁面からの湧水がみられるようになった。須恵器壺よりも下は、灰色粘質土が膜状に薄く堆積するのみであった。最低面のレベルは48.16m。こうした埋積状況から、最下層の灰色粘質土は井戸使用時の堆積で、須恵器壺は釣瓶として使用されていた可能性があろう。それが放棄された後も、黒色粘質土が埋積するに至る期間は井戸として使われていた可能性があるが、その後使用不能となり一気に埋められたものと思われる。枅板の木質の遺存は良好ではなかったが、4点について樹種同定を依頼したところ、ヒノキ科のアスナロ(*Thujopsis dolabrata*)との結果を得た(生存圏研究所・杉山淳司氏による)。そして、四隅に小さな円形の痕跡を検出していることから、横板組隅柱留めの構造であった可能性が高いと判断される。

平安時代の遺構 南区を東西方向に横断する溝状遺構S D 43が、この時期の最も目立つ遺構である。Y = 2090付近から調査区東壁まで35m程度を確認している。検出幅は2 m程度の規模だが、内部で2条に別れて検出され、断面で検討する限り北側から南側へと幅1 mあまりの溝がずらして掘り直しされている。南側の溝の底は、一部で布掘りの基礎状

を呈しており、数十cmの短い間隔で並ぶピットに根石を据えたものが並んでいた。このことからS D43は、溝ではなく堀などの基礎であった可能性があろう。Y=2090付近で一旦立ち上がって途切れ、5 mあまり隔てて、同一方向の振れの東西に長い土坑S K28がある。S K28は西側を土取り穴で破壊されているので、S D43と同様な溝がさらに西へと続いていた可能性も考えられよう。このS K28からは10世紀前葉の土師器皿がまとまって出土している。S D43からは、10世紀後葉までのやや時期幅のある資料が出土している。おおむね10世紀代に、区画として重要な位置にあった遺構と評価されよう。

S X68は、南区中央付近で、S D43の埋土上面で検出された牛歯の一括出土（図版8-5）。上顎の左側かとみられるが、性別や年齢は遺存が悪く定かにできなかった（菊地大樹氏の鑑定による）。

S D39・40・44は南区東南辺付近に互いに切り合いながらはしる溝群。上面が削平されており、溝底付近が細く検出され、また攪乱に寸断されているため、正確な切り合いを復元しがたい。東西方向を基本とするが、S D44はコ字状に南へと屈曲してはしる。S D39・40は、上層からは中世に下る遺物も出土しているが、埋積の状態や出土遺物からみて本来的には平安中期～後期ごろの溝群であり、埋まりきっていない時点の中世に攪拌を受けた可能性が高いと思われる。

S D50は、南区中央付近の南北溝で、奈良時代の溝S D49を切ってはしる。ただし、南・北とも調査区内で立ち上がるため、長さ5 mあまりの細長い土坑状の遺構とも言いうる。9～10世紀代の遺物が出土している。東西溝S D43が途切れて土坑S K28との間の空地にあることから、区画としてそれらと関連する遺構の可能性も考えられよう。

S X28は、北区南辺を南北にはしる不定型な土坑。粗砂と土壌が互層になる埋土で、土取りの遺構かもしれない。微量の平安期以前の遺物が出土している。

(2) 遺物（図版14、図18～24）

古墳時代の遺物（I 106～I 112） 古墳時代の遺物は、中世・近世の遺構や包含層への混入として少量出土した。

I 106～I 111は須恵器。I 106は杯蓋で、天井部にロクロ削りが施される。内面は紫灰色、外面は青灰色である。I 107は杯身で、立ち上がりは長く、外反する。灰色を呈し、体部外面に自然釉が付着する。これら杯蓋と杯身は陶邑編年のT K43型式、6世紀後葉ころのものかと思われる。I 108は器種不明の筒状製品で、器台の一部であったかも知れない。回転を利用した成形痕が顕著で、仮に細くすばまる方を下と考えて図示した。内外面はと

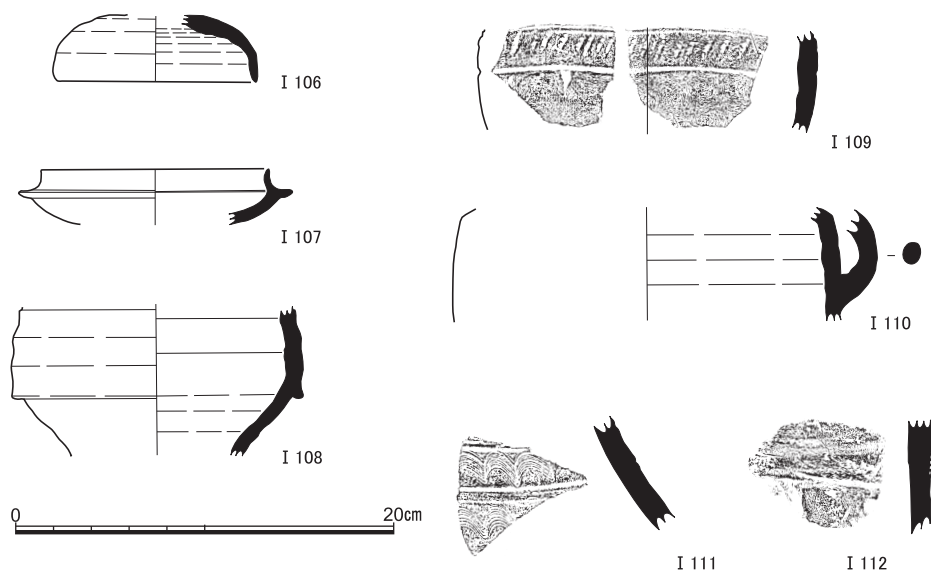


図18 古墳時代の遺物（I 106～I 111須恵器，I 112埴輪）

もに黒色を呈する。I 109は甕の体部である。上下2条の凹線に挟まれて、列点文が1帯めぐる。灰色を呈する。I 110は把手付の体部で、稜をもって屈曲する肩部がわずかに残るが、器種は不明である。把手は断面円形で、灰色を呈する。I 111は器台の破片であろう。二条の沈線と櫛描波状文が交互にみられる。灰褐色を呈する。

I 112は円筒埴輪の破片である。幅1.3cmの突帯が貼り付けられる。器壁の厚さは1.2cmで、突帯の高さは4mmほどある。外面では斜め方向の刷毛目が確認できる。黄橙色を呈する。

古代の遺物（I 113～I 214） 古代の遺物は、飛鳥時代～平安時代のものがあり、黒褐色土や茶褐色土を埋土とする遺構や、包含層である黒褐色土から出土したほか、後世の遺構や包含層からも多数出土している。

S E 12出土遺物（I 113～I 123） I 113～I 119は須恵器。I 113・I 114は杯蓋である。扁平で、いずれも、口縁端部を下方に屈曲させる。I 113は青灰色で、天井部に緑色の自然釉が付着する。I 114は灰色を呈する。I 115は鉄鉢形の鉢の口縁部である。内外面全体が横撫でによって調整される。灰色を呈する。I 116はI 115と同種の鉢の尖底部である。粘土を積み上げた痕跡が明瞭に残る。灰色を呈し、外面には緑色の自然釉が付着する。I 117は大型の甕の頸部であろうか。外面に2重に篋描波状文が施される。I 118は壺の口縁部である。全体が撫で調整される。灰色を呈する。I 119は長頸壺で、口縁端部を欠く

以外完存する。井戸底部付近で横倒しの状態で出土したものである。断面四辺形の高台がつき、外面全体と内面頸部には撫で調整が施される。青灰色を呈する。

I 120～I 123は土師器。I 120・I 121は甕の口縁部。I 120は厚手の器壁で、口縁部の内外面に撫で調整が施される。体部外面には煤が付く。黄橙色を呈する。I 121の外面は摩滅が激しいが、頸部に刷毛目調整の痕跡がみられる。また頸部内面には煤が付着する。橙色を呈する。I 122は皿の口縁部と考えられる。内面に撫で調整が施される。明褐色を呈する。I 123は退化した把手がつく甕の胴部。外面に縦方向、横方向、斜め方向の刷毛目が残る。浅黄橙色を呈する。

S E12から出土した遺物には、MT21型式の須恵器が含まれる。このような様相から見て遺構の年代は8世紀半ばごろの奈良時代に比定できる。

S K28出土遺物（I 124～I 126） I 124・I 125は土師器の皿。両者ともに口縁が「て」字状に屈曲するB₂類の皿である。口縁部は撫で調整される。I 124は明赤褐色を、I 125は橙色を呈する。I 126は須恵器の杯Bである。断面方形の高台がつく。全体に撫で調整が施された。灰色を呈する。B₂類の土師器皿が出土していることから、S K28は10世紀前葉ごろの遺構と考えられる。

S X69出土遺物（I 127） I 127は須恵器の杯Aである。底部外面には篋切りの痕が残る。MT21型式のもので、8世紀の奈良時代の遺物である。

S X28出土遺物（I 128・I 129） I 128は須恵器碗の口縁部。青灰色を呈する。I 129は緑釉陶器碗の底部。高台の断面形は台形である。内外面全体に施釉されている。

黒褐色土出土遺物（I 130） I 130は須恵器の甕の口縁部。端部が上方に立ち上がる形態である。内面の頸部には自然釉がかかり、口縁部には煤が付着する。青灰色を呈する。

S D17出土遺物（I 131・I 132） I 131・I 132は須恵器。I 131は壺の口縁部と考えられる。口縁端部が上方にわずかに立ち上がる。全面に撫で調整が施される。I 132は杯の口縁部の小片である。MT21型式で、8世紀の奈良時代のものと考えられる。

S D18出土遺物（I 133） I 133は須恵器の杯B。断面台形の高台の底部はわずかにくぼむ。底部外面には爪の痕が並ぶ。奈良時代～平安時代はじめころの杯であろう。

S D39出土遺物（I 134） I 134は平安時代末～中世の土師器受け皿。このS D39からはほかに古代の遺物が多数出土しているが、この土師器からみて、最終的な埋没は古代末期～中世にかけてであったと考えられる。

S D43出土遺物（I 135～I 143） I 135～I 138は須恵器。I 135とI 138は平底の壺

古墳時代および古代の遺跡

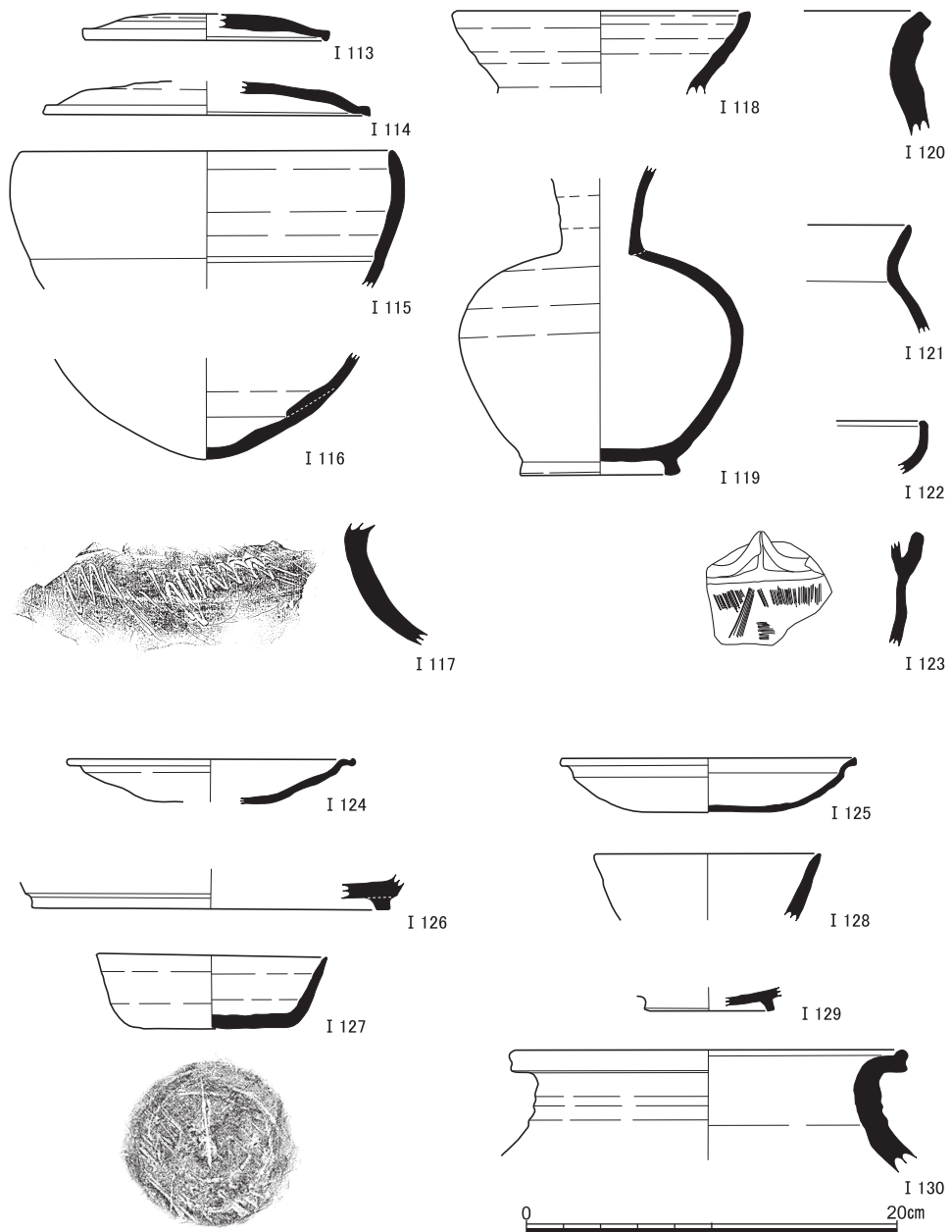


図19 S E12出土遺物（I 113～I 119須恵器，I 120～I 123土師器），S K28出土遺物（I 124・I 125土師器，I 126須恵器），S X69出土遺物（I 127須恵器），S X28出土遺物（I 128須恵器，I 129緑釉陶器），黒褐色土出土遺物（I 130須恵器）

の底部と考えられる。いずれも灰色を呈する。I 136は平瓶である。I 137は杯Bの底部。丸みを帯びた断面形の高台がつく。灰色を呈し、外面の一部に自然釉が付着する。TK7型式である。I 139は灰釉陶器。高台の断面形は丸みを帯びる。灰白色を呈する。I 140は砥石である。I 141～I 143は土師器。I 141は口縁が「て」字状に屈曲する皿。B₃類である。I 142は製塩土器口縁部。粘土の積み上げ痕が残る。内面を指で押さえている。I 143は把手。断面形は円形である。9世紀～10世紀ころの遺物が混在している。

SD48出土遺物 (I 144) I 144は土師器で、内彎する甕の口縁部。端部は面取りされる。奈良時代の製品であろう。

SD49出土遺物 (I 145～I 148) I 145とI 146は須恵器。I 145は甕の口縁部と考えられる。外面の口縁下には段がある。灰色を呈する。I 146は壺の口縁部であろうか。青灰色を呈する。I 147とI 148は土師器。I 147は大型の甕の口縁部である。橙色を呈する。I 148は小型の壺の口縁部であろうか。全面が撫で調整される。明赤褐色を呈する。いずれも奈良時代の遺物と考えられる。

SD50出土遺物 (I 149・I 150) I 149とI 150は土師器である。I 149は土釜。口縁部に続く分厚い鍰がめぐっており、鍰の下面には煤が付着する。黄橙色を呈する。摂津C₂型〔菅原83〕の初現のものに比定でき、10世紀のものである。I 150は甕。口縁端部がやや内側に肥厚する。口縁部の内外面が撫で調整される。橙色を呈する。

SD51出土遺物 (I 151～I 153) I 151～I 153は須恵器。I 151はTK217型式の杯蓋である。I 152は碗の口縁部である。全面に横撫でが施される。I 153は平高台をもつ底部。内面に撫で調整の痕跡が残る。図示した遺物のほかに、奈良時代の土師器が多数出土している。

SD52出土遺物 (I 154) I 154は須恵器の杯蓋。内面にかえりがある。灰色を呈する。TK217型式の蓋であり、飛鳥時代の遺物である。

中世以降の遺構や包含層への混入遺物 (I 155～I 214) 中世以降の遺構や包含層から出土した古代の遺物を、おおむね種類ごとにまとめて報告しておく。

I 155～I 167は土師器。I 155とI 159は高坏で、I 155は杯部から脚部にかけての部分。脚部の外面は十面に細かく面取りされる。また、脚部製作時に使用された軸は六角形であったようだ。杯部の内外面と脚部の外面は、篋削りされる。胎土の色調は橙色。I 159は杯部で、口縁端部がわずかに上方に突出する。内面には横撫で調整の後に2段の放射状の暗文が施され、外面は磨かれる。赤褐色を呈する。8世紀の遺物である。I 156～I 158は

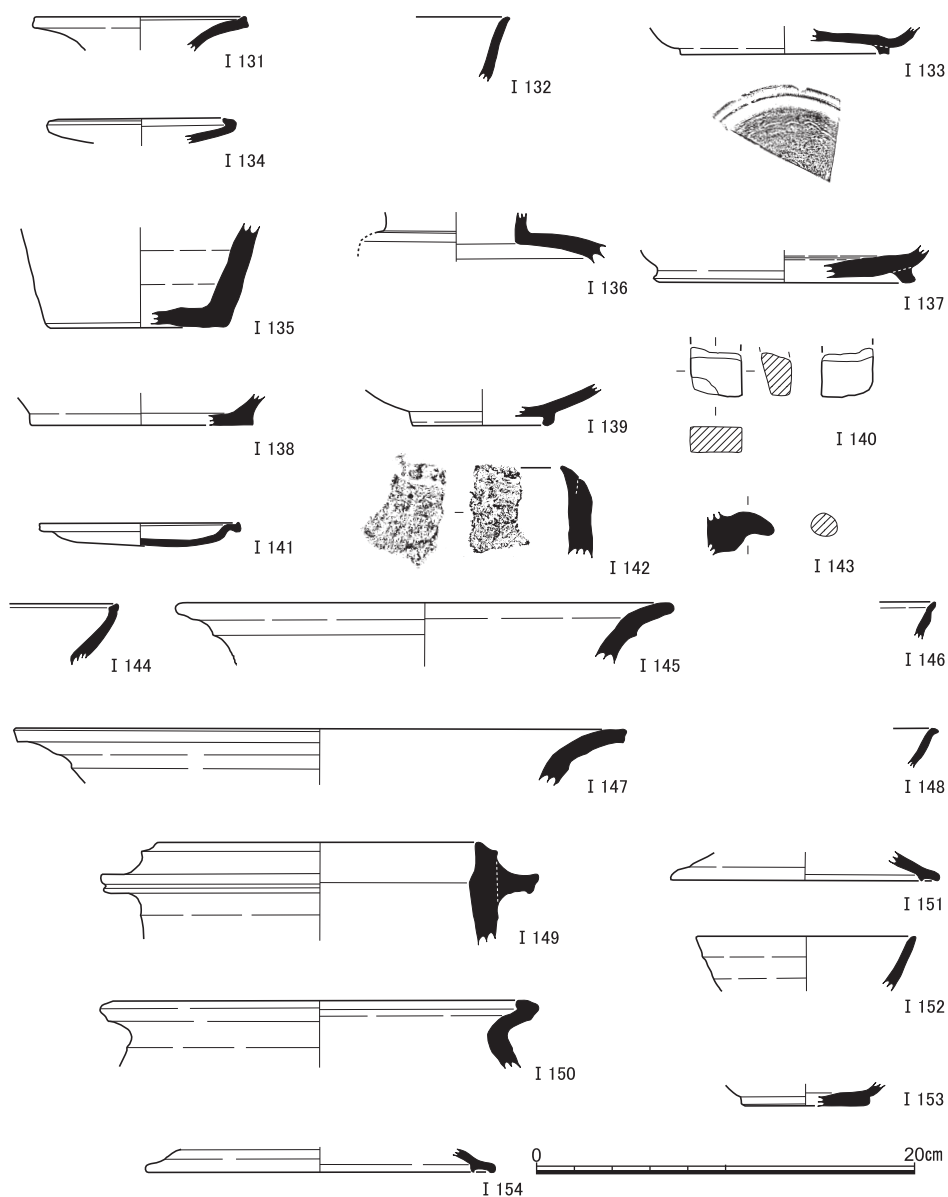


図20 S D17出土遺物 (I 131・I 132須恵器), S D18出土遺物 (I 133須恵器), S D39出土遺物 (I 134土師器), S D43出土遺物 (I 135～I 138須恵器, I 139灰釉陶器, I 140砥石, I 141～I 143土師器), S D48出土遺物 (I 144土師器), S D49出土遺物 (I 145・I 146須恵器, I 147・I 148土師器), S D50出土遺物 (I 149・I 150土師器), S D51出土遺物 (I 151～I 153須恵器), S D52出土遺物 (I 154須恵器)

皿。I 156・I 157の内面には放射状に暗文が施される。I 156の口縁の内面には面取りが施されるが、端部が内傾し凹面となっている。8世紀代のものであろう。I 157・I 158の口縁部は「て」字状で、I 157はB₃類、I 158はB₁類である。10世紀ごろのものである。I 158の外面には指頭で押圧した痕が残る。I 160～I 167は甕。I 160とI 161は褐色を呈し、外面に煤が付着する。I 162の口縁端部は上方に肥厚する。内面には横方向の刷毛目が、外面には縦方向の刷毛目が残る。黄橙色を呈する。口縁部外面に煤が付着する。I 163の口縁端部もわずかに上方に肥厚する。口縁部内面には横方向の刷毛目が、体部外面には斜め方向の刷毛目が残る。体部の内面は篋削りが施される。浅黄橙色を呈する。I 164は口縁端部が面取りされる。体部外面には縦方向の刷毛目が、口縁部内面には斜め方向の刷毛目が残る。口縁部に近い箇所では部分的に刷毛目が撫でにより消されている。褐色を呈する。I 165の口縁端部は内側に大きく屈曲する。頸部外面は指で押圧され、体部外面には篋で平面がつくられる。褐色を呈する。口縁部と肩部の外面には煤が付着する。I 166はほかに比べて小型の甕である。口縁端部は丸みを帯びる。体部の外面には斜め方向の刷毛目が、内面には横方向の刷毛目が残る。褐色を呈する。I 167の口縁端部はわずかにくぼむ。口縁部の内外面は撫で調整され、体部の内外面は刷毛で調整される。内外面には斜め方向の刷毛目が残るが、内面には縦方向のものもある。褐色を呈する。

I 168～I 198は須恵器。I 168～I 170は壺の口縁部である。I 168の肩部外面には2条の沈線が走る。また、緑色の自然釉が付着する。TK209型式に比定でき7世紀初めのものである。I 169の肩部内面には当て具痕が残る。灰色を呈し、口縁部の内外面には自然釉が付着する。MT217型式で7世紀前葉のものである。I 170の体部外面には1条の凹線が走る。青灰色を呈し、口縁部から頸部の内面には、自然釉が付着する。7世紀初めころのものであろう。I 171は長胴壺の胴部である。外面の肩部には平行叩き痕が残る。肩部内面に爪痕がめぐる。また、胴部の内面には青海波文の当て具痕が残る。胎土は灰色である。I 172・I 173は小型壺である。いずれも青灰色を呈する。口縁部であるI 172は、外反する口縁の下端を鋭く突出させる。I 173の体部外面は篋で削られ、肩部外面には緑色の自然釉が付着する。9～10世紀代のものだろう。I 174は長頸壺の口縁部である。青灰色を呈し、内外面が撫で調整される。I 175～I 178は壺の底部と考えられる。I 175のみ平底で、ほかは高台を有する。I 175は灰色を呈するが、内面と外面底部は黒色である。I 176は青灰色を呈する。I 177も同様に青灰色を呈するが、体部外面は黒色である。I 178の外面は篋で削られる。灰色を呈し、底部内面と体部の一部に自然釉がかかる。MT

古墳時代および古代の遺跡

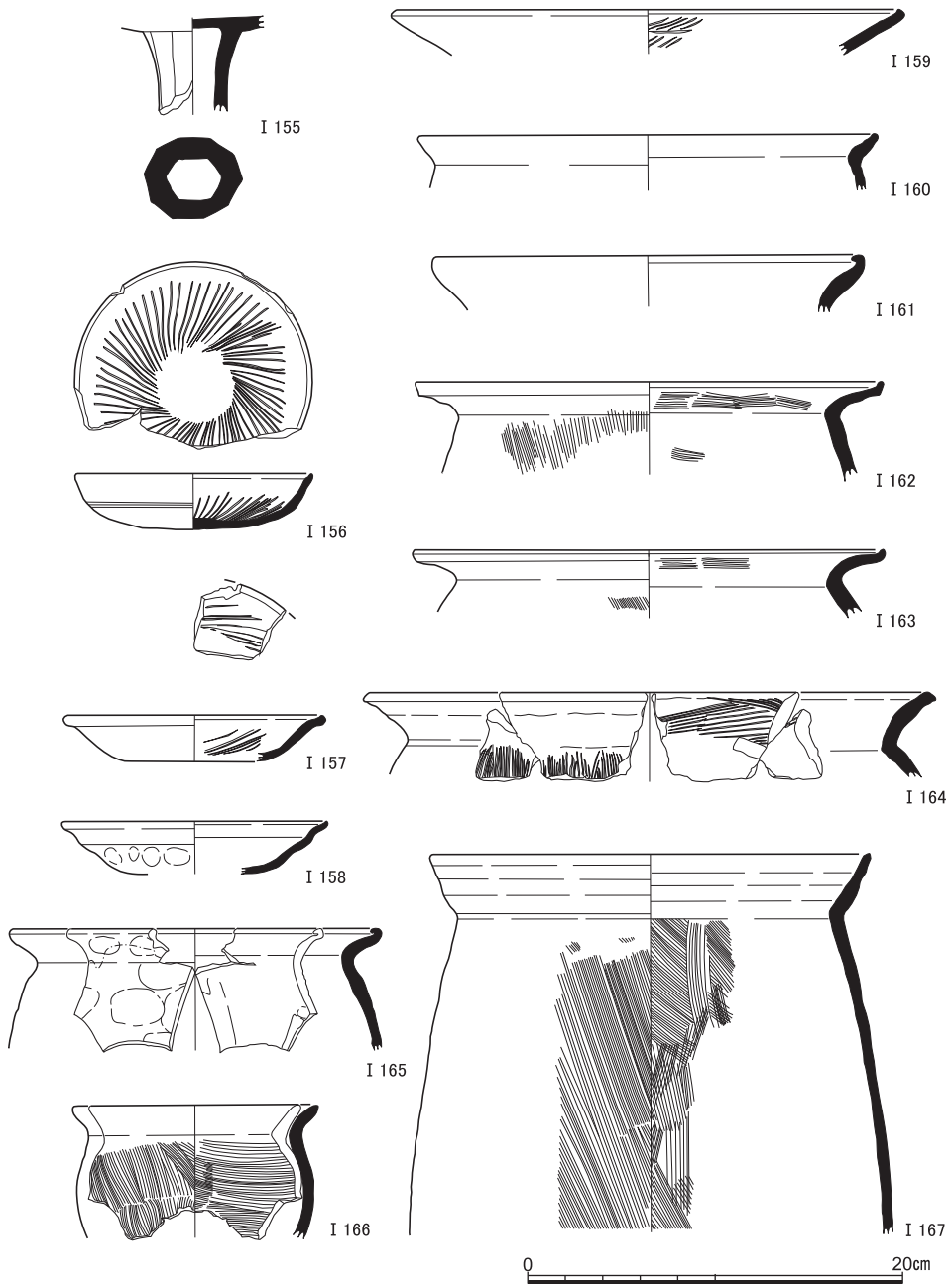


図21 古代の遺物(1) (I 155～I 167土師器)

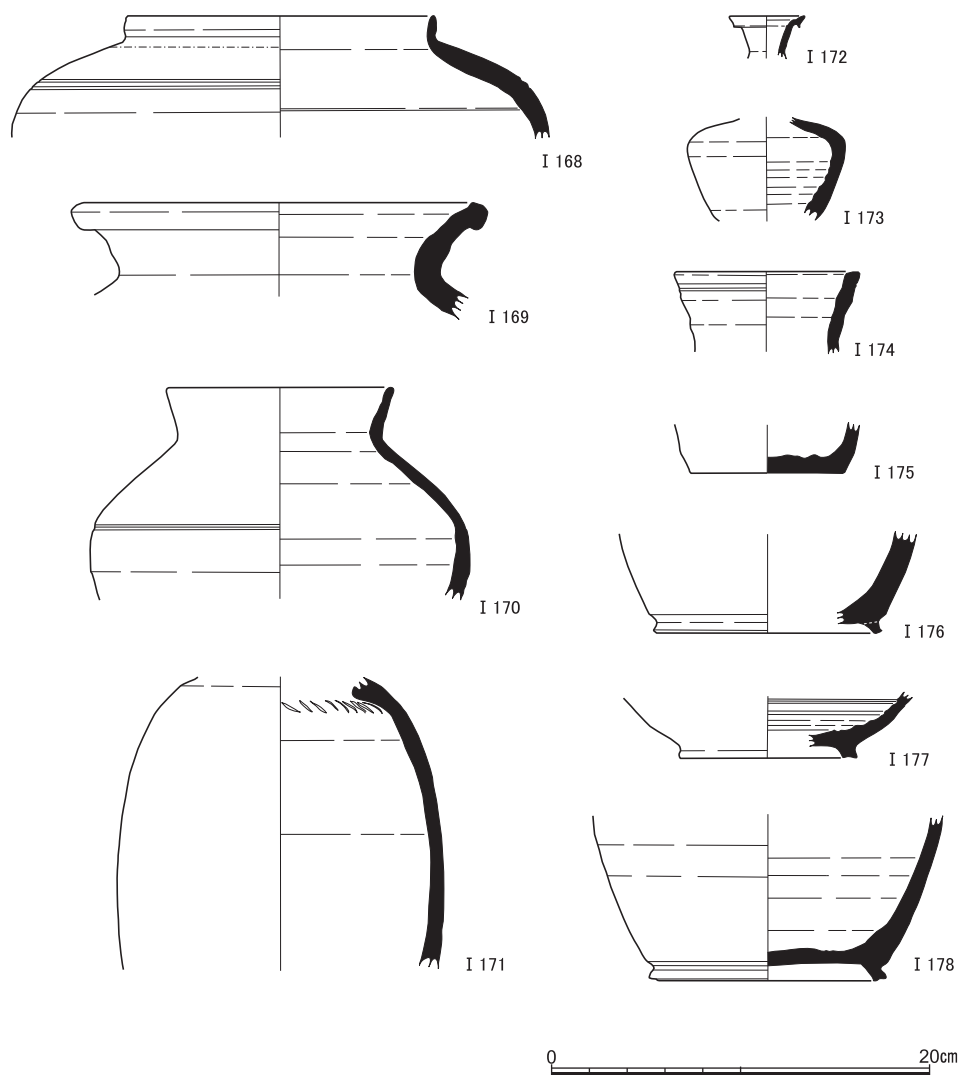


図22 古代の遺物(2) (I 168～I 178須恵器)

古墳時代および古代の遺跡

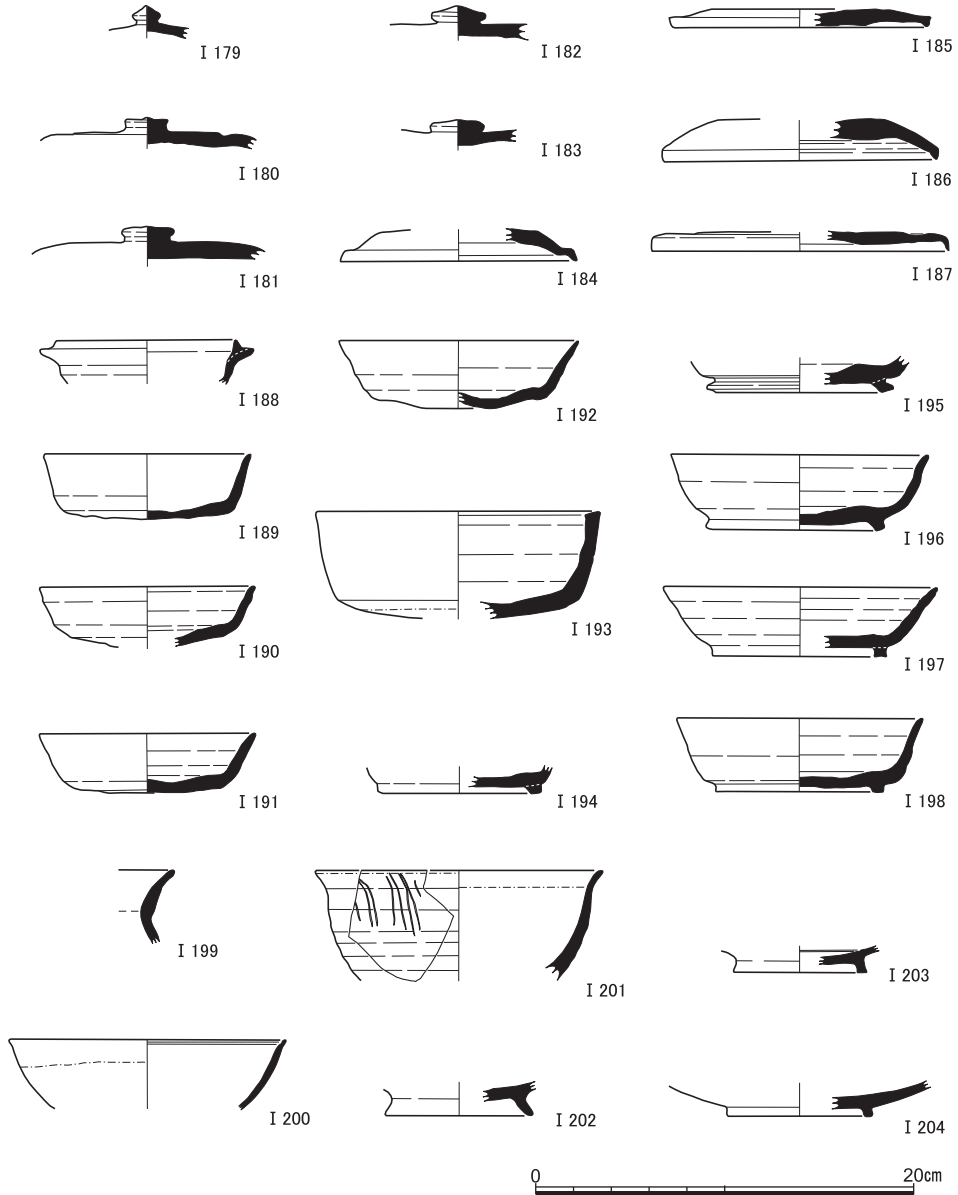


図23 古代の遺物(3) (I 179～ I 198須恵器, I199・I200黒色土器, I201・I202灰釉陶器, I203・I204緑釉陶器)

7型式で8世紀初めのものと考えられる。I 179～I 187は杯蓋である。I 181のみ白色で焼成がわるい。I 184は青灰色を呈するが、ほかは灰色である。I 179～I 183にはつまみが残る。I 179のみ乳頭形で、ほかは断面形が扁平なものである。I 184・I 186・I 187には口縁部が残る。いずれも口縁端部は下方に短く折り曲がる。I 185・I 186の天井部外面全体およびI 187の一部に自然釉が付着する。I 179はTK217型式で7世紀、ほかは8世紀代のものであろう。I 188～I 193は杯Aである。I 188のみ立ち上がりをもつ。I 194～I 198は杯Bである。高台はおおむね断面四辺形を呈する。I 197の高台の端面はわずかにくぼむ。杯身については、I 188が7世紀、ほかは8世紀代のものであろう。

I 199とI 200は黒色土器。I 199は甕の口縁部で、胴部内面に刷毛目とみられる痕跡が残る。I 200は椀で、口縁端部内面に一条の沈線が走る。外面口縁部に指撫で、内面に数条の削痕がみられる。

I 201とI 202は灰釉陶器の椀。I 201は外面に縦位の細線が複数走る。I 202は外側に踏ん張る高台が付く。I 203とI 204は緑釉陶器。いずれも椀の底部である。I 203は見込みに一条の圈線をもち、高台は端部が角張っている。I 204の高台は丸みを帯びる。

I 205～I 209は製塩土器。I 205は体部。内面に指撫でと押圧の痕が残る。橙色を呈する。I 206～I 209は口縁部で、I 206の外面には指で押圧した痕が残る。内面には指撫でが施される。明褐色を呈する。I 207の内面には指撫でによる調整の痕が残る。橙色を呈する。I 208の内面には斜め方向の篋削りの痕が残る。粘土紐を積み上げた痕跡がみられる。ほかとくらべて焼成があまく、にぶい黄色を呈する。I 209は小片で、橙色を呈する。

I 210は墨書土師器片。内面とみられる側には縦に約3mmを単位とする細かい篋磨きがみられる。その上に「庭」の字が墨書される。外面にはとくに調整はみとめられない。厚さは4mmで、明赤褐色を呈する。器種は不明だが奈良時代の製品であろうか。南区中央付近の茶褐色土から出土している。I 211は土馬の脚部か。長辺方向に数条の稜が走り、らせん状に数条の浅いくぼみがある。にぶい黄橙色を呈する。I 212・I 213は鋳型であろう。I 212は唐草文様の型で、胎土に8mm大の石を含む。鋳造をおこなった面は橙色を呈するが、ほかは灰黄色である。また、凹部に煤が付着する。I 213の内面側は灰色で、多条の細線が走る。外面は橙色、断面は浅黄色である。I 214はふいご羽口片。胎土に5mm大の砂礫やすさが混じる。外面に粉痕らしきものもみられる。これら鋳造関連遺物は、上層への混入出土であることから古代に限定できるものではないが、北方の220地点等で平安時代の鋳造土坑が見つかったことも考慮して、ここに呈示しておく。

古墳時代および古代の遺跡

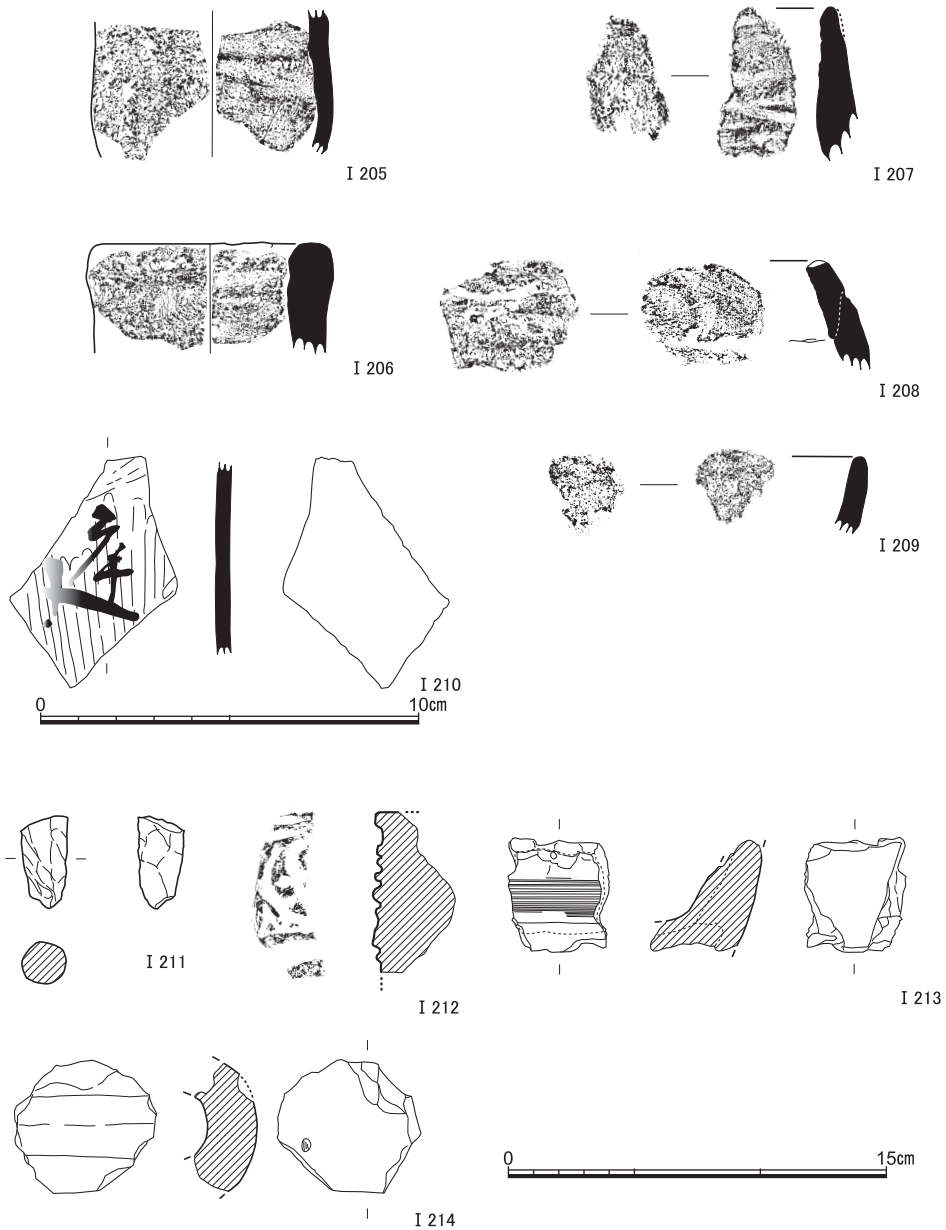


図24 古代の遺物(4) (I 205～I 209製塩土器, I 210墨書土器, I 211土馬, I 212・I 213鋳型, I 214ふいご) I 210縮尺1/2, ほか縮尺1/3

5 中世の遺跡

(1) 遺 構 (図版 2・3・5～9, 図25～27)

出土土器からみて, おおむね13～15世紀代, 鎌倉・室町期を通じた時期幅の各種の遺構が密度濃く検出されている。遺物の項で詳述するように, 土師器皿の様相から, 中世1期(13世紀前半), 中世2期(同後半), 中世3期(14世紀), 中世4期(15世紀)の4つの段階に区分できるが, 細別時期を特定できない遺構も多いため, ここでは中世1期・2期を中世前半, 中世3・4期を中世後半, と大別して図示する。以下, この大別に従いつつ, おおむね遺構の種類・性格毎にまとめながら, 説明する。

中世不定形土坑 (図版 7) 調査地の基盤層である黄褐色粘質土を採取したとみられる不定型なクレーター状の掘り込みが, Y=2080付近以西に連続してひろがっている。北区の北西部X=1240付近より北は, 近世の同種遺構が存在していることから, 中世の段階の土取り範囲の北限がおおむねその付近であったことがわかる。大半の範囲が, おおよそ1人が掘削作業するスペースとなるような2mたらず程度の広さの不定型な凹みの連続となっているが, 南区南西域付近は, 1人が列状に進んだかのような1m幅程度の溝状の連続掘削痕がある。黄褐色粘質土の堆積最上部からの深さは, おおむね1m前後であり, 粘土の採掘はその程度の厚みであったことがうかがえるが, 本来はその上部に黄砂などが50cm以上は堆積していたとみられるので, 中世段階における地表面からの掘削深は, 1.5m～2m程度に達するものであったと推察される。人力での少人数での掘削や搬出の作業効率を考えると, 妥当な規模と言えるかも知れない。ただし, 南区の北西域は掘削が浅く残されており, その付近の黄褐色粘質土が, 砂礫混じりの質の劣る粘土であることに帰因する可能性が高い。また, 下層の流路SR1によって粘土の堆積がみられないラインを掘削域の東限としている。このように, 掘削の深度や範囲は, 作業効率のみならず, 対象となる土の質にも影響されていたとみることができよう。

これら不定形土坑の埋土は, 中世の遺物包含層である茶褐色土と黄褐色粘質土が互層に縞状を呈しており(図版5～6参照), 出土遺物は茶褐色土中に含まれる中世前半期の土師器皿類が大半を占める。これらは粘土採掘時にすでに堆積していた包含層や遺構中の遺物であるとみて, 土の採掘そのものは, 中世後半期の行為であったと想定するのが自然であろう。しかしながら, 含まれる中世前半期の遺物量は多く遺存度も良好であることから, 土の採取以前にも活発な利用がされていた事をうかがわせる。

中世の遺跡

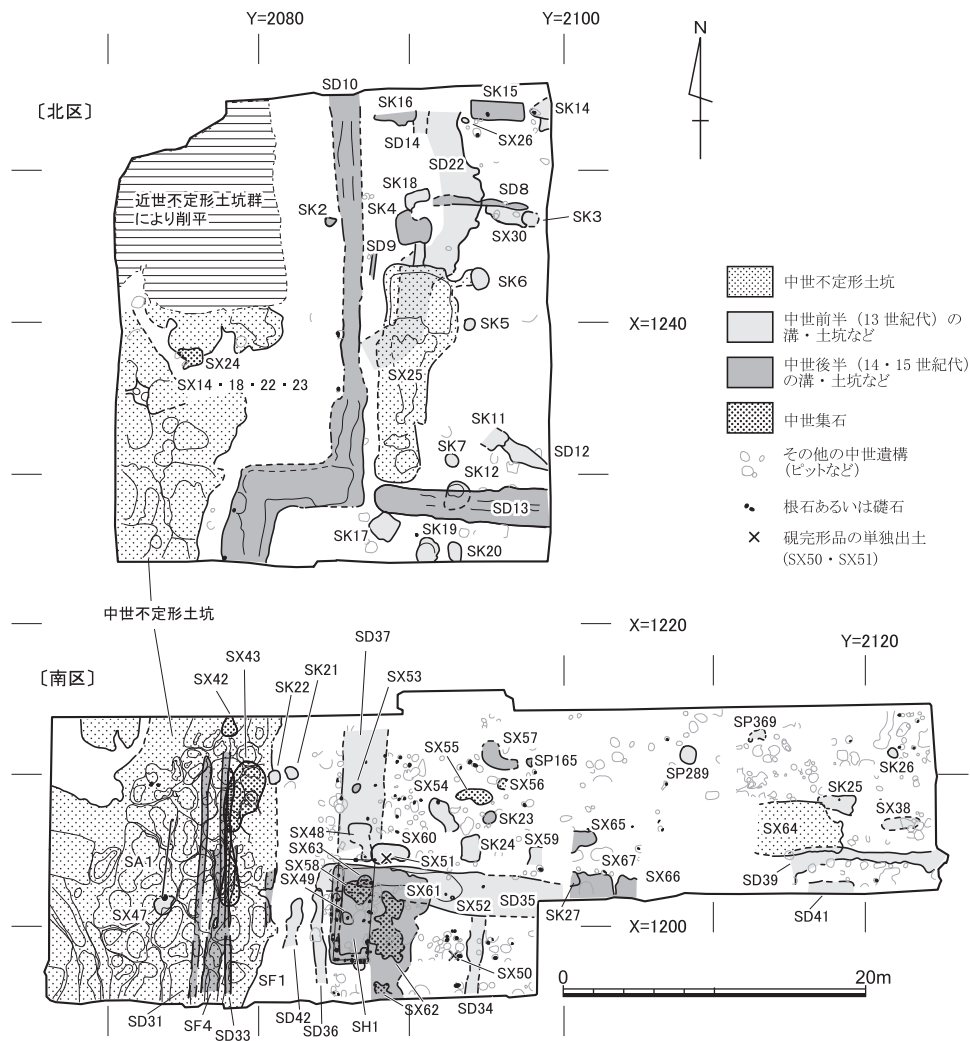


図25 中世主要遺構配置図 縮尺1/500

不定形土坑 S X25・27・64 上記のほかにも、類似の性格を持つとみられる遺構に、北区中央付近を南北に連なる S X25・27、南区東辺に大土坑 S X64がある。S X25・27は、おもに流路 S R 3 に由来する白色粗砂の堆積する空間にあり、南端の S X27が井戸状に方形に深くなっているほか、北辺部は隅丸方形に浅く広がるなど、輪郭、深さとも一定しない。状況から、白色粗砂を採取した跡が複数連なったものと理解しておきたい。中世前半期を中心とする各種の土器類、とくに大型の瓦器盤片などが目立って出土しており、最終的には廃棄土坑となったものとみられる。S X64は、平面形が 5 × 3 m 程度の隅丸長方形

状になるとみられる大型土坑。深さ1 m足らずで、底面は黄褐色粘土層で細かな凹凸が卓越している。この一帯も粗砂層の堆積する空間であり、粘土の採取というよりは上位の粗砂を採取した跡である可能性が高い。整理箱2箱分の遺物が出土し、下位から中世後半期、上位から中世前半期が主体となるように、時期が逆転して土器群が出土しており、中世後半期に人為的に埋め戻された可能性がある。

東西溝S D 13 北区南辺を、真北からわずかに東に振る傾きで、東西にはしる、幅3 m深さ1.2m程度の断面矩形に近い大溝。(図26, 図版5-5)に示すように、南北の壁面は垂直に近い角度でたちあがり、埋土も上半が均質な茶褐色砂質土、下半が黄色粘土混じりの茶褐色土の2層のみで埋積する。人為的に一気に埋められた可能性を示唆していよう。北壁際は、褐色粘土や粗砂のブロック土が不自然な堆積を見せ、ただの崩落ではなく、地震などの影響による地盤変動の可能性も考えられる。中世前半の土坑S K 12を切るが、南北溝S D 10とは切り合わず、そのすぐ東側Y = 2090付近でたちあがる。『山城國吉田村古図』にみる江戸時代の小字名比定を参照すると(吉江2006 図182)、南側の小字「堀之内」と北側の「西の辻」を隔てる東西のラインが、おおよそS D 13のはしる位置にあたっている。この場が中世以来重要な地境であり、それを示す溝であったと考え得るが、断面形や埋土の状態などから、本来は土取りの遺構であった可能性もあろう。

南北溝S D 10 北区の中央付近を南北にはしる、幅2 m深さ1 mあまりの断面U字形の溝。おおよそ10m程度ずつで方位のずれが微妙にあり、わずかなジグザグを呈しながら南北にはしっている。掘削に際しての単位かも知れないが、攪乱に寸断されているため詳細な復元は難しい。埋土の中位付近には大量の拳大～小児頭大の礫が埋積している。15世紀代に下るとみなせる遺物も出土しており、最終的な埋没は中世後半期でも比較的遅い時期ではなかったかと推察される。北に隣接する378地点、さらに北方の220地点や111地点でも、この溝の延長は確認されており、広範囲で東西を画する重要な遺構であったと判断できる。上述した小字名では、西側が小字「堀之内」「公方」、東側が「西の辻」となる。しかしながら、今回の調査区内ではそのまますぐに南走せず、北区南辺のX = 1230付近で西折し、5 mほどはしって南折するクランク状を呈して確認された。この西折、南折部分については、幅が広く断面形も逆台形を呈するなど、それ以北とは埋土や形態の様相を違えている(図26)。南北溝がX = 1230付近で一旦終端となり、性格が異なる区画遺構などが付加された可能性もあるが、屈折部分を攪乱に破壊されているため、相互の切り合い関係は定かにできなかった。北調査区南壁で確認すると、西側に掘削し直していることや、先行

中世の遺跡

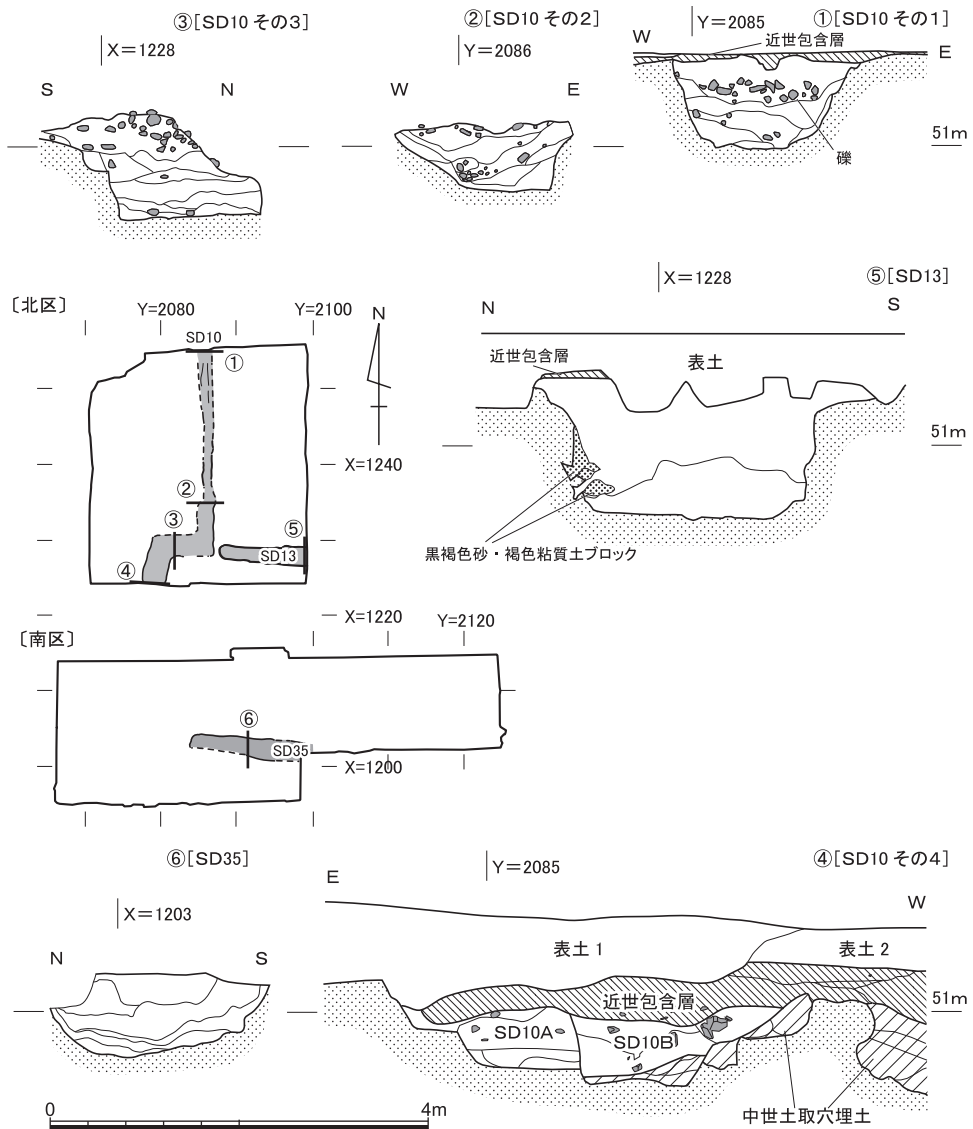


図26 溝の断面形状（SD10・13・35、丸囲み数字の位置での断面を表示） 縮尺1/80

して土取り穴とみられる不定形な土坑があることがわかっている（図26-4）。南区ではこの溝の延長と見なせる遺構は確認されなかったけれども、その延長にあたる位置に、土取り穴埋積後の中世後半期～末期とみられる路面状の硬化面SF4や集石・小溝群が集中して南北にはしっている。この位置が東西を隔てる区画として意識が継承されていたのであろう。そして、クランク状の屈曲部は、SD13の存在とも合わせて考えると、東西方向

の区画の要地に相当していることも推察されよう。

東西溝 S D 35 南区中央付近を、真北からやや東に振れる方位で東西にはしり、幅 2.5m、深さ 1 m 弱、断面 U 字形を呈する。西へ向かうほど浅くなり、Y = 2085 付近で立ち上がる。埋積後の溝を掘込んで後述する集石 S X 62 や建物 S H 1 が築かれており、埋土から 13 世紀前半代の土師器が出土することから、中世前半期でも比較的初期の段階に位置づけられる遺構と判断する。溝が立ち上がり途切れる付近は、中世の柱穴やピットが南北方向に密に分布しており、古代の溝と重複する位置で浅い南北溝 S D 37 も検出される。すでにこの段階で、東西を隔てる区画ラインが意識されていた事を示している。

建物 S H 1 (図版 7, 図 27) 南区中央南半に検出された、南北に長い布堀り基礎の長方形建物跡。浅く掘りくぼめた溝 (S D 38) 内に 50cm 前後の間隔で扁平な根石 (1 ~ 35) を配している。また、関連する可能性のある独立した根石 (礎石) に S 51 ~ S 60 がある。布堀りの溝は、本来北側を除いた 3 面をコ字状にめぐっていたと思われるが、東側桁行は削平されてはつきりせず、根石周囲の窪みのみがピットとして検出される。西側桁行から南側梁行にかけてはしっかりとした掘り込みが残っているが、底面に据えられている根石は、23・24・33・35 を除くと 5 ~ 10cm 程度浮いた位置に置かれている。東側も同様で、28・29・32 以外の根石はやや浮いた位置にある。これらは、28 と 18、29 と 19、32 と 20、といったように上下に重なる位置に石を配している。ただし、石どうしが互いに接して組み合っていないため、2 個がひと組となる根石ではないとみられる。柱の建て替えにともなう更新の可能性がある。北側の梁行に石の並びはないため、こちらに開口部 (入口) が設けられていたのであろう。中央に置かれた扁平な石 S 57、隣接する S P 263 と S 59 は、入口の構造物に関連するものかもしれない。このように想定すると、桁行 6.6m × 梁行 2.1m の長方形建物が復元される。布堀り基礎という特異な構造であることから、蔵に類するような建物ではなかったかと推測される。なお、壁材とみられるような土塊は全く出土していないため、土壁ではなかった可能性がある。中世前半の溝 S D 35 を切っており、中世後半の建物と位置づけられる。

集石 S X 61・62 上記の S H 1 東側に隣接してひろがる大規模な集石。中世遺構の基盤となっている黄色砂をやや掘りくぼめた内部に不整形に礫が密集している。位置関係からみて S H 1 と関連する可能性が高いとみられ、S H 1 の屋根置きなどに使用した礫が、建物廃絶にともない集積したものではないかと推測している。

土器溜 S X 48 (図版 8 - 6) 南区中央付近、S D 35 の北肩付近の土器溜。茶褐色土

中世の遺跡

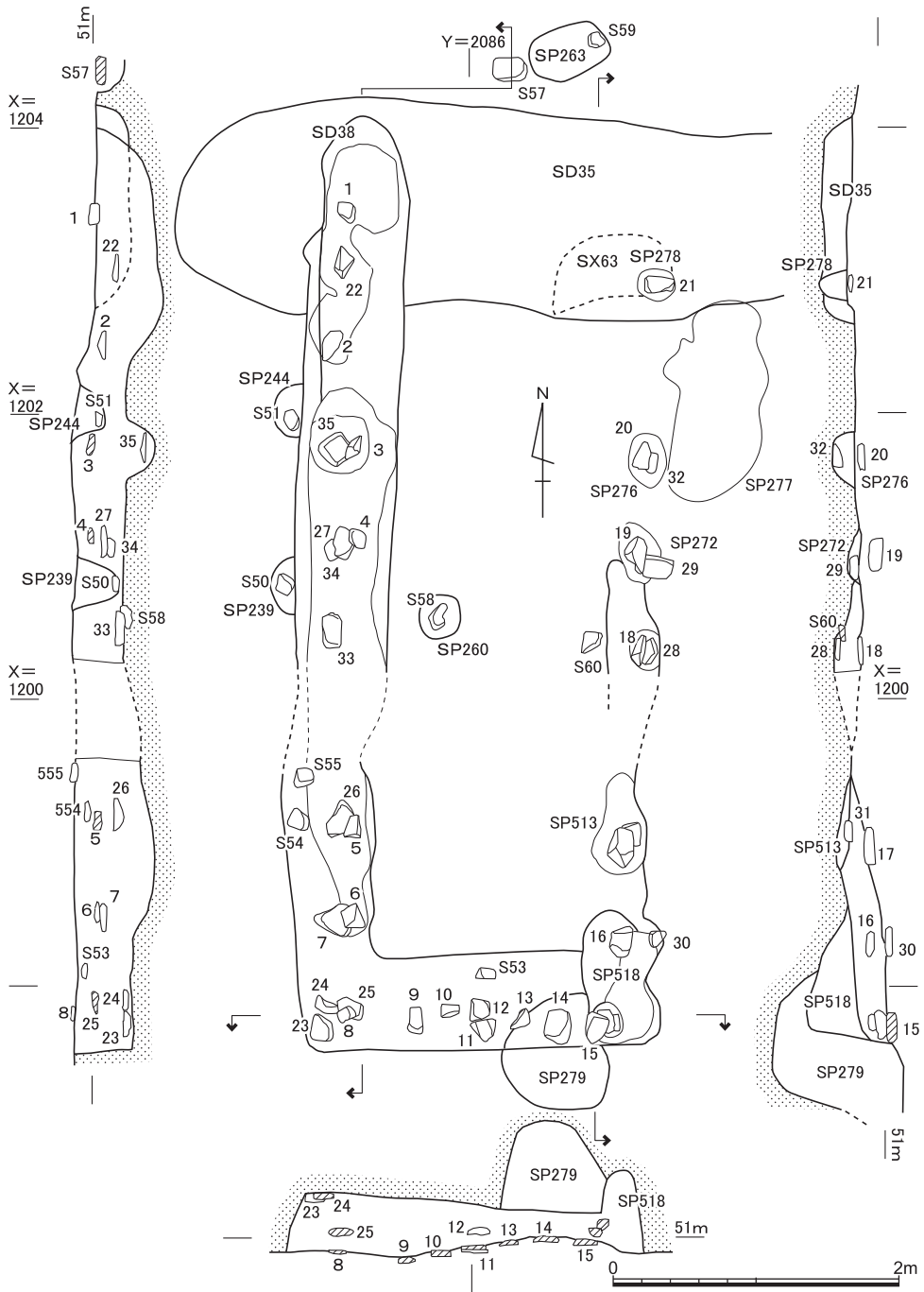


図27 建物SH1 縮尺1/50

中で検出され、掘り込みははっきりしない。南側を攪乱に破壊されるが、本来は1×2m程度のひろがりをもつ遺構であったとみられる。ほとんどが中世前半期の土師器皿類で、整理箱6箱分、口縁部計測法で110.8個体を数える。それらが平安京域の中世京都や構内での既出品に一般的な型式ではなく、異系統のもので占められている点を特徴とする。

土坑SK12・19（図版6-4・5） 北区南辺付近にある一辺1.5m前後の不整円形の土坑。ともに検出面からの深さも2m近くに達するもので、中世前半期の土師器皿が完形で大量に出土している。SK12は北側から流れ込むような状態で出土しており、口縁部計測法で452.9個体を数える。下半には方形の輪郭が検出されたことから、本来は箱状の器物が据えられていた可能性も考えられるが、有機物の遺存は確認できなかった。SK19は埋土の中位に遺物がまとまって出土しており、107.7個体を数える。本来は土取りや水溜のために掘削されたものが、廃棄土坑とされたとみられるが、組成が土師器に偏っている点は注意される。なお近接して、経常的には類似した特徴をもつ土坑SK17やSK20がある。ただしこれらからは、土師器皿類が1～数個体分のみしか出土していない。

土坑SK5（図版6-3） 北区中央東辺付近にある一辺1m足らずの方形土坑。深さは1m以上あり、埋土中位に土師器皿類のほかに礫や大きめの陶片なども含めて多くが出土し、最下部に瓦器鍋の完形品が遺棄されていた。方形を呈する類似した形状の土坑としては、ほかに北区でSK7、南区ではSK24がある。こちらは、中世前半期の遺物が少量出土するにとどまった。

以上のほか、中世前半期の遺物が出土し、一定程度以上の大きさをもつ土坑としては、SK3・SK6、SX59などがある。いずれも廃棄土坑であろうが、浅いもので、遺物の出土も少ない。

土器溜SP289・SP369（図版9-5） 南区東辺で、互いに近い位置で見つっている中世前半期の土師器皿集積遺構。ピット状の小さな掘り込み内に完形の皿が密に埋置されている。上述した廃棄土坑と較べて規模がかなり小さいが、遺物の密集度は高い。祭祀遺構の可能性があろう。

遺物溜SK26（図版9-4） 南区東辺で、中世前半期の東播系須恵器摺鉢2個体分が重なるようにして一括出土した。小さな掘り込みに重ねて埋置したかのようである。

土器溜SK25・SX47 いずれも中世前半期の土師器皿類の集積遺構だが、掘り込みの輪郭がはっきりせず、破片の比率が非常に高い。SK25は茶褐色土の中位に、SX47は土取り穴の埋土上部に形成されており、ともに2次堆積として形成された可能性が高い。

中世の遺跡

土坑 S K 15 (図版 6 - 1・2) 北区北東辺にある、長辺 3 m 短辺 1 m 程度の、東西に長い長方形土坑。土坑中央部付近に、中世後半期の土師器碗皿類が密集して埋積している。平面形状から墓壇の可能性もあるが、それを示すような出土遺物や痕跡はみられない。今回の調査区内で中世後半期の土師器が密集した土器溜は、この遺構が唯一である。

集石 S X 55・S X 56・瓦溜 S K 23 (図版 9 - 1・2) 南区中央付近では、中世後半期の集石・遺物溜 S X 55 や小規模な集石 S X 56, 瓦溜 S K 23 が近接して見つっている。S X 55 は上面が集石遺構だが、下部は掘り込みをともなう遺物溜となっており、3 つのまとまりに分かれている。うちひとつは「オオヤツカサ」と呼称される大型上げ底の土師器皿類のまとまりであった。S K 23 は軒丸瓦が主体となる小規模な瓦溜。瓦そのものは中世前半期のものである。今回の調査区内でみつかった唯一の瓦溜である。

上記のほか、南区では、中央一帯南半で完形の硯 (I 729・I 730) が単独出土した S X 50・S X 51, S D 35 埋積後の上面で瓦器鍋の完形品が一括出土した S X 52 や集石 S X 58, 大型の瓦器火鉢片が集積した S X 53, などがみつっている。総量としては多くないけれども、遺存の良い遺物がまともっており、この一帯が中世を通じて活発な活動空間であったことを示唆している。また、西域の不定形土坑埋積後の上面には、南北方向にはしる小溝群 S D 31・33 や集石 S X 42・43, 路面状の硬化面 S F 1・4 などが集中している。近世に棚田状の耕作地となるまでの 15・16 世紀代において、境界や通路としての施設は営まれ続けていたことがわかる。

(2) 遺物 (図版 15～17, 図 28～59)

さきに略述したように、今回調査地の中世土師器の様相は、中世 1 期 (13 世紀前半)、中世 2 期 (同後半)、中世 3 期 (14 世紀)、中世 4 期 (15 世紀) の 4 つの段階に区分できる。具体的に説明すると、

中世 1 期 一段撫で手法 D 類が主体となる。二段撫で手法 C 類も微量ともなう。白色系の碗類はごく少量しか認められない。〔小森・上村 1996〕における編年では V 期新～VI 期古で、おおむね 13 世紀前半に比定される。

中世 2 期 一段撫で手法 E 類が一定量占め、白色系碗類も一定量組成するようになる。VI 期新～VII 期古で、13 世紀後半。

中世 3 期 一段撫で手法 E 類が主体となり、白色系碗類も、凹み底の小碗など各種が多量に認められる。平安京編年 VII 期中～新で、14 世紀。

中世 4 期 一段撫で手法 F 類が主体となる。VIII 期新以降で、15 世紀。

である。今回の出土遺物でまとまった量のものは、中世1・2期に偏っている。口縁計測法による計測が果たせた遺構についてみると(図28・29), 大量出土したS K12・19が1期, S K5・S P369を2期と位置づけることができる。また, 「乙訓在地形」などと呼称されている異系統の土師皿でまとまっていたS X48についても, 少量ともなう在来の土師皿はC類・D類が主体であり, 1期の遺構と評価する。中世3期はS K15のみからまとまった量が出土している。中世4期については, 計測可能な遺構は無かったが, 南北溝S D10や, 不定形土坑の多くは, この段階の可能性が高いとみている。以下, 遺構出土のまとまりにしたがいつつ呈示し, 特筆すべき事柄を記す。

S K12出土遺物 (I 215～I 350) 中世1期の遺構。土師器皿類が, ほぼ完形でまとまって出土している。一段撫で手法D類がほとんどで, 法量は8～9cmと13cmの大小2つの規格が認められ, 大皿には口縁端部を面取りするものが目立つ。全体の色調は, ごく少量の橙色や赤褐色のもののはかは, 褐色～灰褐色系の白っぽい色調のものが目立つ。使用の痕跡はほとんど観察できないが, I 279は外面が黒変し, 内面にも線状にタール状の付着物がある。I 268は, 内外両面に判読不能な不規則な墨書を認めるもので, 他の製品と異なり器壁が脆く, 破損が著しい。I 327の小皿は, 内外両面とも被熱して黒変している。直線的に口縁部が立ち上がる異質な器形で径が大きく, 後述するS X48でまとまって出土しているような, 京域外で主体となる異系統の土師皿である。I 331～I 335は受皿で, I 333～I 335は白色を呈する。I 336～I 341は白色を呈する椀類。いずれも厚手の器壁をもつ。I 339は小椀だが, 土坑の上層から出土しており, 混入の可能性がある。I 342は三足をもつ瓦質の小形椀。器壁が厚くしっかりとした造りである。I 350はスタンプ状のタタキをもつ陶器甕胴部片で, 常滑産であろう。

S K19出土遺物 (I 351～I 386) 中世1期の遺構。上記のS K12ほどの密集度はないが, 土師器皿類が多く出土しており, ほとんどが1段撫で手法D類である。I 376～I 378は白色を呈する椀や受皿。I 379・I 380は瓦器の皿と受皿。I 384は同安窯系の青磁皿。I 386は東播系の須恵器甕の胴部片を円盤としたもの。

S K5・6・17・18・20出土遺物 (I 387～I 414) 北区の土坑からの出土遺物である。遺物量の多いのはS K5のみで, 2期に位置づけられる。それ以外も, 土師器の様相から1期～2期中世前半期に収まる時期の遺物であろう。I 390・I 391は白色を呈する椀と受皿で, 薄手で径も小さなものとなっている。I 392は白色を呈する厚手の皿で特異なものと言えるが, 高杯の杯部の可能性がある。I 393は高台を付した白色の椀。回転を

中世の遺跡

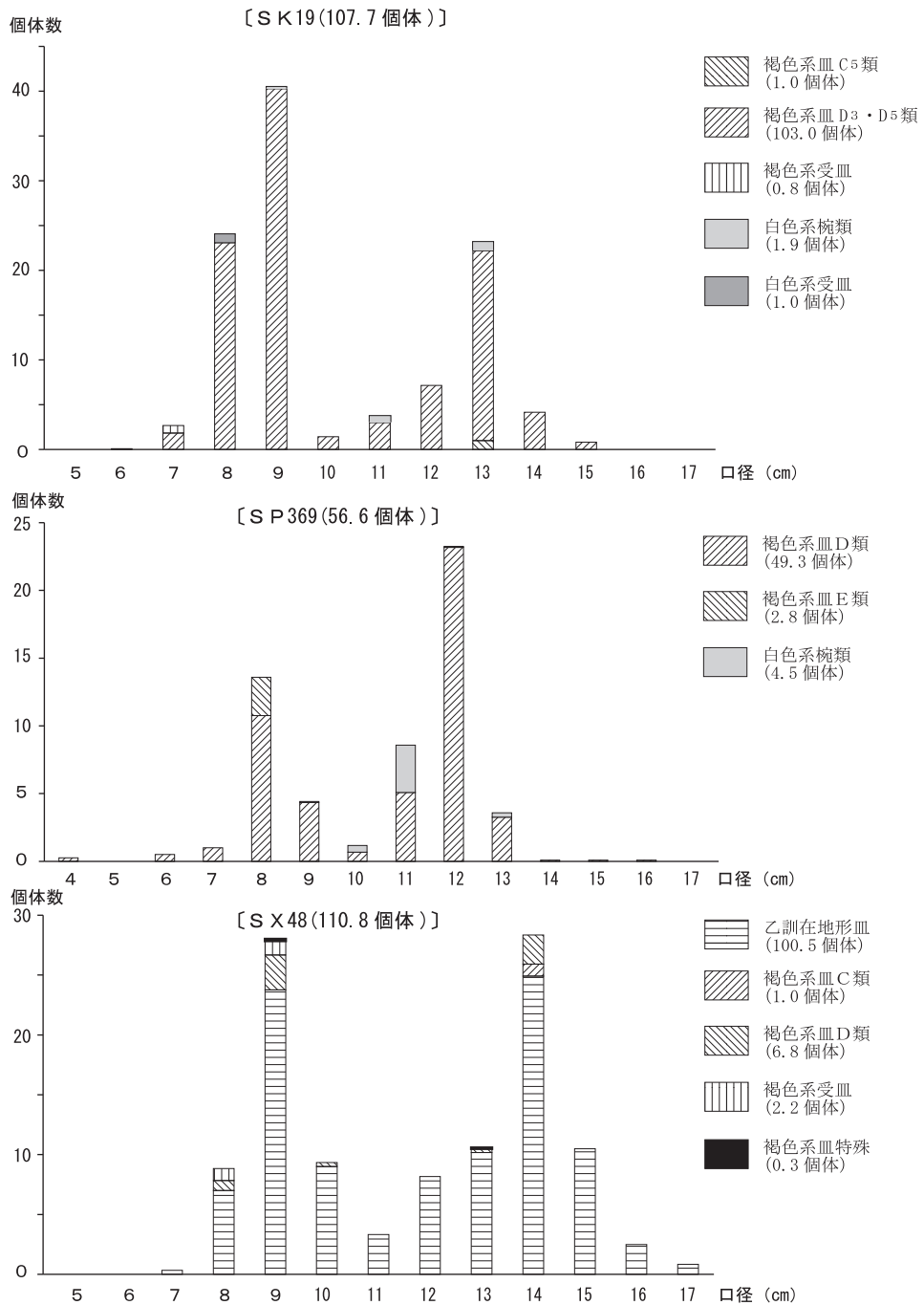


図28 出土土師器の計測結果 (その1)

京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査

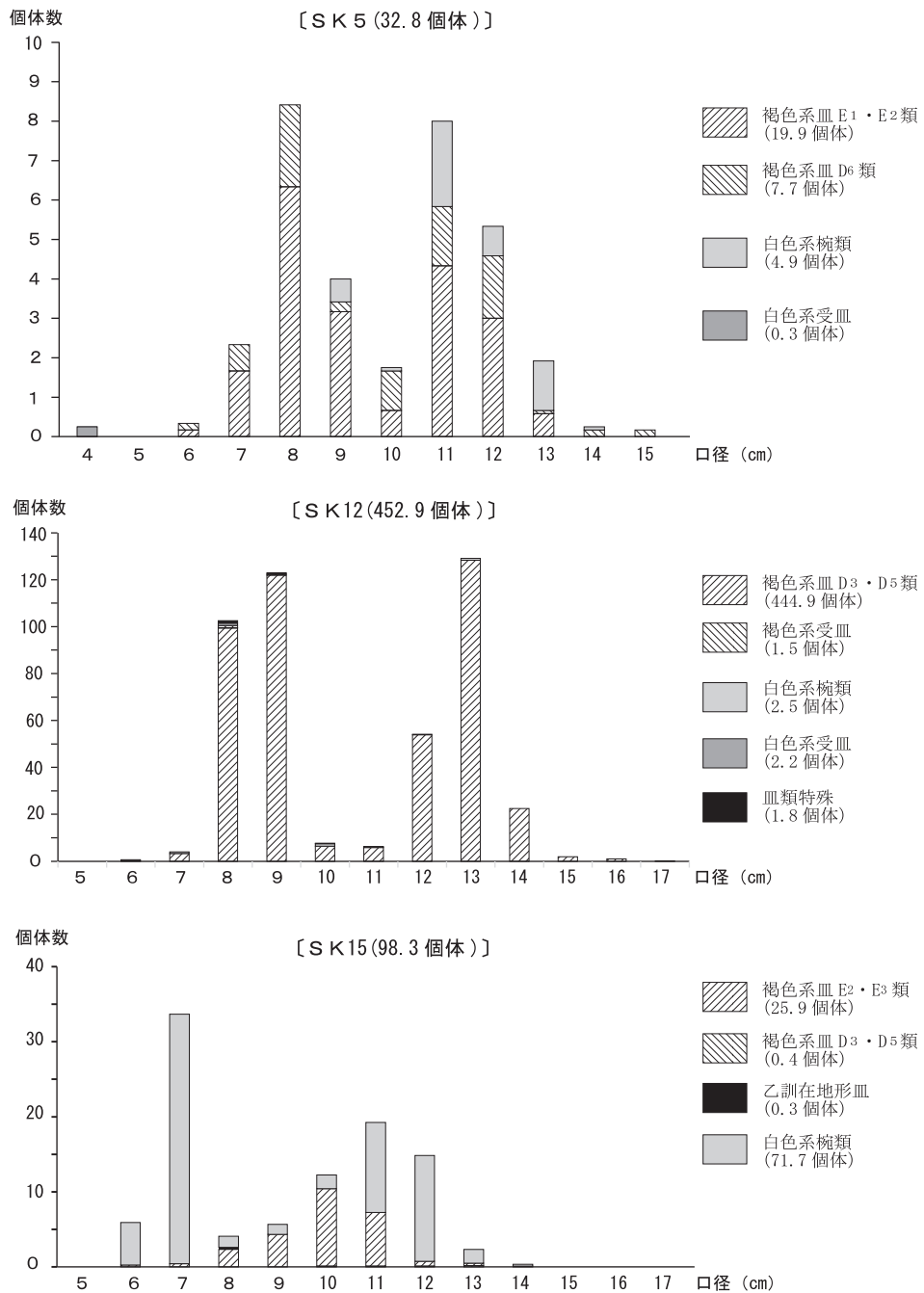


図29 出土土師器の計測結果 (その2)

中世の遺跡

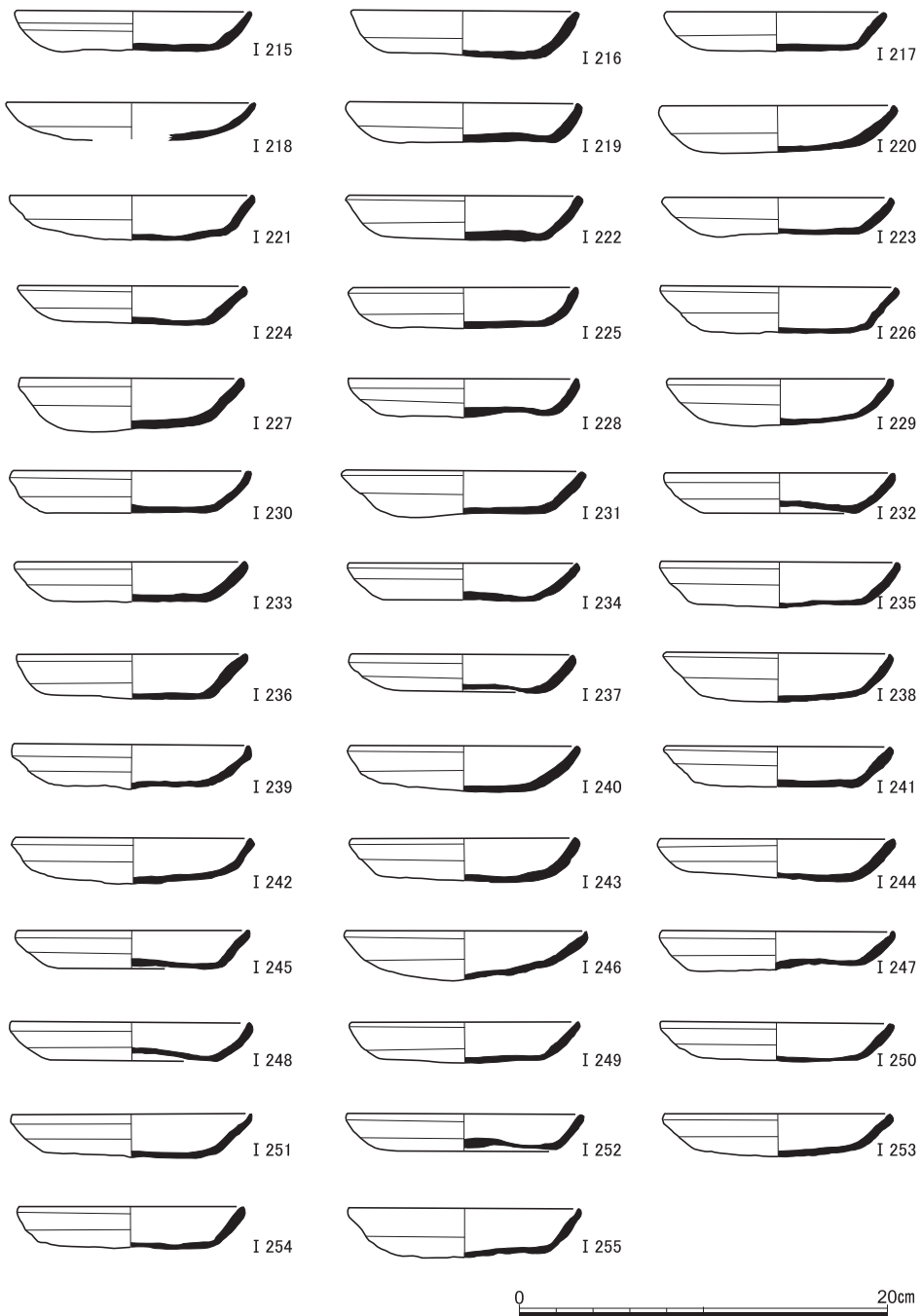


図30 S K12出土遺物(1) (I 215～I 255土師器)

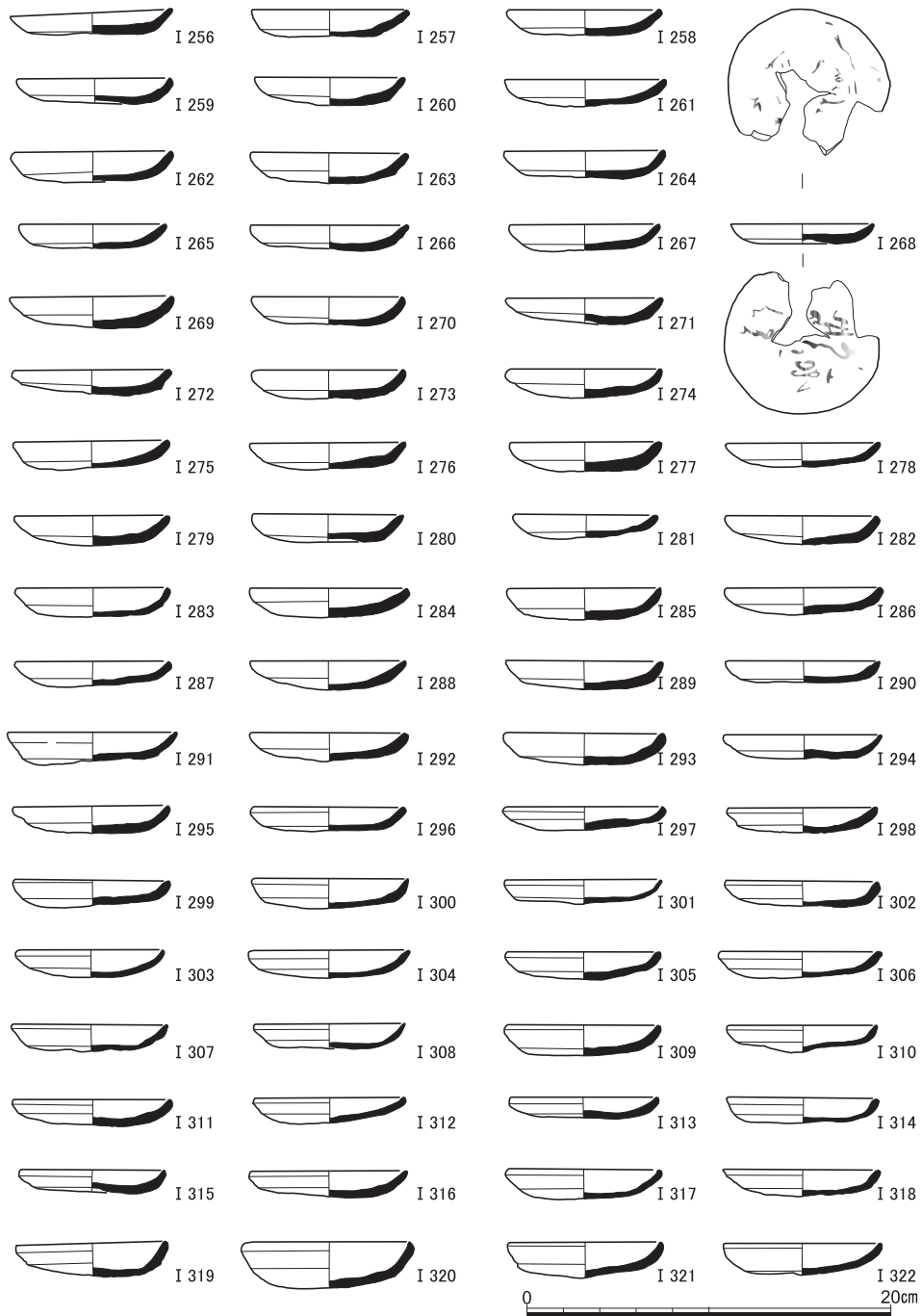


図31 S K12出土遺物(2) (I 256～I 322土師器)

中世の遺跡

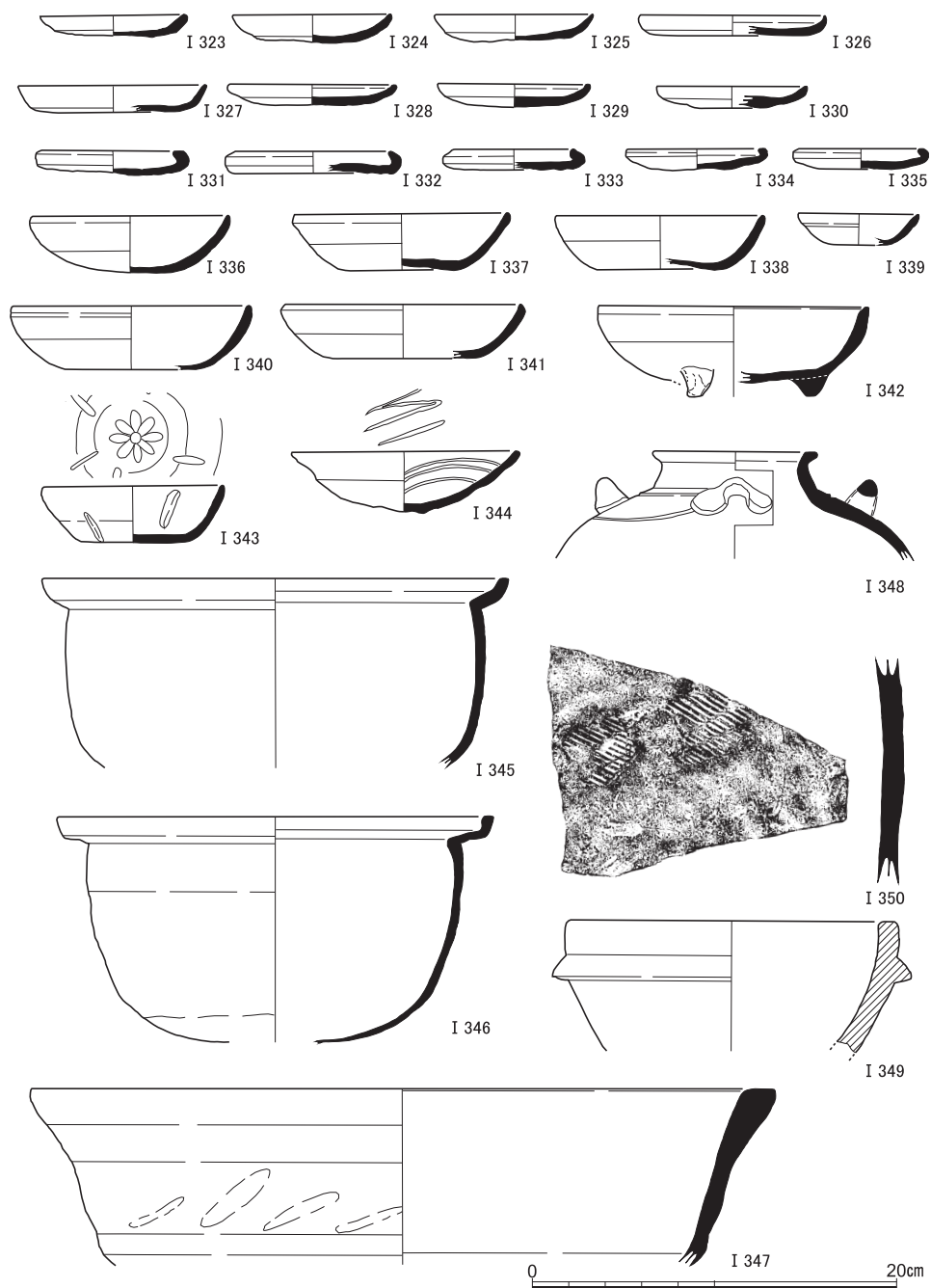


図32 S K12出土遺物(3) (I 323～I 341土師器, I 342～I 347瓦器, I 348褐釉陶器, I 349石鍋, I 350陶器)

京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査

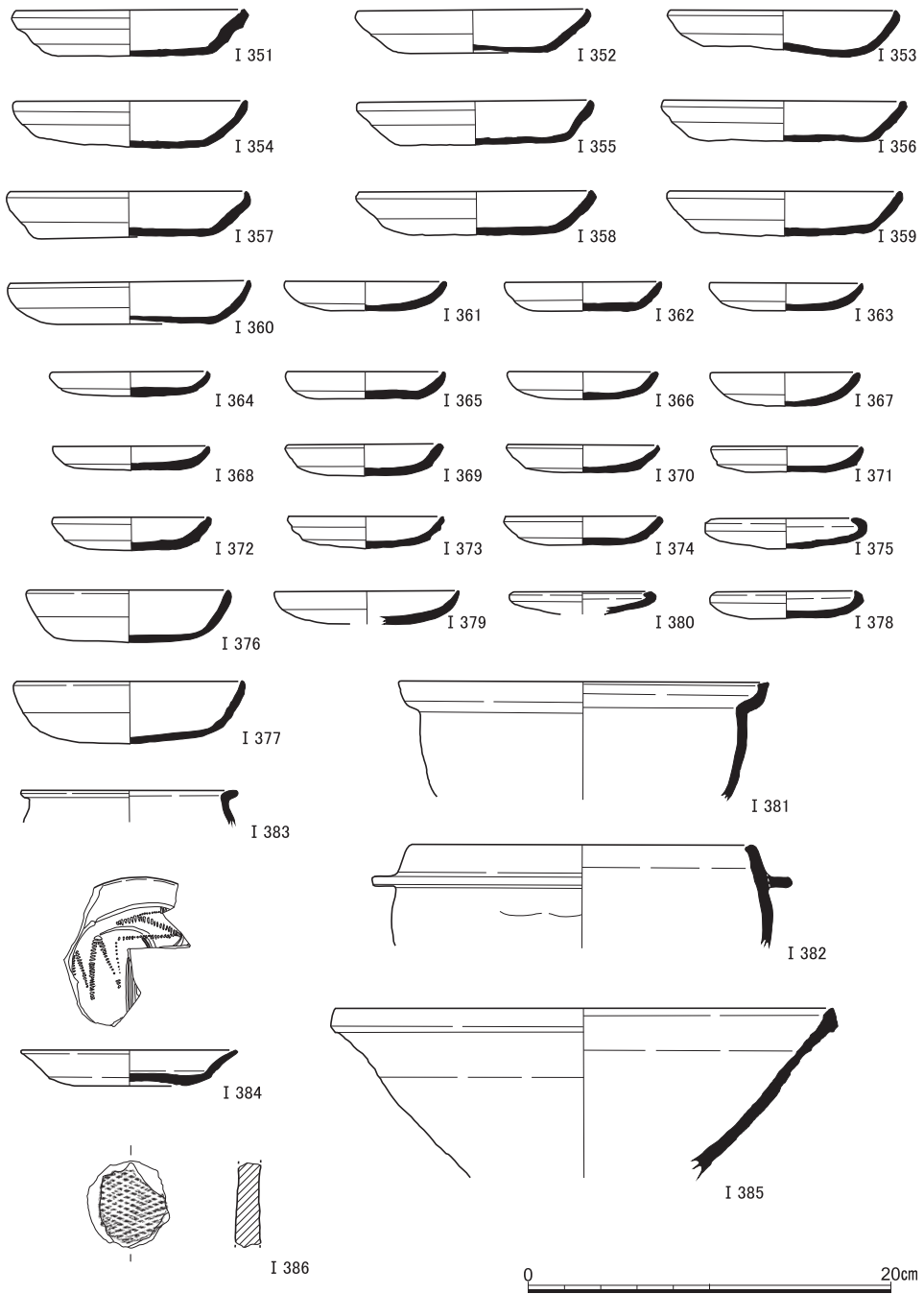


図33 S K19出土遺物 (I 351～I 378土師器, I 379～I 382瓦器, I 383褐釉陶器, I 384青磁, I 385・I 386須恵器)

中世の遺跡

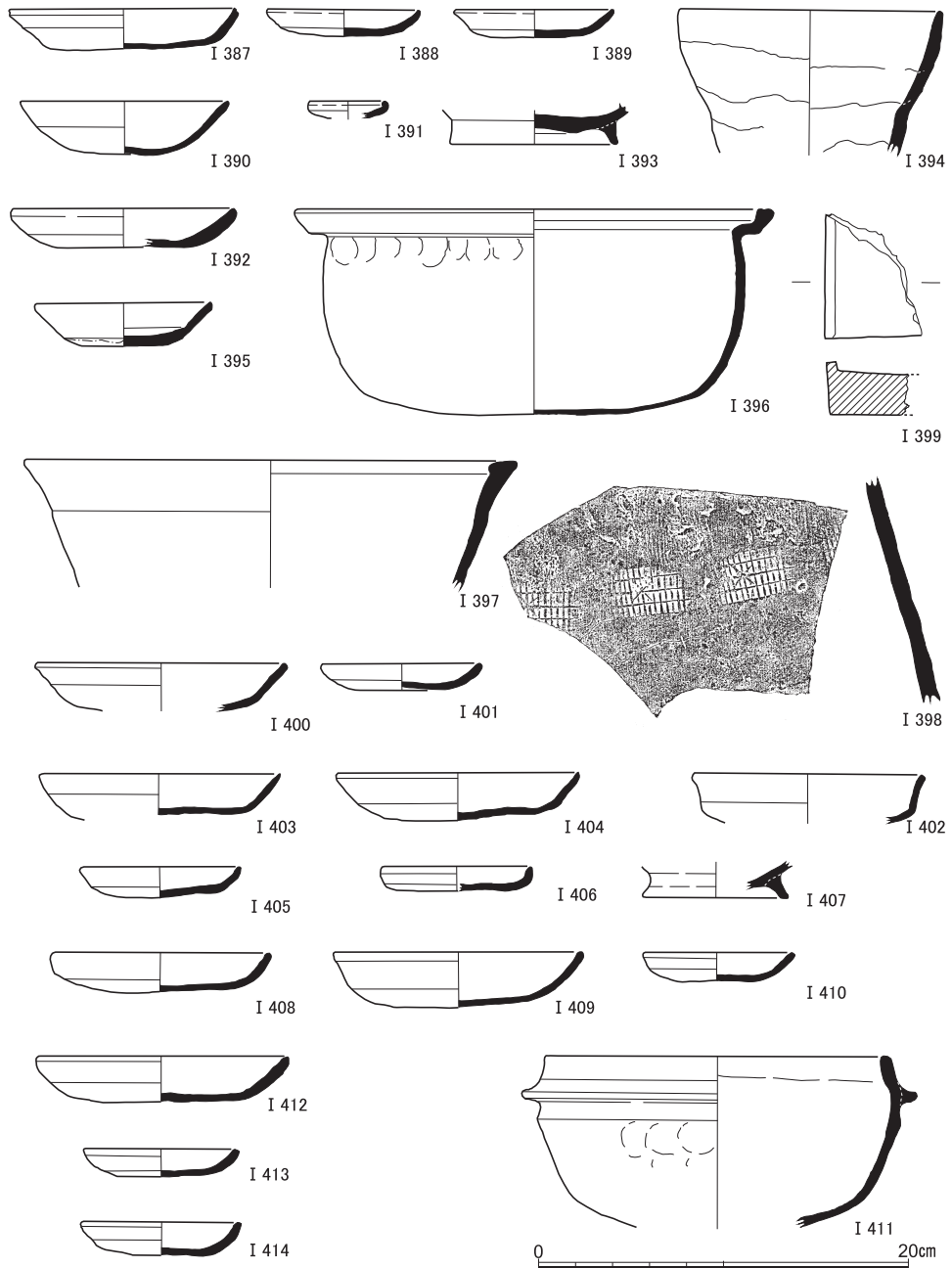


図34 S K 5 出土遺物 (I 387～I 394土師器, I 395白磁, I 396・I 397瓦器, I 398陶器, I 399硯), S K 6 出土遺物 (I 400・I 401土師器), S K 11 出土遺物 (I 402土師器), S K 17 出土遺物 (I 403～I 407土師器), S K 18 出土遺物 (I 408～I 410土師器, I 411瓦器), S K 20 出土遺物 (I 412～I 414土師器)

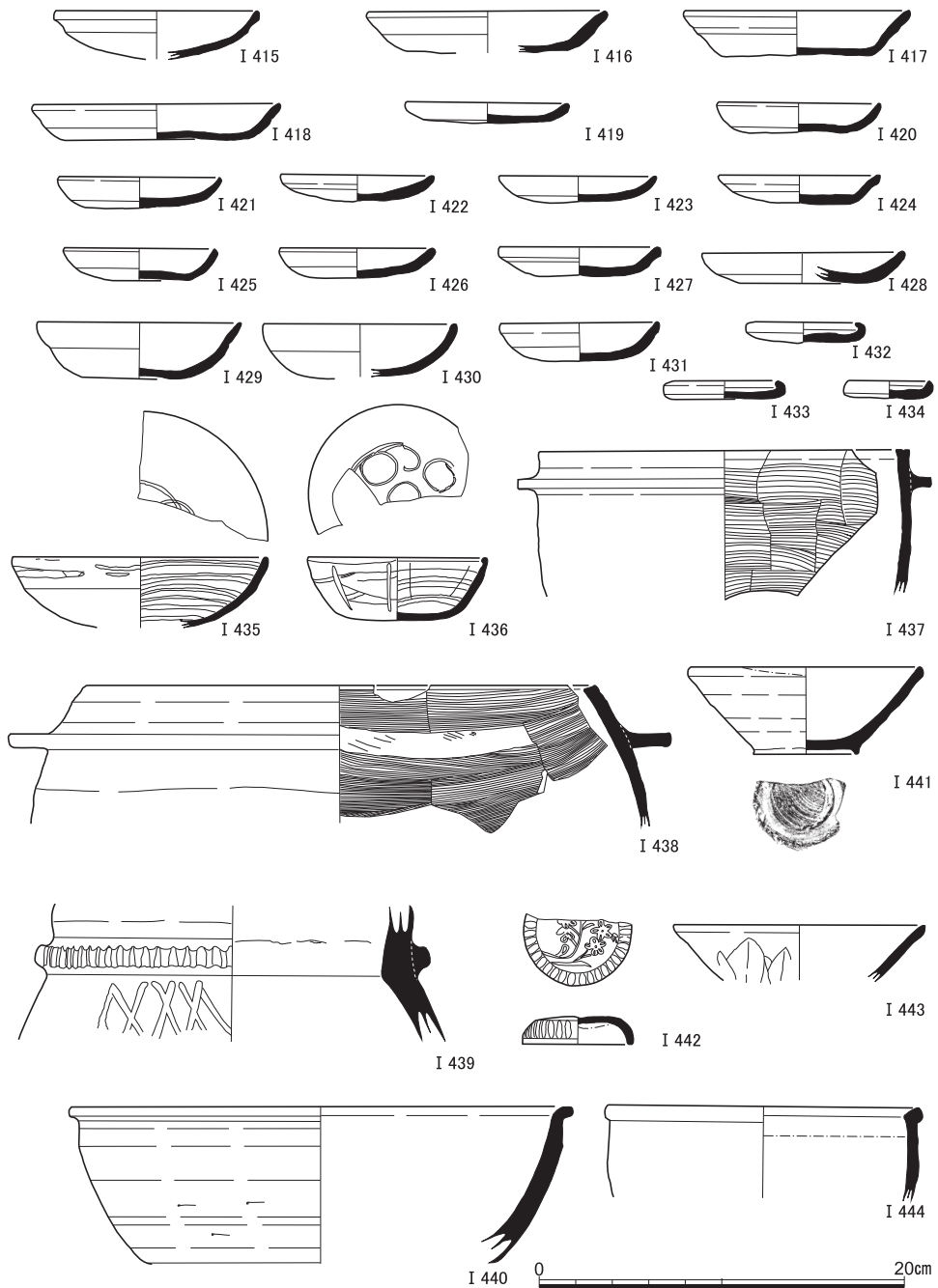


図35 S X25出土遺物(1) (I 415～I 434土師器, I 435～438瓦器, I 439瓦質製品, I 440・I 441灰釉系陶器, I 442白磁, I 443青磁, I 444黄釉陶器)

中世の遺跡

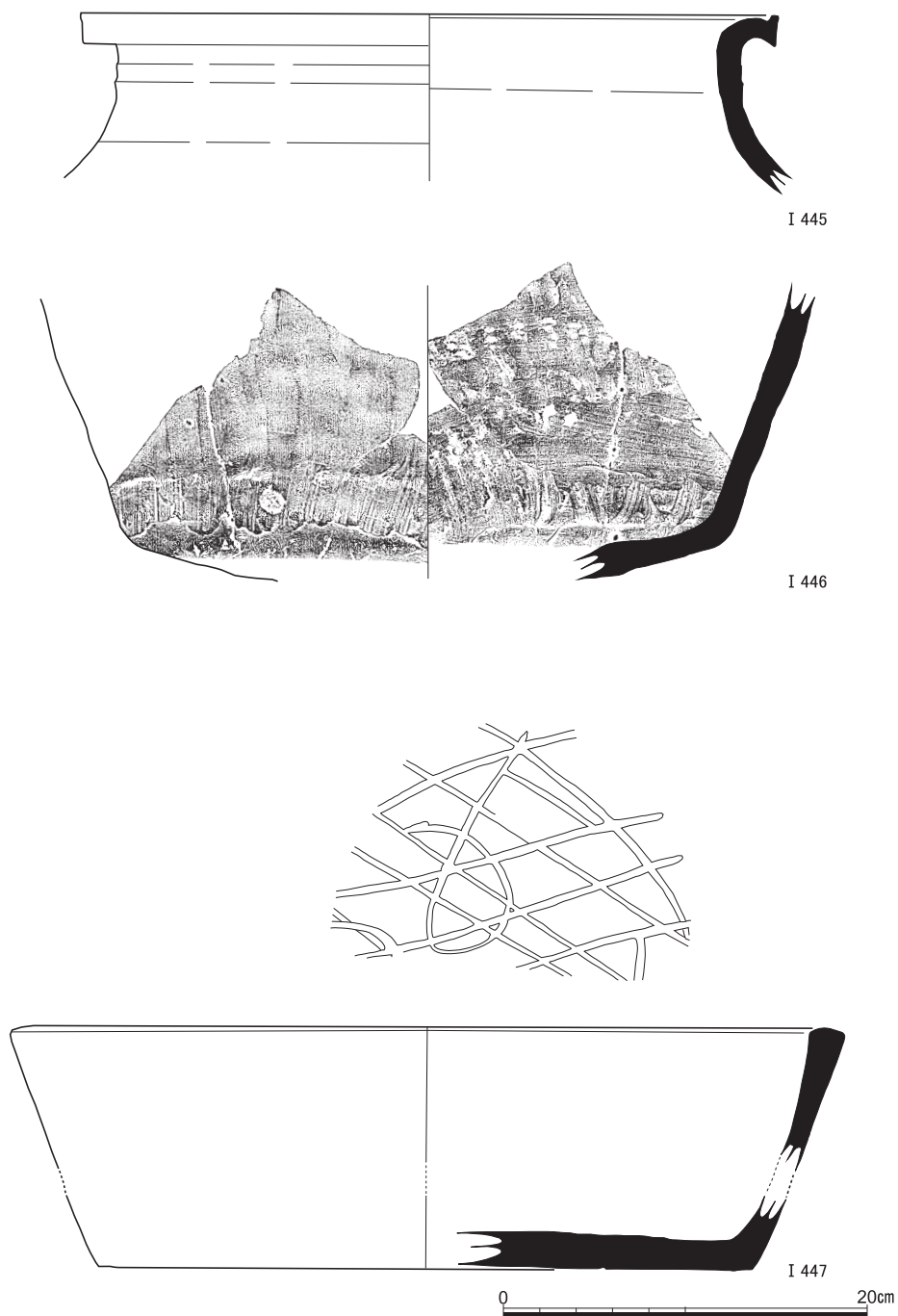


図36 S X 25出土遺物(2) (I 445・I 446陶器, I 447瓦器)

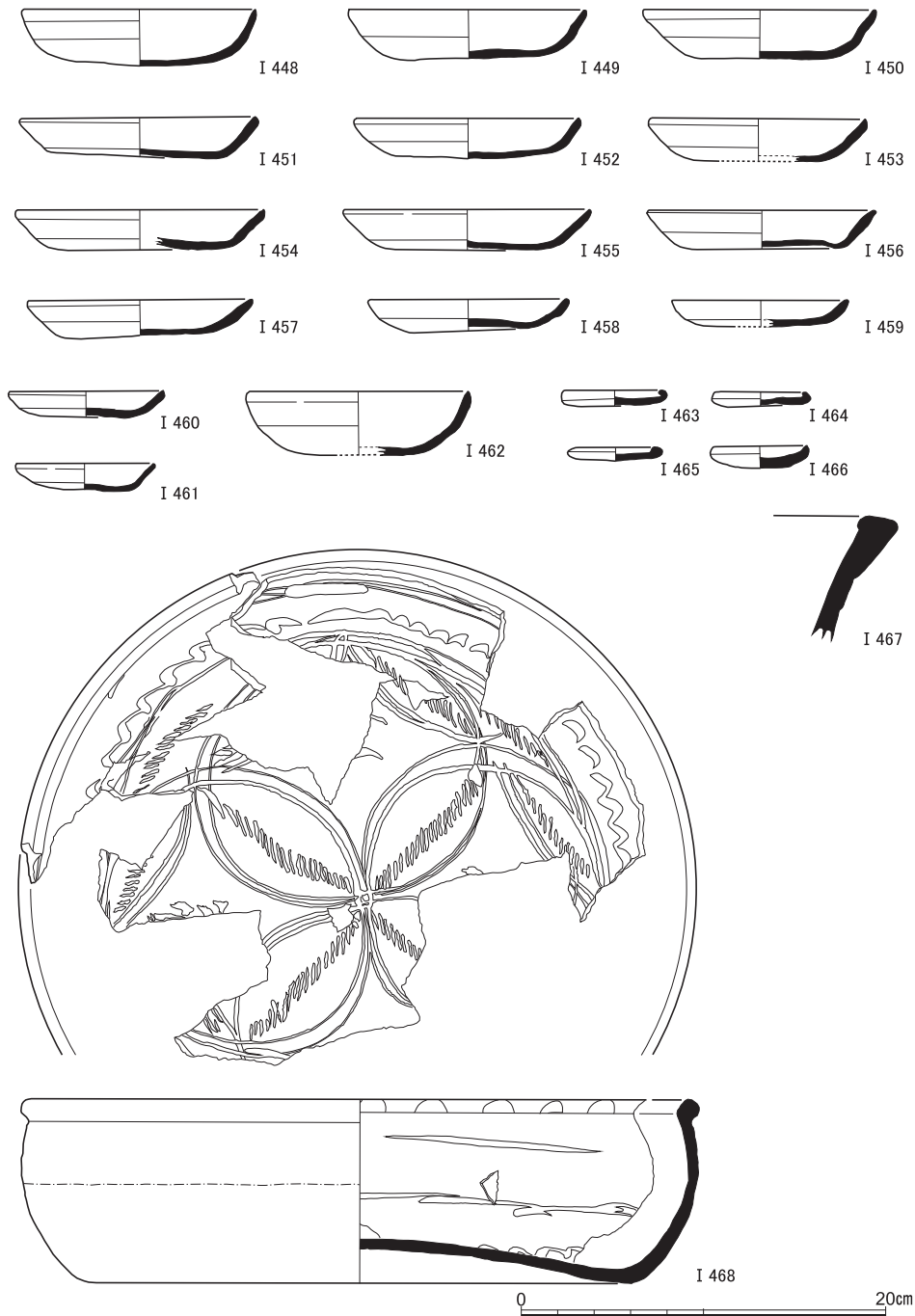


図37 S X 27出土遺物 (I 448～I 466土師器, I 467瓦器, I 468黄釉陶器)

用いて成形している。I 396は土坑下層ではほぼ完形で単独出土した瓦器鍋。底部の器壁は非常に薄い。I 397は瓦器盤の口縁。内側に肥厚する。I 398は陶器常滑の甕片。I 400以下は、おおむね1段撫で手法の土師器皿類。I 407は高台を付した椀の底部。黄褐色を呈する。I 411は瓦器羽釜。羽釜としては小形品で、器壁が厚手である。

S X 25出土遺物 (I 415～I 447) 土師器皿や椀以外の、瓦器や陶器類の大破片が多く出土している。1～2期の幅をもっている。I 439は、きわめて厚手の器壁の瓦質の製品で、通有の器形と異なり全形が想定できない。刻みを施した貼付突帯がめぐる部分がくびれており、格子状の暗文のみられる部分を下部側と考えると、壺状の器形の頸部付近と復元できるけれども、類例を知らない。I 446は、須恵器質の器壁の厚い陶器片。内外とも粗い調整で、板状の工具で縦に撫でつけた痕跡が残る。「く」字状の屈曲部と器壁の厚さから底部付近と仮定したが、肩部付近の可能性もあるだろう。I 447は瓦器盤だが、炭素の吸着がほとんどみられず、黄白色を呈する。見込みに暗文を施す。全く肥厚しない口縁部の形状などからみて、中世前半期の、盤としては初期の型式に属するものであろう。

S X 27出土遺物 (I 448～I 468) 上記のS X 25と一連で連なる不定型な土坑からの出土遺物であり、1～2期の土師器類のほか、黄釉陶器の盤I 468の破片などがまとまって出土している。

S X 48出土遺物 (I 469～I 519) 南区中央付近の土器溜で、ほとんどが土師器皿類で構成される。このうち9割以上が、構内遺跡や平安京域の中世京都で主体を占めるものとは異なる特徴を持つもので、近年「乙訓在地形土師器」〔加納2004〕などと報告されている一群と同種とみなされるものであった。系譜については小結であらためて検討するとして、ここでは便宜的に以上の異系統の一群を「乙訓在地形」、従来通有の系統の一群を「京域主流形」と仮称して説明しておく。土師器皿類のうち、I 469～I 485・I 490～I 506が仮称乙訓在地形に該当する。少量含まれる京域主流形I 486～I 489・I 507～I 511は、二段撫で手法C類や一段撫で手法D類であり、白色系の椀類は全くともなわないことから、中世1期の資料と評価できる。乙訓在地形も14cmと9cmの2つに法量のピークがあるが、15cm代や10cm代の製品も一定量あることから、同時期の京域主流形よりも大きめのものが目立つ印象を受ける。また、口縁端部の形状は、直線的に立ち上がる口縁端部をそのまままっすぐ仕上げるI 469～I 482・I 490～I 504と、短く外折れして仕上げるI 483～I 485・I 505・I 506の2種に大別される。京域主流形にみるような、端部を面取りして断面が三角形になるような仕上げ方はしていない。ほか、I 469やI 490に典型的な、器高の

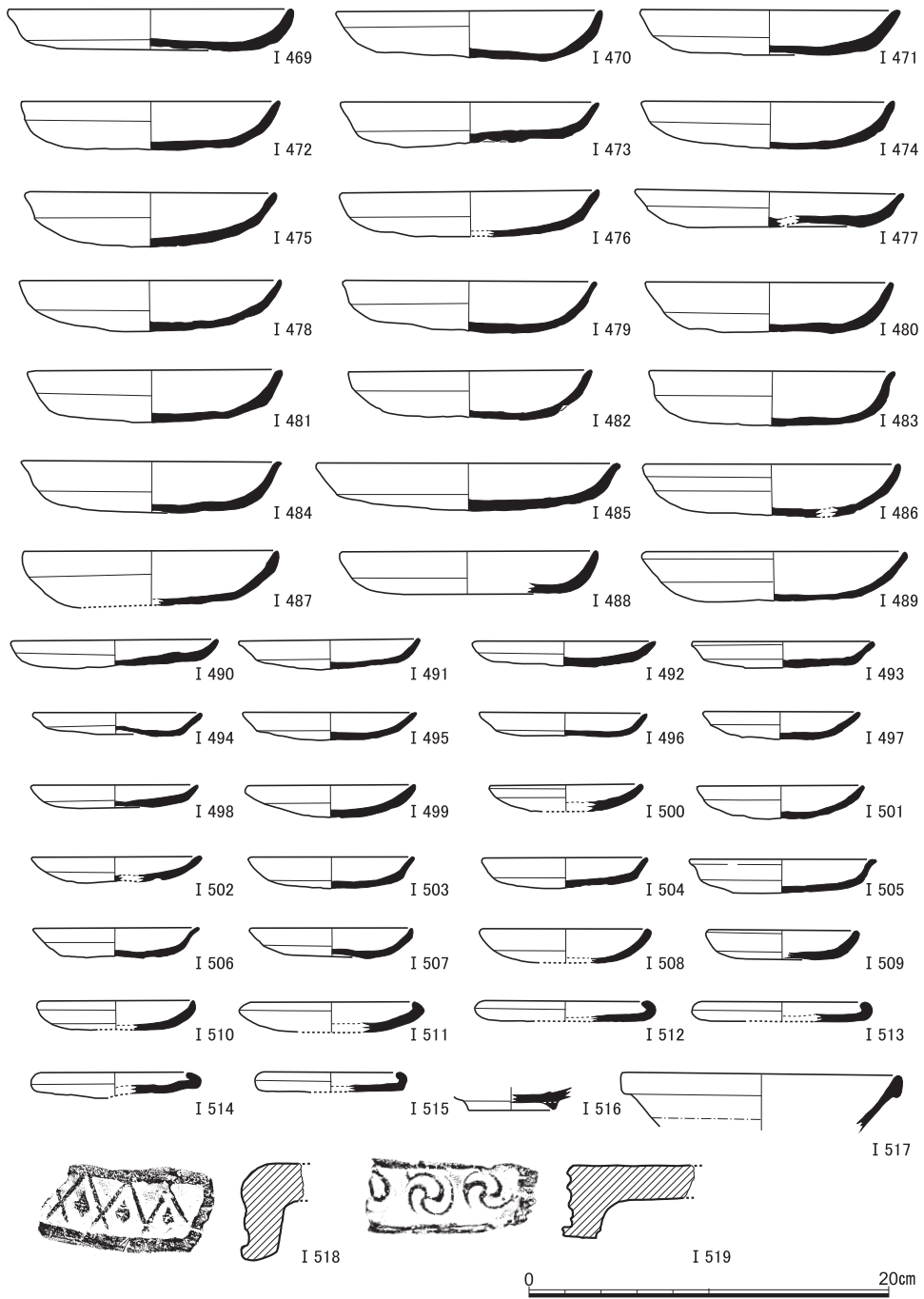


図38 SX48出土遺物 (I 469～I 515土師器, I 516瓦器, I 517白磁, I 518・I 519軒平瓦)

中世の遺跡

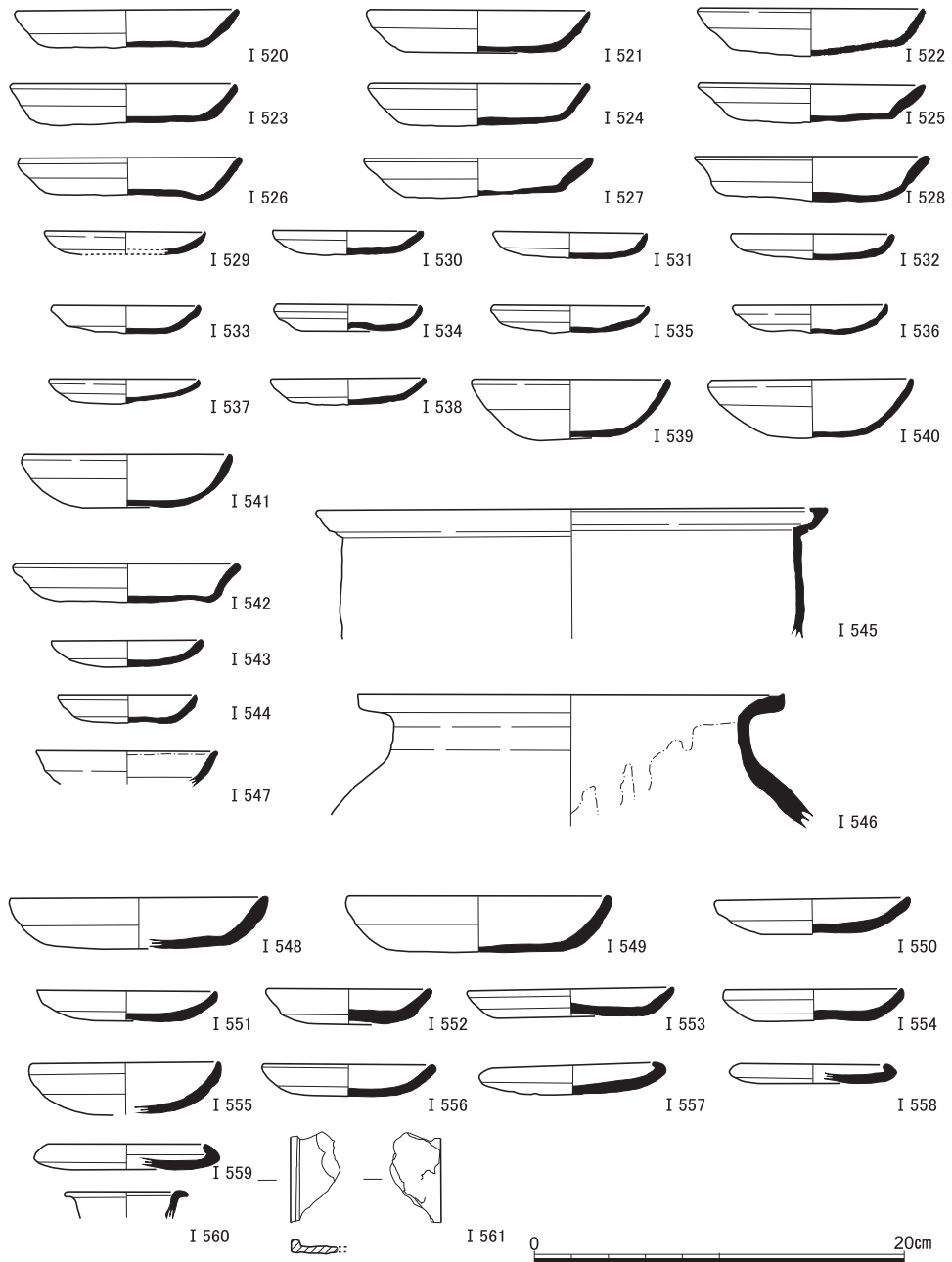


図39 S P 369出土遺物 (I 520～I 541土師器), S P 289出土遺物 (I 542～I 544土師器, I 545瓦器, I 546陶器, I 547白磁), S X 38出土遺物 (I 548～I 560土師器, I 561石硯)

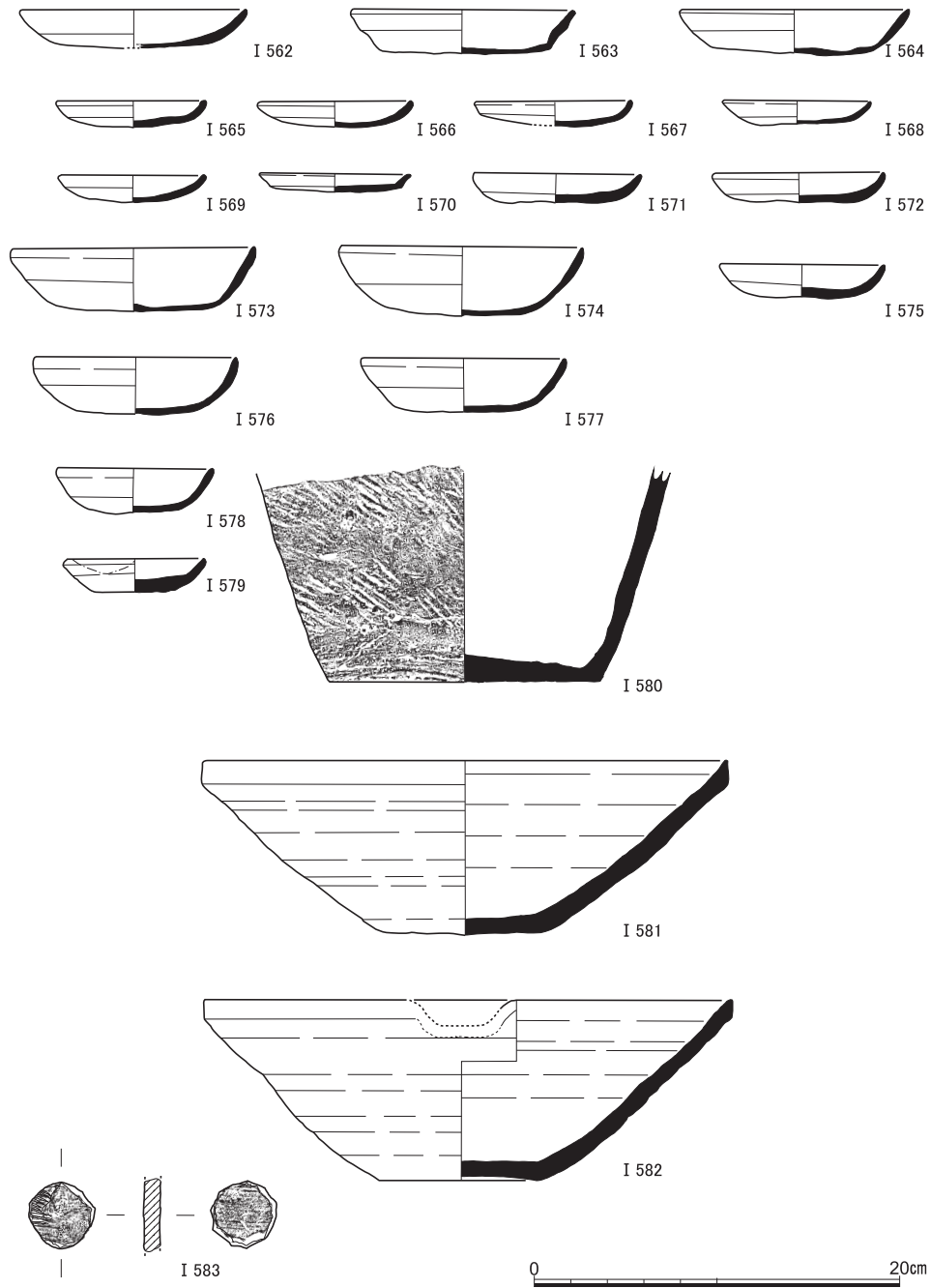


図40 S K 25出土遺物 (I 562～I 578土師器, I 579灰釉系陶器, I 580陶器), S K 26出土遺物 (I 581・I 582須恵器, I 583陶製品)

中世の遺跡

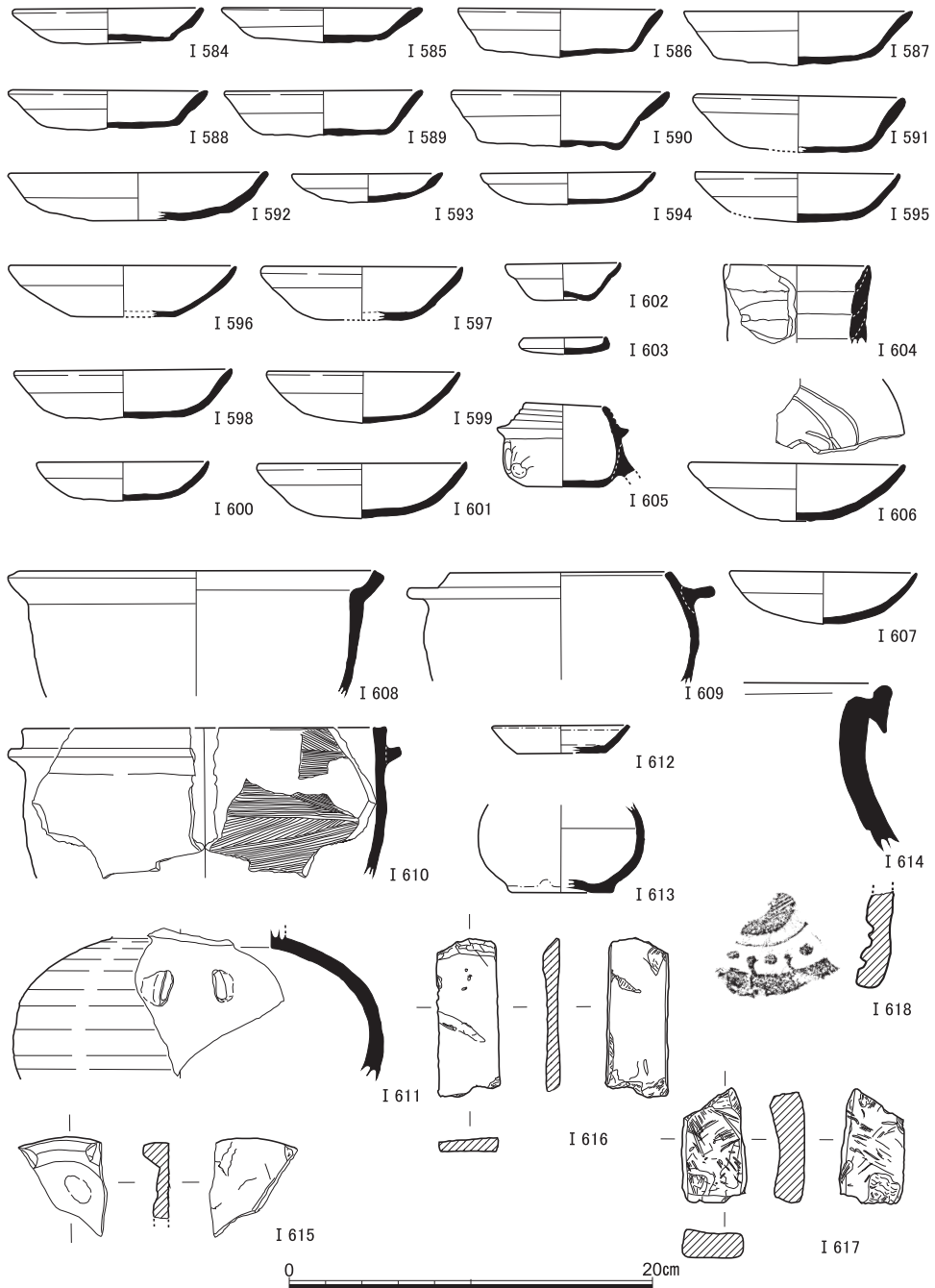


図41 S X64出土遺物 (I 584~ I 604土師器, I 605~ I 610瓦器, I 611・I 612白磁, I 613青白磁, I 614陶器, I 615石硯, I 616・I 617砥石, I 618軒丸瓦)

ごく低い皿形の器形も、京域主流形にはみられない特徴である。また、今回の資料では、乙訓在地形とされる一群は、明るい燈色系の色調を呈しているものが主で、褐色系の暗い色調を基調とする京域主流形と異なっている。

上記のほかには、褐色を呈する土師器受皿 I 511～I 515、瓦器椀の底部 I 516、白磁椀 I 517、軒平瓦 I 518・I 519が出土している。菱形の幾何学文モチーフの軒平瓦は、北東側に位置する261地点で同文品が多数出土している。

S P 369出土遺物（I 520～I 541） 南区東域の小土坑から土師器のみがまとまって出土した。皿類は一段撫で手法D類を中心としているが、口径のまとまりが12cmと8cmと小型化の傾向が顕著であり、器壁も薄く、小皿を中心に口縁端部を面取り仕上げしないものが目立っている。また、白色を呈する椀類 I 539～I 541が一定量ともなっており、中世2期の資料と位置づけたい。

S P 289出土遺物（I 542～I 547） 中世1期の土師器皿類が少量と、瓦器鍋 I 545、常滑産とみられる陶器の甕 I 546、白磁口禿の皿 I 547が出土している。

S X 38出土遺物（I 548～I 561） 中世1期の土師器皿類を中心に出土している。I 560は口縁部を短く外折させた、コップ状の器形のミニチュア土師器とおもわれる。類例のない特異な製品である。

S K 25出土遺物（I 562～I 580） I 562～I 573は土師器皿類で、いずれも口縁部1段撫で手法だが、褐色を呈する皿類 I 562～I 570のうち、小皿の I 567～I 569はE類、I 570は乙訓在地形と呼ばれるもの。I 571～I 573は灰白色を呈する製品である。法量でみると12cmと8cm程度にまとまり、また、灰白色の椀類 I 574～I 578も組成することから、中世2期に位置づけられる。I 580は産地不明の須恵器質の陶器で、直線的な胴部をもつバケツ状の器形を呈している。底部は薄く、外面は叩目がめぐる。

S K 26出土遺物（I 581～I 583） 南区東辺で一括出土した東播系須恵器の摺鉢2点と、その埋積土中から出土した陶器片の打ち欠きによる円盤である。摺鉢は、口縁端部の形状から中世前半期の製品といえる。I 581は、口縁が一部しか残っていないため、本来は片口に成形されていた可能性もある。I 583の円盤は、片面にスタンプ状の叩きが確認でき、常滑産の陶器甕の胴部破片を打ち欠いて成形したものとみられる。

S X 64出土遺物（I 584～I 618） 南区東辺の不定形土坑の出土遺物。I 584～I 593が褐色を呈する皿類、I 594～I 603が灰白色を呈する椀や受皿である。中世1期～3期の各時期各種類のものが混在しているが、薄手の灰白色の椀類を多数含み、凹み底の小椀 I

602なども含まれていることなどから、中世3期が下限となるものといえる。I 592は中世1期の乙訓在地形と呼ばれる皿である。I 611は白磁双耳壺ないし四耳壺の肩部片。I 613は薄手の器壁の青白磁で、底部は露胎している。壺ないし花瓶などであろうか。I 614は陶器常滑の甕口縁部。上下に大きく肥厚する。I 617は滑石製品で、石鍋を棒状に再加工したとみられる。温石や砥石として用いたものであろうか。

S K 15・16出土遺物（I 619～I 665） 北区北辺の土坑よりまとまって出土した遺物である。I 619～I 621・I 656～I 659は褐色を呈する皿類で、I 619・I 620・I 656～I 659は1段撫で手法E類、I 621は直線的に口縁が立ち上がるごく浅い皿形で、乙訓在地形と呼ばれるものの系譜かもしれない。I 622～I 650・I 660・I 661は灰白色の椀で、S K 15では凹み底の小椀が多数を占める。中世3期のまとまった資料と言えよう。I 664・I 665は砥石で、I 664は黄褐色の、I 665は赤褐色の粘板岩。I 665には擦り切りによる切断を中途まで試みた痕跡が残る。

S X 60・S K 24出土遺物（I 666～I 675） 南区中央付近の土坑からの出土遺物。中世1～2期の土師器皿類を中心とする。I 675は丸瓦の先端部で、外面に縄叩き、内面に細かな布目痕がある。端部まで厚みのある特異な形状と言える。

S X 56・57・58出土遺物（I 676～I 686） 南区中央の集石や小規模な遺物溜出土遺物。I 680・I 681は瓦器の小皿。I 682は陶器甕の口縁で、信楽産と思われる。I 683は、土師器の小皿に丈の高い脚部を付した特異な製品で、貼り付け方が粗いために皿部と台部で中軸がずれる。

S X 52出土遺物（I 687・I 688） I 688は瓦器鍋。完形品が一括出土した。瓦器鍋としては小ぶりで器壁が厚いといえる。短く外折して立ち上がる口縁部をもつ。中世後半期の製品だろう。I 687は近接出土した褐釉陶器の壺口縁部である。

S K 27・S X 65・66・67出土遺物（I 689～I 698） 南区中央でも東寄りの地点にまとまって検出された小規模な土坑群からの出土遺物である。いずれも少量の遺物しか出土していないが、土師器皿は一段撫で手法E類で、凹み底の小椀などをともなうこと、また瓦器鍋の口縁形態も、斜め上方へとにぶい立ち上がりのものであることから、中世後半期に位置づけられるものであろう。

S X 55出土遺物（I 699～I 715） 南区中央の遺物溜で、上面は集石であった。中世3期の土師器皿・椀類のほか、瓦器鍋や須恵器摺鉢などの大破片が集積していた。特筆されるのは、I 707・I 708といった、オオヤツカサ土器と呼称される中央が大きく凹む特大

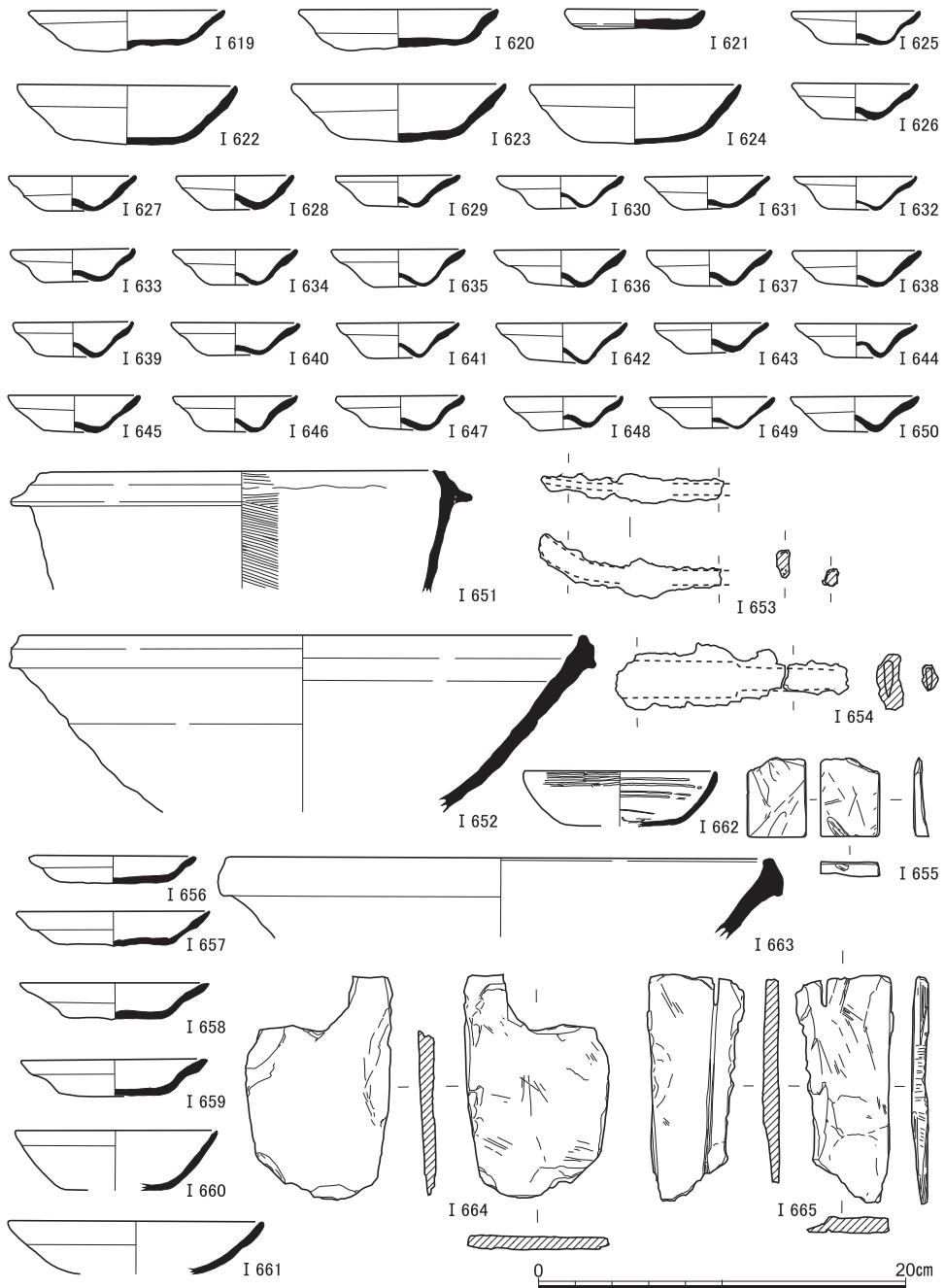


図42 S K15出土遺物 (I 619～I 650土師器, I 651瓦器, I 652須恵器, I 653・I 654鉄製品, I 655砥石), S K16出土遺物 (I 656～I 661土師器, I 662瓦器, I 663須恵器, I 664・I 665砥石)

中世の遺跡

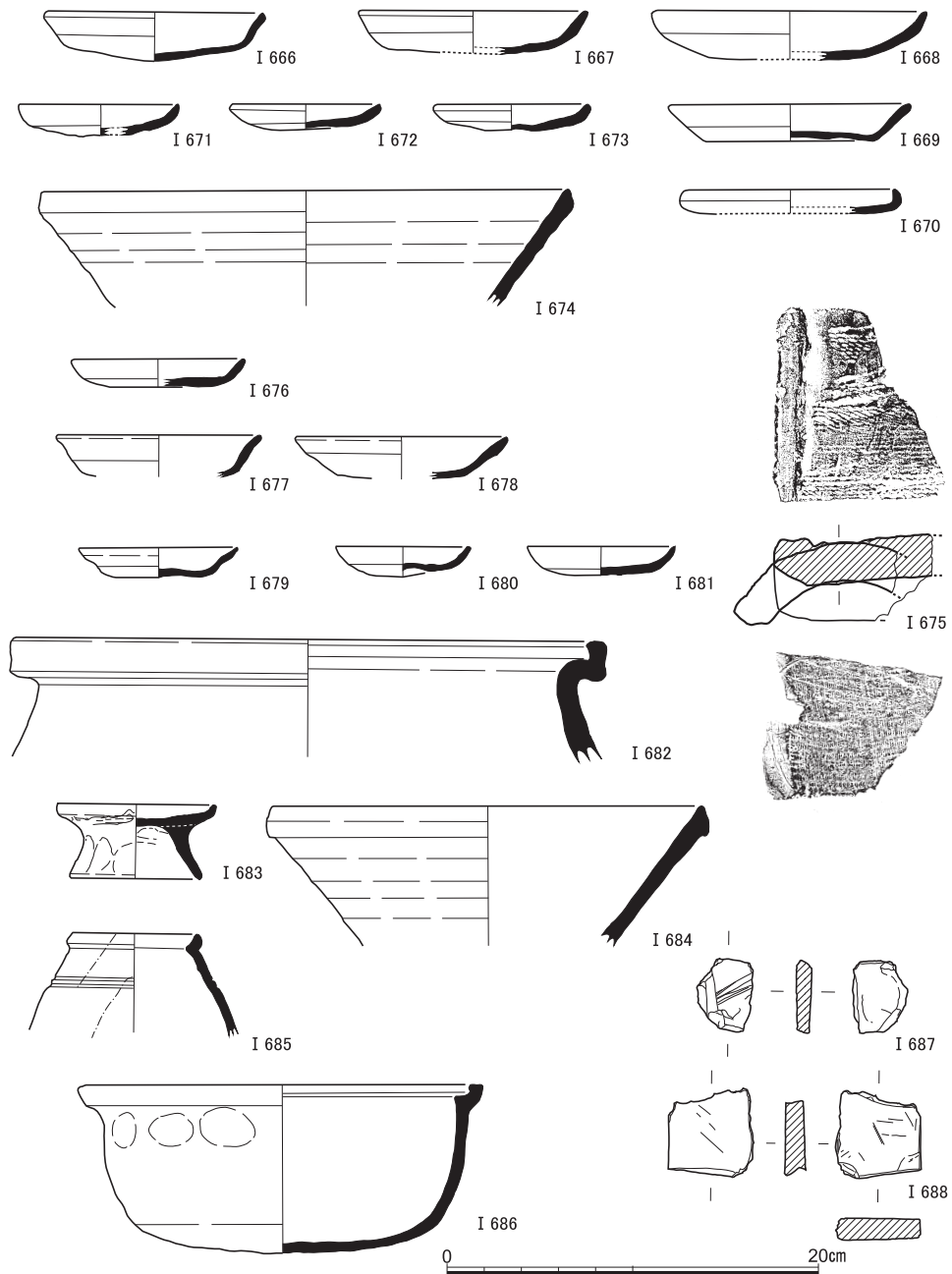


図43 S X60出土遺物 (I 666～I 670土師器, I 674須恵器), S K24出土遺物 (I 671～I 673土師器, I 675丸瓦), S X56出土遺物 (I 676土師器), S X57出土遺物 (I 677～I 679土師器, I 680・I 681瓦器, I 682陶器, I 687砥石), S X58出土遺物 (I 683土師器, I 684須恵器, I 688砥石), S X52出土遺物 (I 685褐釉陶器, I 686瓦器)

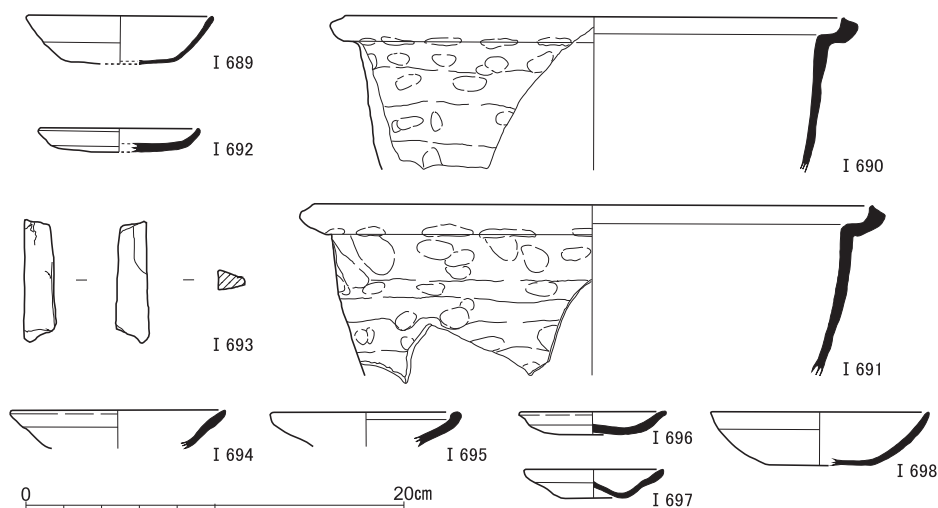


図44 S K27出土遺物 (I 689土師器, I 690・I 691瓦器), S X59出土遺物 (I 692土師器), S X65出土遺物 (I 693砥石), S X66出土遺物 (I 694・I 695土師器), S X67出土遺物 (I 696～I 698土師器)

の皿の複数点の出土である。同種の土器は、吉田南構内では220地点、医学部構内では134地点などでもまとまって出土している。I 712は、大型のバケツ形を呈する瓦質の土器。内外面とも撫でて平滑に仕上げられている。

S K23出土遺物 (I 716～I 722) 南区中央の小規模な瓦溜出土遺物。軒丸瓦主体で、I 716・I 717は外区を花卉状の装飾で飾る巴文。範の彫り込みはきわめて浅い。I 718・I 719は珠文で飾る巴文。範の木目が鮮明に残る。I 720は隆線で表現する単弁八葉蓮華文で、中房に1+4個の蓮子をもつ。I 721は同種の表現だが、六葉蓮華文とみられる。I 722は広端面に斜線の範記号をもつ平瓦。凸面は縄叩き痕がそのまま残る。I 716・I 721の巴文軒丸瓦は構内遺跡では初出であり、近隣でも類例を知らないが、他の軒丸瓦と同様、製作年代としては平安時代後期11～12世紀代の製品とみられる。状況から見て、それらが、中世に至って廃棄されたとみるのが自然だろう。

S X49・50・51・53出土遺物 (I 726～I 731) 同じく南区中央付近で、S X50・51・53は、それぞれ茶褐色土掘り下げ中に、硯の完存品I 729・I 730や瓦器火鉢の大破片I 731が単独で出土した遺構である。S X49は小規模な集石遺構に混じって出土した遺物。I 723は褐色を呈する土師器皿E類、I 724・I 725は灰白色の土師器碗。I 727・I 728の瓦器鍋や羽釜の特徴とあわせ、中世後半期のまとまりといえる。I 726は須恵器質の焼成の壺で、器壁がかなり厚い。特異な器形で、類例や産地を知らない。

中世の遺跡

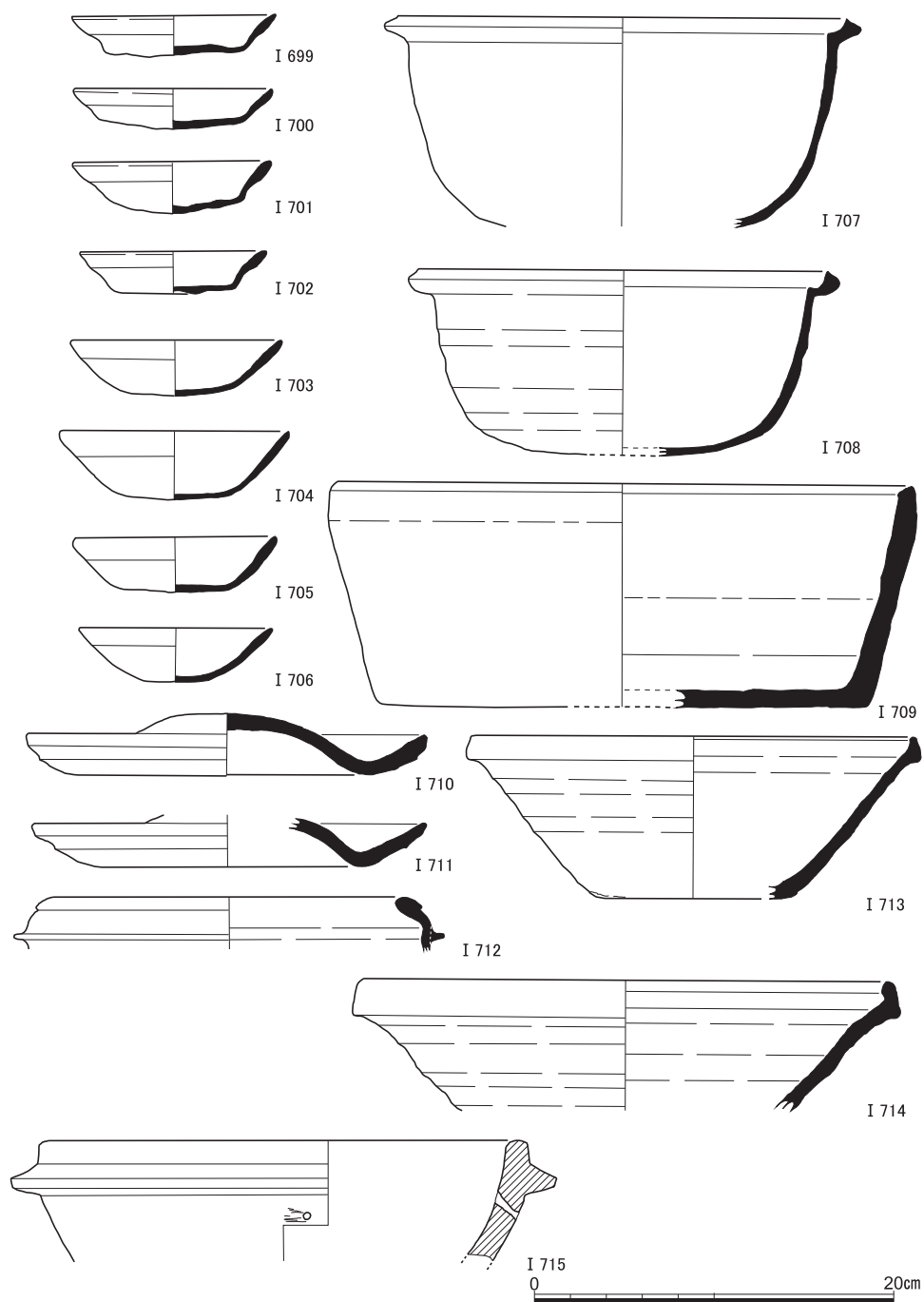


図45 S X55出土遺物（I 699～I 706土師器，I 707～I 712瓦器，I 713・I 714須恵器，I 715石鍋）

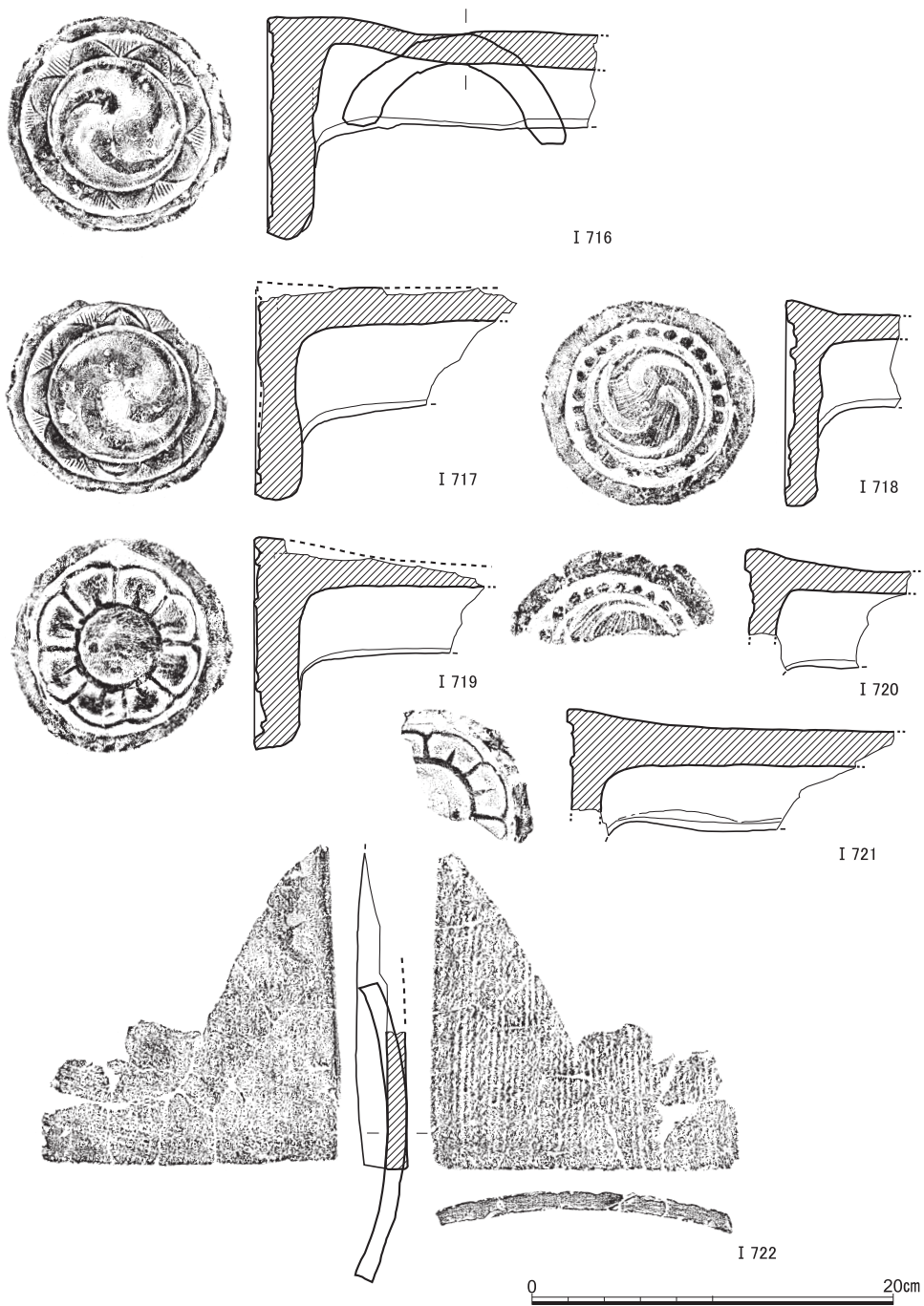


図46 S K 23出土遺物 (I 716～ I 721軒丸瓦, I 722平瓦)

中世の遺跡

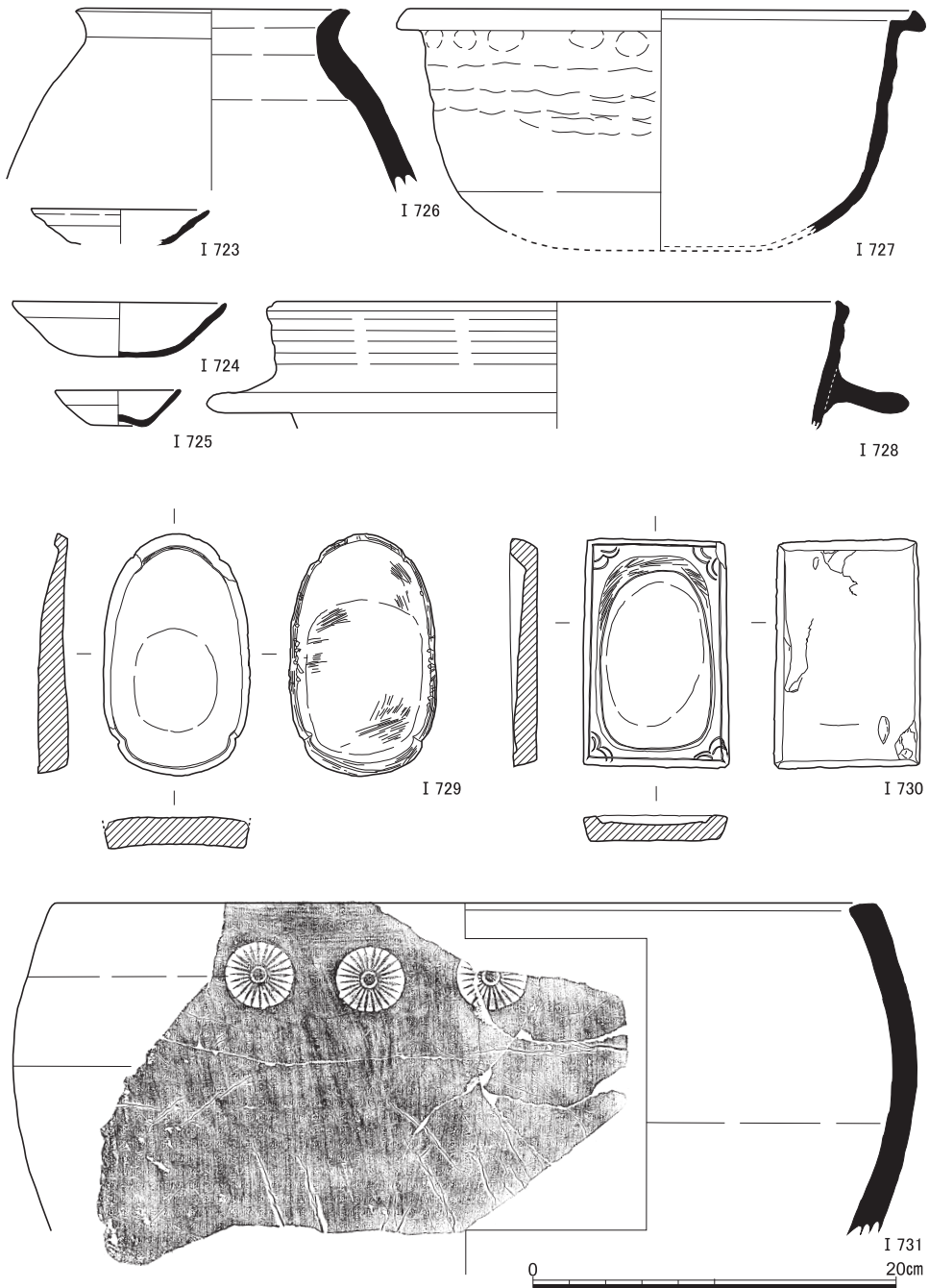


図47 S X49出土遺物 (I 723～I 725土師器, I 726須恵器, I 727・I 728瓦器), S X50出土遺物 (I 729石硯), S X51出土遺物 (I 730石硯), S X53出土遺物 (I 731瓦器)

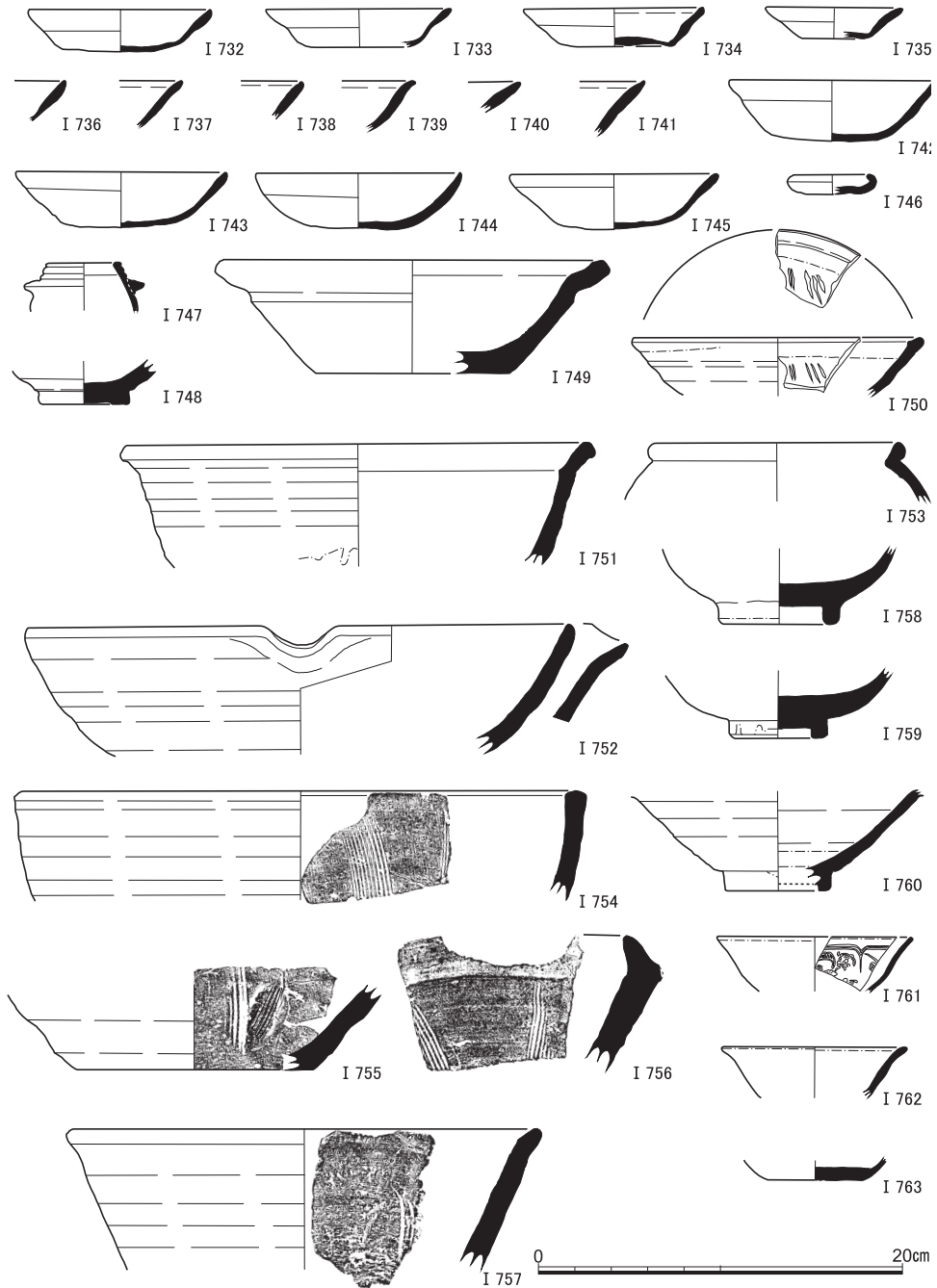


図48 SD10出土遺物(1) (I 732～I 746土師器, I 747瓦器, I 748～I 752灰釉系陶器, I 753褐釉陶器, I 754～I 756陶器備前, I 757陶器信楽, I 758青磁, I 759～I 763白磁)

中世の遺跡

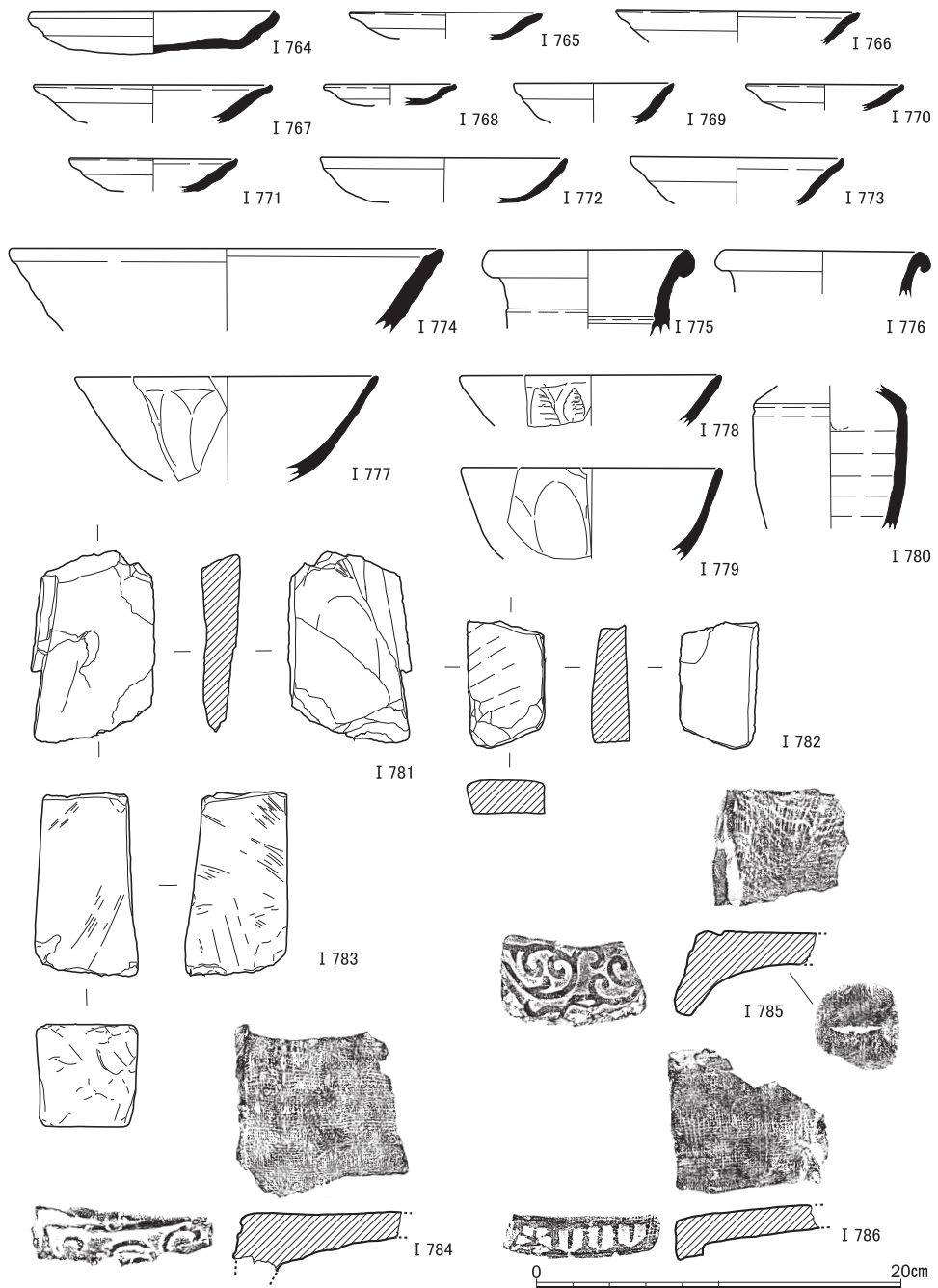


図49 S D13出土遺物 (I 764～I 773土師器, I 774陶器, I 775・I 776白磁, I 777～I 780青磁, I 783砥石, I 786軒平瓦), S D10出土遺物(2) (I 781・I 782砥石, I 784・I 785軒平瓦)

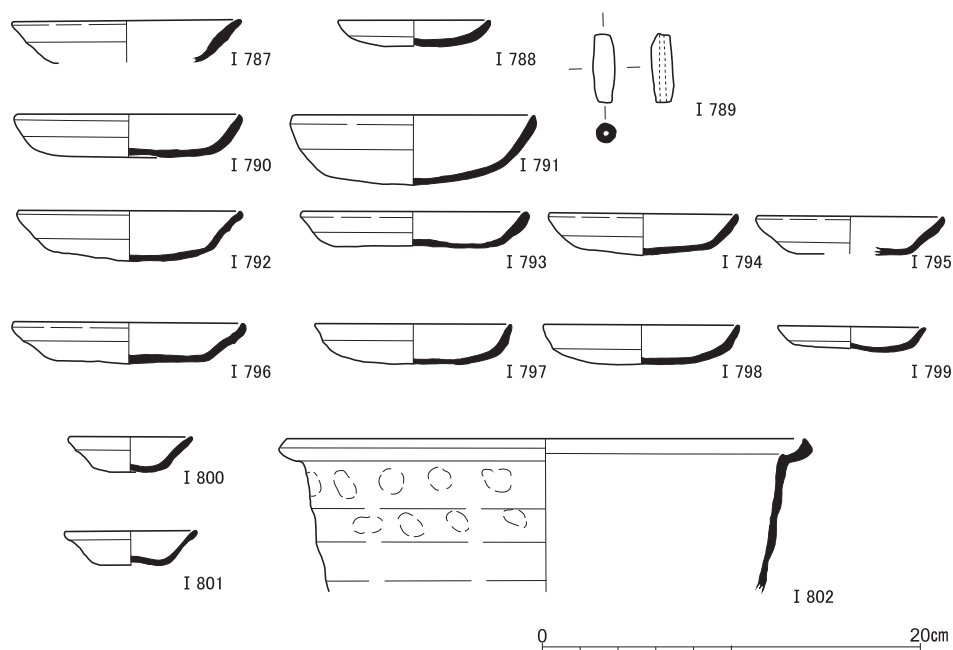


図50 S D14出土遺物（I 787土師器，I 789土製品），S D22出土遺物（I 788土師器），S X26出土遺物（I 790・I 791土師器），茶褐色土出土遺物（I 792～I 801土師器，I 802瓦器）

S D10・13出土遺物（I 732～I 786） 北区の大溝からの出土遺物。中世各時期の多様な種類の遺物を含んでいるが，土師器の碗皿類は少量である。そのなかで，I 737～I 741，I 766～I 771といった，F類の土師器が一定量含まれており，最終的な埋没は中世4期，15世紀代といえよう。陶器の摺鉢でおろし目をもつものが目立っていることも，様相として符合する。I 754～I 756は備前，I 757・I 774は信楽である。

S D14・22・S X26出土遺物（I 787～I 791） いずれも北区北辺付近の遺構で，S X26は土師器2点の一括出土。I 787は一段撫で手法E類，I 788・I 789・I 790はD類の土師器皿，I 791は白色の土師器碗である。I 789は土錘。

北区茶褐色土出土遺物（I 792～I 802） 北区は，攪乱や土取り穴を含めた遺構の掘り込み部分が多数を占め，包含層としての遺存は少なく，とりあげ得た遺物も少量である。I 792～I 799は褐色を呈する土師器皿。一段撫で手法D類とE類が中心だが，I 797～I 799は，口縁部が直線的に立ち上がる器形で，乙訓在地形と呼ばれる系統の皿である。I 800・I 801は灰白色の凹み底小碗。I 803は瓦器鍋。中世後半期の製品だろう。

S D34・35・36出土遺物（I 803～I 820） 南区の南北溝S D34・36と，東西大溝の

中世の遺跡

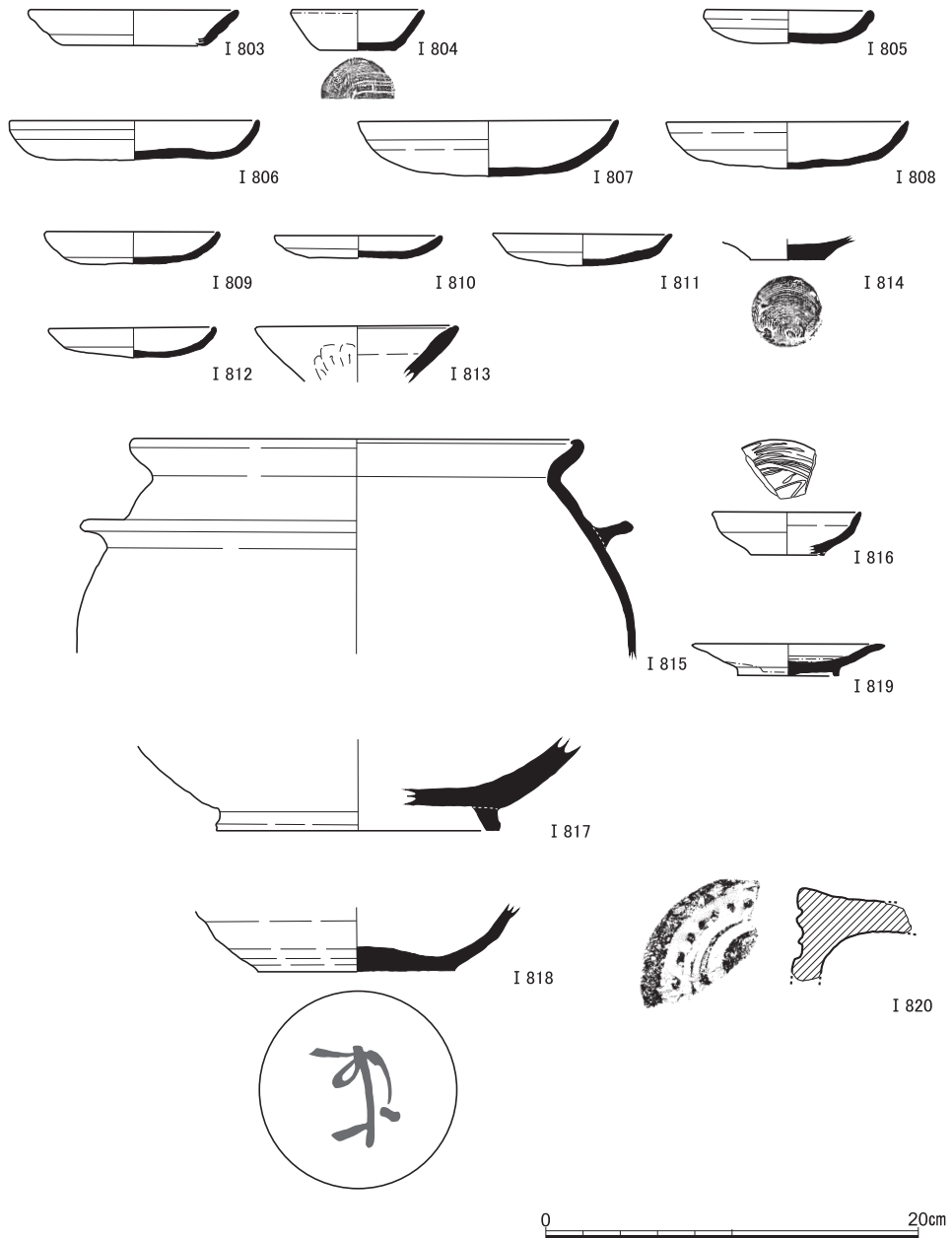


図51 S D34出土遺物（I 803土師器，I 804灰釉系陶器），S D36出土遺物（I 805土師器），S D35出土遺物（I 806～I 814土師器，I 815・I 816瓦器，I 817・I 818灰釉系陶器，I 819白磁，I 820軒丸瓦）

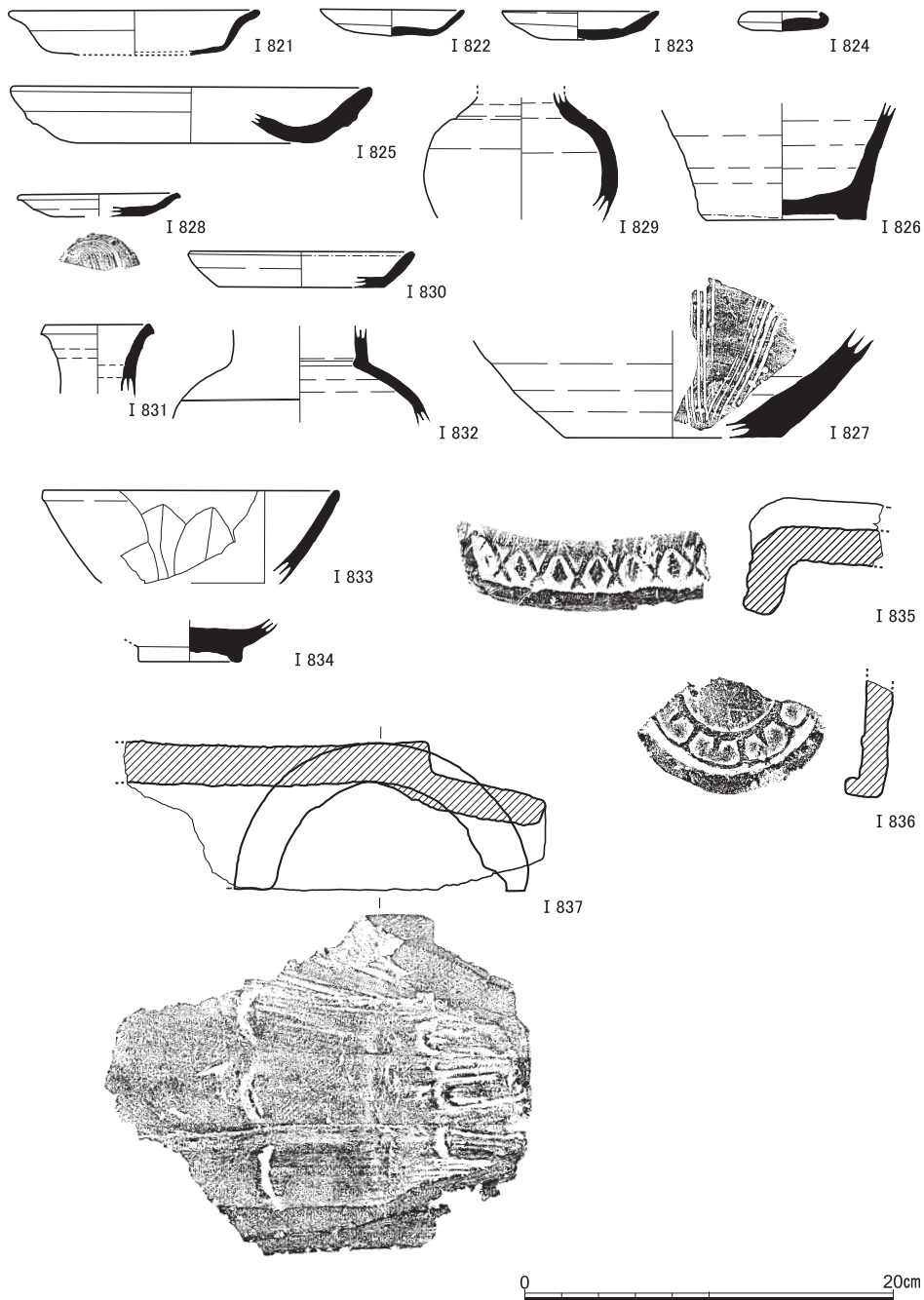


図52 S X61出土遺物 (I 821～I 825土師器, I 826・I 827陶器, I 828灰釉系陶器, I 829褐釉陶器, I 830～I 832白磁, I 833・I 834青磁, I 835軒平瓦, I 836軒丸瓦, I 837丸瓦)

中世の遺跡

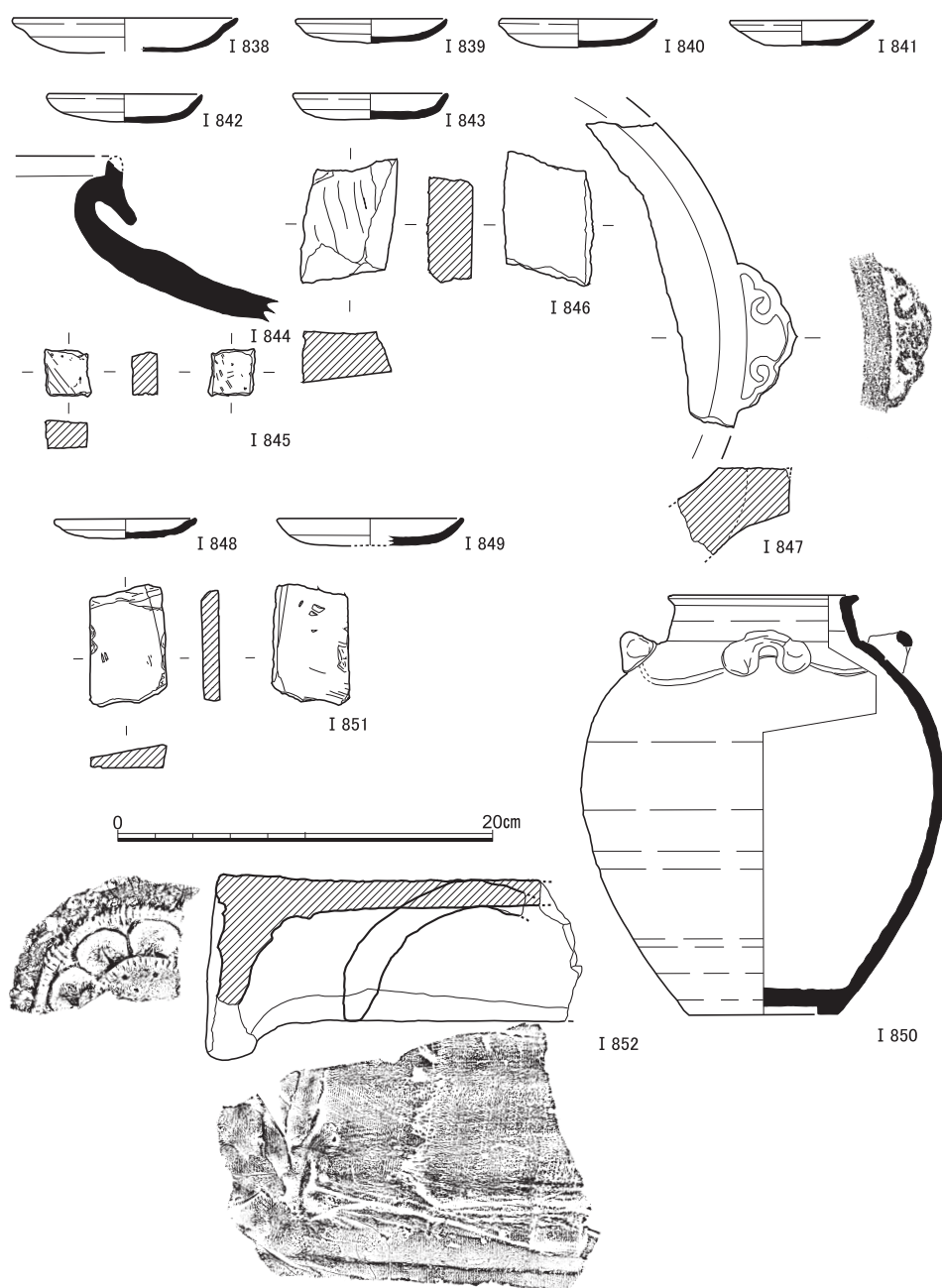


図53 S X62出土遺物 (I 838～I 843土師器, I 844陶器, I 845・I 846砥石, I 847石製品), S X 63出土遺物 (I 848・I 849土師器, I 850褐釉陶器, I 851砥石, I 852軒丸瓦)

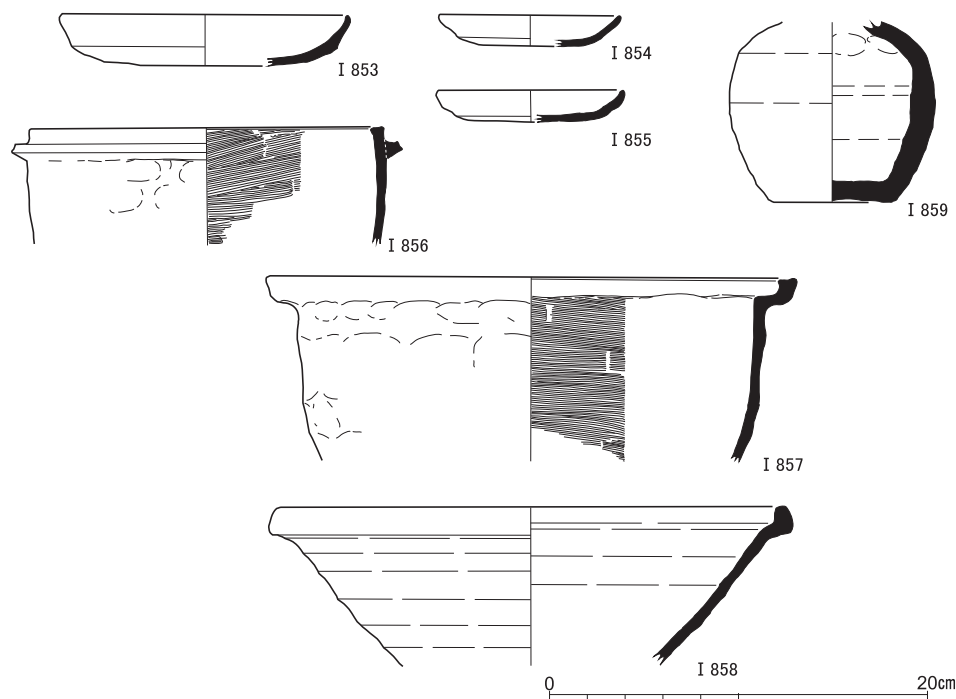


図54 S P 279出土遺物（I 853～I 855土師器）、S P 277出土遺物（I 856瓦器）、S P 165出土遺物（I 857瓦器、I 858須恵器、I 859陶器）

S D 35からの出土遺物。S D 35は中世1期の土師器皿類ほか各種の遺物が出土している。I 806はD類、I 807～I 812は乙訓在地形と呼ばれるもの。I 813は厚手の器壁をもち、外面を下から上へ削りあげて調整している特異なもの。時期が異なる製品かも知れない。I 814は回転糸切り痕を残す底部で、白色を呈する。I 815は大和形とされる土釜で、外面に煤が濃く付着している。I 817・I 818は灰釉系陶器の摺鉢と碗の底部で、後者には墨書が認められるが、判読不明である（図版17）。

S X 61・62・63出土遺物（I 821～I 852） 南区の建物S H 1周囲で検出された集石遺構に関連する遺物である。各時期の遺物が混在しているが、中世3期が主体である。土師器皿類は少なく、陶磁器や瓦の大破片が目立つ。I 821～I 823はE類の皿、I 825はオオヤツカサ土器である。I 827は陶器備前の摺鉢、I 828は同じ備前とみられる小壺。I 837は丸瓦の玉縁部分で、内面に布目と吊り紐圧痕、外面は刷り消された細かな縄叩き痕。I 847は花崗岩製の装飾品の一部で、唐草風の浮き彫り装飾を施した把手が付された、径40cm弱の浅い皿状のものとみられる。

中世の遺跡

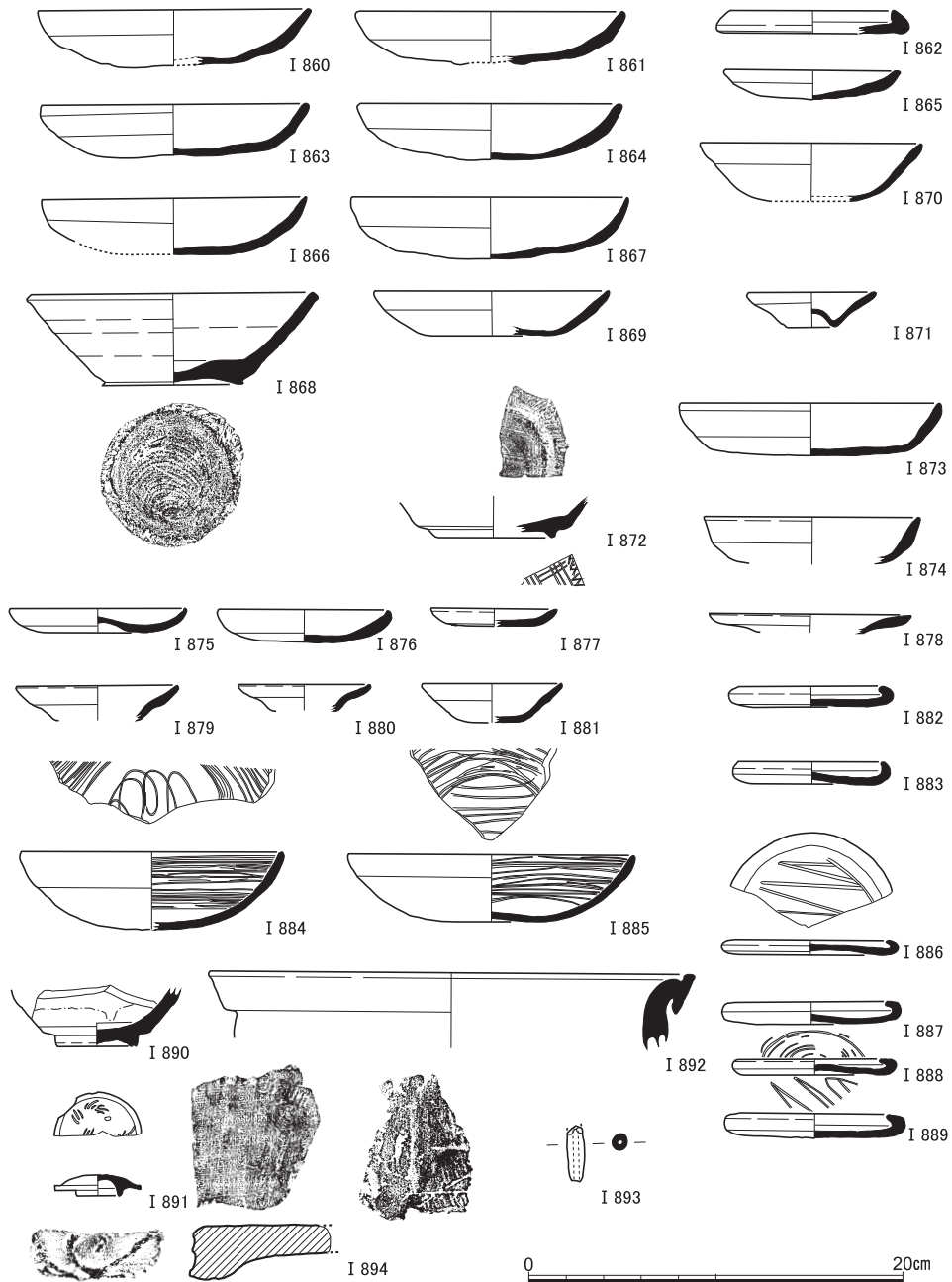


図55 S X14出土遺物 (I 860～I 862土師器), S X18出土遺物 (I 863～I 865土師器), S X22出土遺物 (I 866・I 867土師器), S X23出土遺物 (I 868灰釉系陶器), S X24出土遺物 (I 869～I 871土師器, I 872灰釉系陶器), 北区不形土坑出土遺物 (I 873～I 883土師器, I 884～I 889瓦器, I 890灰釉系陶器, I 891白磁, I 892陶器, I 893土製品, I 894軒平瓦)

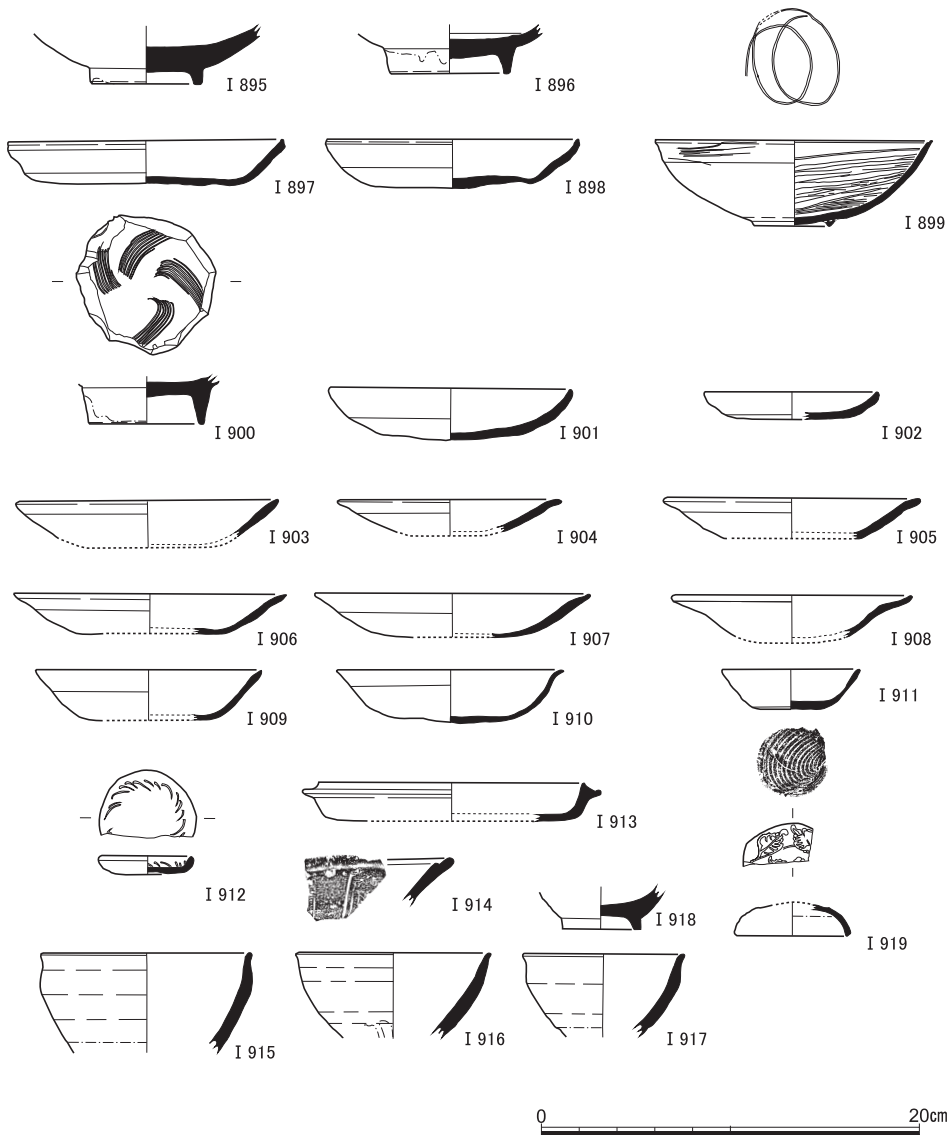


図56 S X42出土遺物 (I 895青磁, I 896白磁), S X47出土遺物 (I 897・I 898土師器, I 899瓦器, I 900白磁), SE11出土遺物 (I 901・I 902土師器), 南区不定形土坑出土遺物 (I 903～I 912土師器, I 913瓦器, I 914～I 917灰釉系陶器, I 918須恵器, I 919白磁)

中世の遺跡

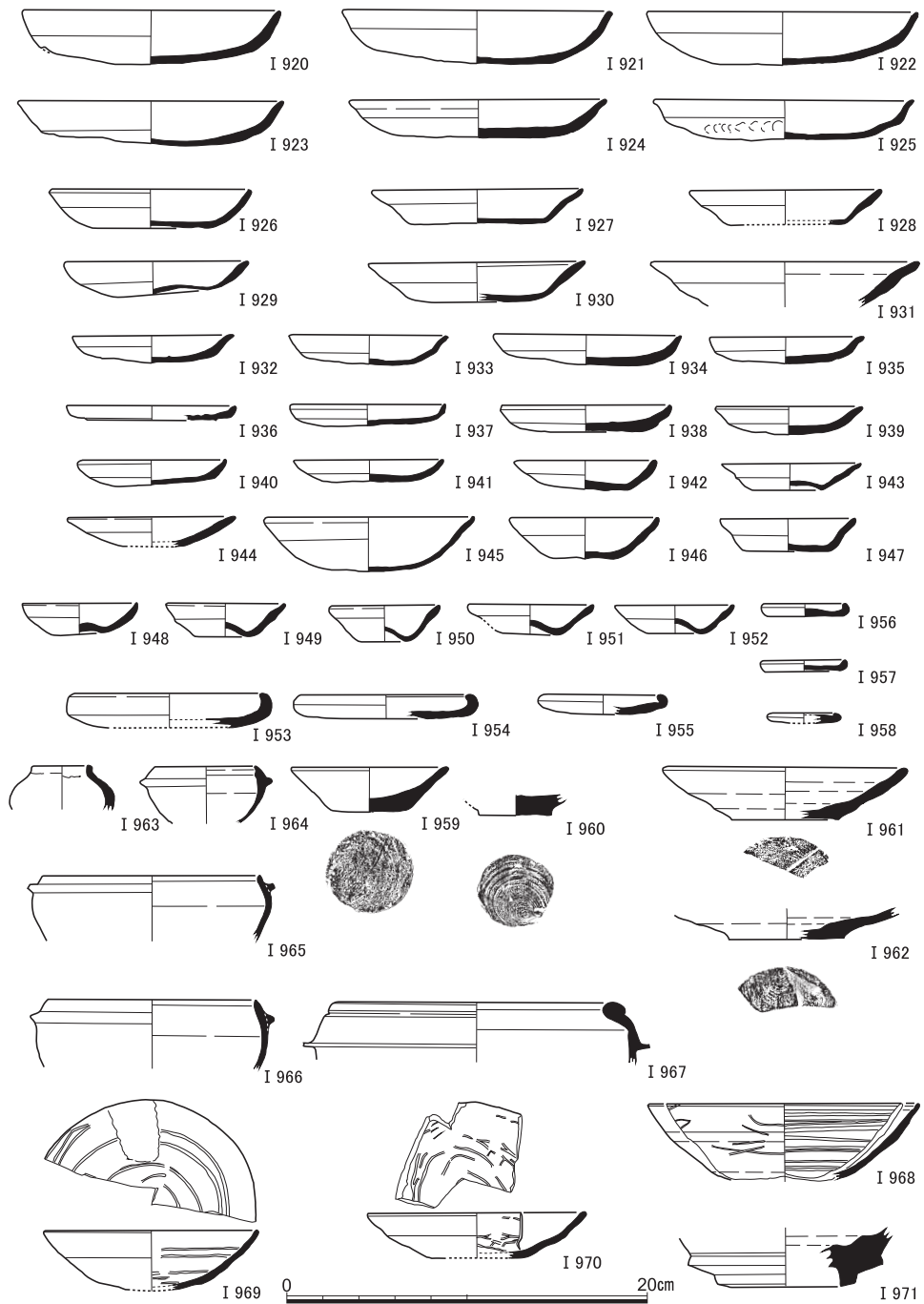


図57 茶褐色土出土遺物(1) (I 920～I 967土師器, I 968～I 971瓦器)

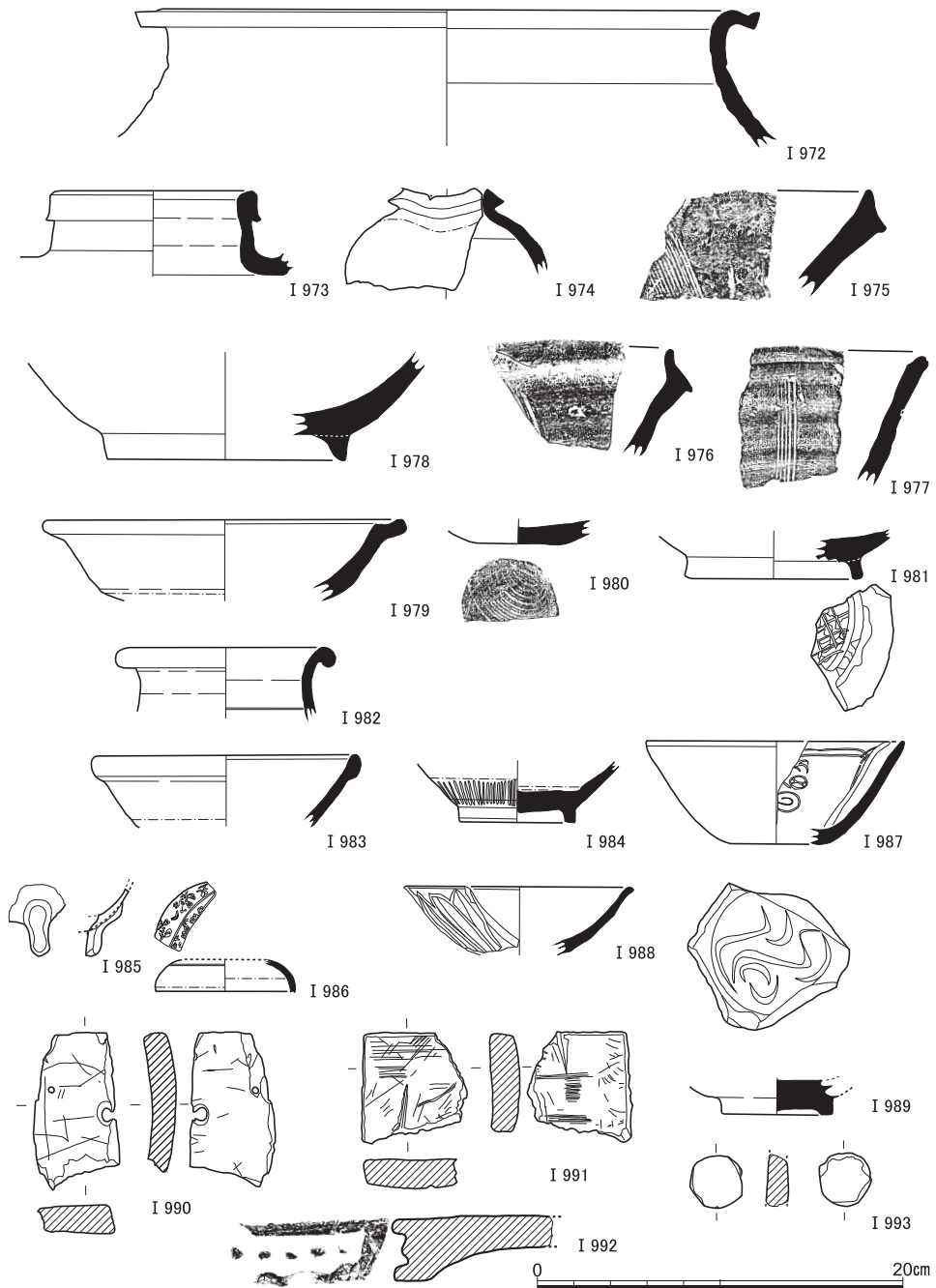


図58 茶褐色土出土遺物(2) (I 972～I 977陶器, I 978～I 981灰釉系陶器, I 982～I 986白磁, I 987～I 989青磁, I 990・I 991滑石製品, I 992軒平瓦, I 993土製品)

中世の遺跡



図59 出土銭貨の種類と出土遺構 (I 994～I 1005) 縮尺1/1

S P 277・279出土遺物 (I 853～I 856) S H 1の下面にあるピットからの出土遺物である。S D 35とともにS H 1に先行する遺構として、建物の存続期間を考える際の上限の手がかりとなろう。I 853～I 855の土師器皿類はいずれも厚手のD類であり、中世1期、13世紀代に比定できる。したがって、S H 1はそれより後の時期に建てられ、上記S X 61～63が示すような、中世後半期のうちに廃絶したと考えることができよう。

S P 165出土遺物 (I 857～I 859) 南区中央の小規模な土坑の出土遺物。I 858は東播系の須恵器摺鉢で、口縁が上方にしっかりと立ち上がる形態をとることから、中世後半期の製品だろう。I 859は、I 828に特徴を同じくする備前とみられるの陶器小壺。

S X 14・18・22～24・北区不定形土坑出土遺物 (I 840～I 894) S X 14・18・22～

24は、北区の不定形土坑の埋土内から一括で出土した遺物や集石遺構に遺構名を付したものであり、不定形土坑にともなう出土遺物と同列に考えて良い。土師器皿類の様相でみると、I 863はD類、I 860・I 861・I 864～I 867は乙訓在地形と呼ばれる特徴をもつもので、中世1期の資料と言えるが、I 871のように、灰白色を呈する凹み底の小椀でも後出の形態をとるものや、I 878～I 880といった、E類でもE₃・E₄類とされるものが含まれる。よって、土の採取そのものは中世後半期にもっぱら為され、そのさいに先行する中世前半期の遺構を破壊したことが、こうした遺物の様相に反映しているものと思われる。I 892の陶器常滑の甕も、上下に大きく肥厚する形状で、中世後半期の特徴を示している。ただし、中世前半期の遺物も遺存状態は良好であり、I 884～I 889の瓦器椀や受皿などがある。

S X 42・47・南区不定形土坑出土遺物（I 895～I 917） 上記の北区不定形土坑と一連の土取りの遺構といえるもので、S X 42は埋土上面の集石遺構、S X 47は埋土内で検出された土器溜であり、2次堆積の可能性が高い。中世前半期の遺物とともに、I 903～I 908といったF類の土師皿が出土している。北区と同様に、中世後半期が不定形土坑の形成時期であることを示すとともに、北区ではこうしたF類の土師器皿類は目立たないことから、南区不定形土坑の方がより後出の遺構である可能性があろう。I 914の陶器摺鉢片や、I 915～I 917の灰釉系陶器の天目なども、中世後半期以降の特徴を示すものであり、遺構の形成時期が下ることを傍証する状況と言える。

南区茶褐色土出土遺物（I 920～I 993） 南区の包含層からは、中世各段階の各種の遺物が出土している。土器溜などの内容を反映して、I 920～I 925・I 932～I 937といった、中世前半期の乙訓在地形土師器と呼ばれる土師器皿類が目立っている。

銭貨（I 994～I 1005） 中世以前に鑄造年をもつ銭貨のうち、銭種が判読できるものをすべて掲げた。

北側に隣接する378地点では、調査面積1700㎡で160点の渡来銭出土が報告されている。今回は、南北両調査区合わせた調査面積はそれを上回るにも関わらず、銭貨の出土は1割にも満たない。遺跡の残りの悪さを差し引いても、明らかに出土量に差があるといえる。

6 所謂「乙訓在地形土師器」と呼称される中世土師器皿類について

今回、南区の土器溜S X 48からは、これまで構内遺跡で出土してきた中世土師器皿と特徴を違えるものがまとまっており、平安京・中世京都において、近年「乙訓在地形土師器」（以下、「乙訓形」と略す。また従来通有の土師器皿は「京域主流形」とする。）と呼称さ

れている一群に相当すると判断された。この呼び名については、管見では京都市埋蔵文化財研究所による御所内の京都迎賓館建設にともなう調査（1998～2001年）で出土した一群の資料について速報紹介されたのが最初のものであり〔加納・丸川2002〕、その後報告書でも踏襲されている〔加納2004〕。

しかし、同種の特徴をもつ土師器皿類の存在については、そのかなり以前から知られていた。京都府教育委員会による市内の内膳町遺跡の報告を主担した伊野近富氏を中心に「D類」として類型区分された一群がそれである〔京都府教育委員会1980 p.181〕。また平安京域内での古代～近世における土師器編年が体系化された際にも「主体を成す土師器以外の土師器食器類」として紹介されている〔小森・上村1996 p.251〕。そして、その製作地を伊野氏は楠葉ではと想定し〔伊野1987〕、小森氏は乙訓産ではと想定しつつ、近似するものは旧三島郡域にも存在するとも指摘している。

以上のように、「乙訓形」は、その名称の示すように乙訓産の搬入品であるかどうかについては、即断できないのが実情である。こうした流れをふまえながら、今回は便宜的に「乙訓形」としたけれども、ここであらためてその内容を簡潔に検討し確認しておく。

「乙訓形」とされるものの特徴 まず、既往の言説で指摘されている「乙訓形」の特徴について、概観しておこう。器形は、底部からの立ち上がりは直線的であり、口縁端部を外反気味に処理して、面取りはしない。器壁も厚手。おおむね大小の2つの法量規格がある。白色を呈するものはない。ほか、胎土中に金雲母を含有する、内面の刷毛調整が目立つという記述もみられるが、これらの点に関しては、乙訓形のみ限定できず、それ以外の「京域主流形」にも認められ、同定の根拠とならないといえる。もっとも特徴的なのは器形と思われ、平らに近い底部から直角に近い角度でまっすぐ立ち上がる輪郭は、丸みを帯びた皿形で斜め上方にカーブを描いて立ち上がる「京域主流形」と明らかな違和感を感じさせる。また、口縁端部の仕上げに面取りを行い、断面形が三角形を呈する形状のものが基本の「京域主流形」に対して、面をもたないことも大きな違いであるが、この点については折衷的な様相を示す資料の存在が報告されているので、認定の決め手にはならないと言えよう。

今回出土品（S X 48）の特徴 今回のS X 48からの出土資料については前節で報告したところであるが、あらためてまとめると、口縁部計測法で110.8個体のうち、およそ9割以上が「乙訓在地形」の特徴を示す個体であった。法量では9cmと14cmにピークをもちつつ、15cmを越えるものも一定量あり、総じて大皿が「京域主流形」とくらべてやや法量

が大きい印象を受ける。胎土の違いははっきり指摘できないが、色調は赤みを帯びた明るい橙色を基調とし、褐色～灰褐色系の色調が基本の「京域主流形」と異なっている。口縁端部の仕上げ形態は複数ある。煤など使用の痕跡は特に無い。

「乙訓形」が盛行する時期と分布圏 以上の特徴を持つ土器群は、管見する限り、平安京域では散発的な出土にとどまっており、さきの京都迎賓館建設地点でのまとまった出土は例外的と言える。京都大学構内遺跡でも、注意していくと、13世紀代を中心に抽出することができる。例えば北側に隣接する吉田南構内の378地点〔例えば富井ほか2015 図34-I 141・I 142〕や、医学部構内の358地点〔伊藤2013 図57-II 264〕などで既出である。ただし、そのみがまとまって出土するあり方は今回が初めてであり、旧平安京域や鴨東地域は、これらが主体となる空間からは外れていると言って良からう。

一方、桂川を超えた乙訓地域では、良好な一括出土の事例に乏しい状況であるが、大山崎町松田遺跡（長岡京右京1008・1023次S D01）などの出土品を見る限りでは、少なくとも13世紀代は土師皿の主体がこのタイプとなっている〔京都府埋文研2012 第10図〕。「乙訓在地形」と呼ばれる所以といえるが、しかし、さらに西方の摂津でも、高槻市域の上牧遺跡などでも類似の器形が主流であり〔高槻市教育委員会1980 第12図-22～41など〕、また、対岸の八幡市域の石清水・木津川河床・上津屋遺跡などや、枚方市域などでも同様な様相といえる。小森俊寛氏により地域色の強いL o形式と分類されるのは、この種の土師器に相当しよう〔八幡市教育委員会2003 p.15〕。

西限や北限について明確には確かめていないが、宇治以南の南山城地域では主流とならないようであり、精華町棕の木遺跡ではこの種の土器はほとんど認められない。よって、いわば三川合流地帯周辺の乙訓・北河内・東摂といった空間の13世紀代ごろが、これら「乙訓形」の主体となる範囲とみられる。こうした状況に鑑みると、「乙訓形」との名称を付していても、乙訓産と限定はできない、という評価が妥当であろう。乙訓地域は主体的分布圏だが、産地としては限定できないということであり、胎土での区別も現状では難しいと思われる。

「乙訓形」出土の意味 ここで注目しておきたいのは、楠葉形瓦器碗との類似点である。口縁端部付近を強い撫でにより外反させる点は、「京域主流形」でも同様であるが、端部を面取りしない「乙訓形」は、端部の外反が、より瓦器碗に近い器形のラインを描いているように思われる。また、瓦器には皿形もごく少量あるが、その器形には、所謂「乙訓形」の小皿にきわめて近いものが認められる（例えば、高槻市宮田遺跡出土品〔高槻市

教育委員会1980 第30図-23~26], 京都大学本部構内A X 25・26区S D 5 出土品〔古賀1999 図38-Ⅱ164~Ⅱ170〕など)。こうした理解が正しいとすれば、楠葉形瓦器の技術を持った集団が、「乙訓形」土師器の製作に関与しているのではないか、という推測も可能となろう。

楠葉については、「楠葉御牧」という摂関家の私領としての存在とともに、古代以来の土器製作についての文献史料が多数知られ、黒色土器~瓦器についても、生産遺跡が判明している〔宇治田1991〕。ところが、残念ながらその地における土師器生産の様相については、判然としていない。今後それらに注目して、具体的状況を明らかにしていくことが急務となろう。

さて、こうした「乙訓形」の京内でのスポット的出土の様相については、荘園貢納品としての解釈が示唆されているが〔加納2004〕、史料などによる根拠はない。局所的な出土のありようは、商品としての流通であることの否定材料ではあろうが、貢納品であったかどうかはさておき、当時の製作集団が、土地の領主とは限らない権門に付属するという複雑な隷属関係は考慮しておく必要はあろう〔脇田1995〕。

14世紀代以降、大和を中心とする新興寺社勢力の台頭、土器製作集団の専門化や商品化という流れに呼応して、樟葉の窯業生産も衰退していくとみられる。それまでは摂関家を中心とする公家層の差配する土師器の生産と流通であったとすれば、「京域主流形」の不足を補うものとして、摂関家の密接に関与する「乙訓形」が補填された可能性は十分にあり得よう。逆に言えば、13世紀代に顕著な事態であるとするならば、それこそが、いまだ平安時代的な状況を継承していた当時の土師器生産と流通の性格を示している、と評価できるのかもしれない。そして、福勝院比定地の近傍という、調査地の立地を考慮するならば、今回の出土そのものは不自然な事態ではないと言えることができよう。

7 近世・近代の遺跡

表土を除去すると、攪乱により破壊を被っていない部分については、おおむね全域で近世の遺物包含層である灰褐色土が堆積している。その灰褐色土を除去して検出されるのが近世の遺構である。本節では、そうした近世遺構とそこからの出土遺物に加えて、表土や攪乱坑中から採集された、近代の大学設置以降の磁器類についても、調査地の歴史的変遷を検討するうえでの重要資料と考え、合わせて報告する。

(1) 遺 構 (図版2・3・6・7・9, 図60)

南・北両調査区とも、東半域は、農耕用の柵の柱穴である方形の小ピット以外の顕著な遺構はみられない。一方、西半域は南北方向にはしるや区画や溝などがみられる。

西へと下る段差と関連遺構 北区ではY=2080付近と2090付近に、南区ではそれよりやや西寄りに、西へと下る柵田状の段差が形成されている。東側のラインは、比高差10cm程度のごく浅いものだが、西側のラインは、南へ向かうほど段の比高差が増していき、南区では1m近くに達している。この西側ラインはおおむね近世段階の字界に対応しており、土地区画として重要なものであったといえる。X=1240付近では、東西方向に北側へも下る小さな段差も認められる。段差を下った側の西側は、中世の不定形土坑群の広がるエリアであり、南区の場合は、土の採取によって生じた高低差がそのまま段差の高低差となっていることが、比高差が増している原因となっている。近世においては、不定形土坑が埋積して平坦化され、畑地となっており、包含層である灰褐色土を除去すると、全面に柵の柱穴痕である小ピットが検出されるほか、南区北壁際付近では複数の野壺が切り合って検出されたほか、集石や配石、遺物溜もみつまっている。集中具合から、南北調査区間の未調査部分に、東西方向の土地区画が存在している可能性も推測されよう。段差の上場に沿っては、溝SD28をはじめ、集石をともなうような南北溝が複数みつまっている。北方の111・220地点では字界に南北方向の路面が検出されており、今回は路面こそ検出できていないものの、同様な空間であったと想定している。

なお、この段差は、19世紀代までに収まるとみられる段階の多量の陶磁器を含む土層によって一気に埋積されている。現地が帝国大学敷地となる明治30年（1897）までは、柵田状の景観が続いていたのであろう。

不定形土坑群 北区の北西域は、現地表面から2m程度の深さまで掘削され、粗砂と土壌が縞状に埋積していた。埋土中からは近世末～近代初頭頃の陶磁器類や多量の礫が出土しており、状況から近世の土取穴であろう。中世段階の不定形土坑と異なり、2m前後の幅の長方形に近い区画を単位として互いが隣り合うように掘削されており、かつ土坑の底面はほぼ平坦になっている。基盤の粘土層をすべからく採掘したものと見える。区画間の境がわずかに高まりとして残ることから、平面的な掘削単位をおおよそ復元することができる。一部により深く掘りくぼめた穴があり、粘土層より下部の砂層に当たって止まっていることから、掘削土の探りを入れた痕跡と考えられる。調査区の西側へのひろがり是不明であるが、北側に隣接する378地点では検出されていないことから、南北はおおよそ10m強程度の掘削範囲であったとわかる。東西も同様であるとすれば、100㎡程度の方形の

近世・近代の遺跡

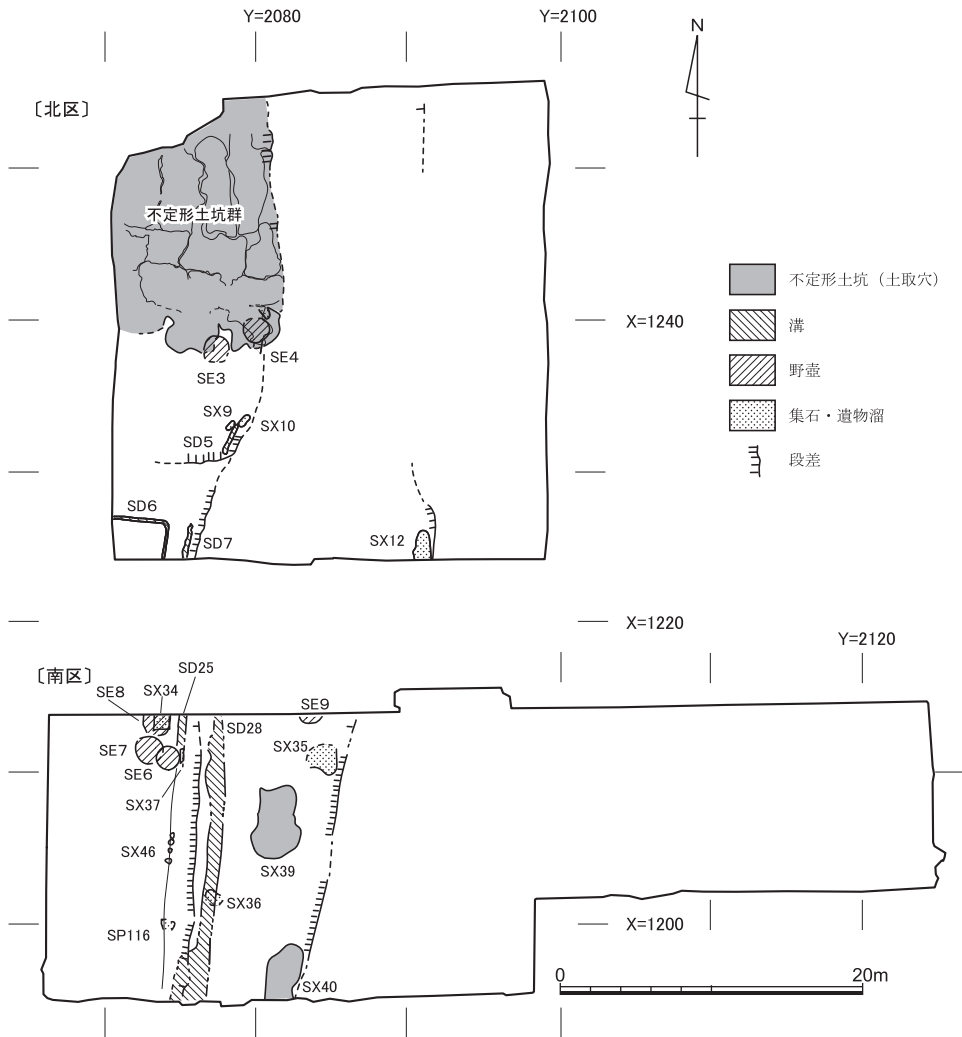


図60 近世主要遺構配置図 縮尺1/500

範囲を、規格的にきっちりと粘土を試掘した遺構であると評価されよう。

S X 39・40 南区の西側段差と東側段差の間にある大きな土坑。深さも2m近くあり、壁面はオーバーハングしている。中世の不定形土坑や、弥生時代の流路SR1を避けるように穿たれており、形状の特徴から粘土採取の土坑と見なされる。埋積土中から近世の陶磁器類が多く出土している。

野壺SE3・4・6～9 SE8以外、いずれも漆喰製の野壺である。

S X 9・10 北区の段差際にある、礫が充填された土坑。SX10は土師器を伴う。

S X12 北区南壁際で検出された棧瓦のまとまり。明治期以降に下る可能性もある。

S X34・36・46 いずれも陶磁器を交えた礫の集積遺構。

S P116 南区の段差際の裾部にある遺物溜。近世陶磁器が多量に集積していた。

(2) 遺物 (図61～73)

S X10出土遺物 (I 1006～I 1014) 遺存の良い近世土師器皿類を一定量含んだ遺構出土資料は、今回の調査ではこの遺構のみにとどまる。I 1006～I 1011は土師器で、I 1006～I 1008は見込みに圈線をもつ口径10cm前後の皿。黄白色を呈する。これらの法量や器形の特徴は、〔小森・上村1996〕のXⅢ期、18世紀代に収まる段階の資料と位置づけたい。I 1009・I 1010は手づくねの小皿、I 1011はやや高さのある器形で、底部に回転糸切り痕を残す。I 1013は京・信楽焼系の椀底部、I 1014は備前の摺鉢。

S E3・4・6・7出土遺物 (I 1015～I 1037) 野壺からの出土遺物。陶磁器類の各種の破片が出土している。I 1018やI 1022のように広東椀と呼ばれる丈高の高台をもつ染付椀が含まれることから、19世紀代に下る時期の資料を含むといえる。

S P116出土遺物 (I 1038～I 1078) I 1038～I 1044は土師器で、圈線をもつ皿I 1038・I 1039および特殊な厚手の製品I 1044には、内外面に煤の付着が著しい。I 1042は五徳、I 1043は炮烙であろうか。I 1045・I 1046は黄褐色に施釉される軟質施釉陶器。I 1047以下は、陶磁器の各種で、「くらわんか手」の染付椀や、瀬戸系とみられる鉢などが目立つ。おおよそ18世紀後半代が中心となる資料群であろう。

S D28出土遺物 (I 1079～I 1085) 少量の土師器や陶磁器類が出土している。上記のS P116出土遺物と内容的には共通している。

S X39・40・46出土遺物 (I 1086～I 1120) 18・19世紀代にわたる各時期各種類の遺物が出土している。I 1086～I 1096・I 1114は土師器。見込みに圈線をもつ皿と、手づくねの小皿が中心であるが、残りは良くない。I 1097は灯火具かとみられる小形の器台状製品。淡緑色の釉がかかる。I 1098～I 1102・I 1115は陶器灯明皿や灯明受皿。I 1108～I 1112・I 1118・I 1119は磁器染付各種。

不定形土坑群出土遺物 (I 1121～I 1165) 18・19世紀代にわたる各時期各種類の遺物が出土している。I 1121～I 1132は土師器。I 1131焼塩壺の蓋で、内面に布目を持ち、外面には、容器と紐で結束する際のかかりとなるような切れ込みが2カ所に施されている。I 1132は皿状の器形の内面とみられる側に、「徳」の陰刻が施されている。I 1135は、小片であるが、特徴からみて乾山焼の角皿口縁部の一部とみられる。同種の資料は病院構内

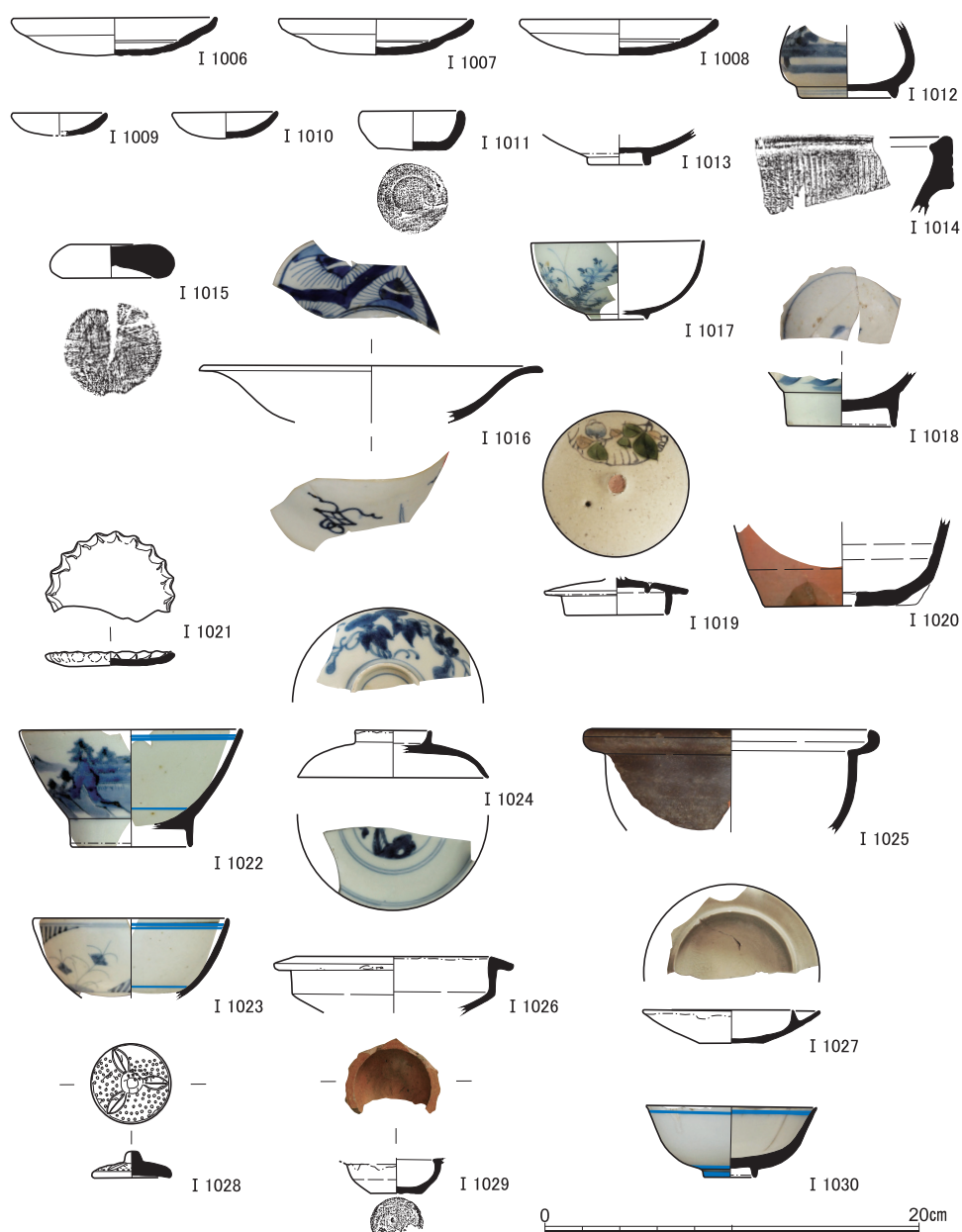


図61 S X10出土遺物（I 1006～I 1011土師器，I 1012磁器染付，I 1013・I 1014陶器），S E 3出土遺物（I 1015土師器，I 1016～I 1018磁器染付，I 1019・I 1020陶器），S E 4出土遺物（I 1021土師器，I 1022～I 1024磁器染付，I 1025～I 1027陶器），S E 6出土遺物（I 1028土師器，I 1029陶器，I 1030磁器染付）

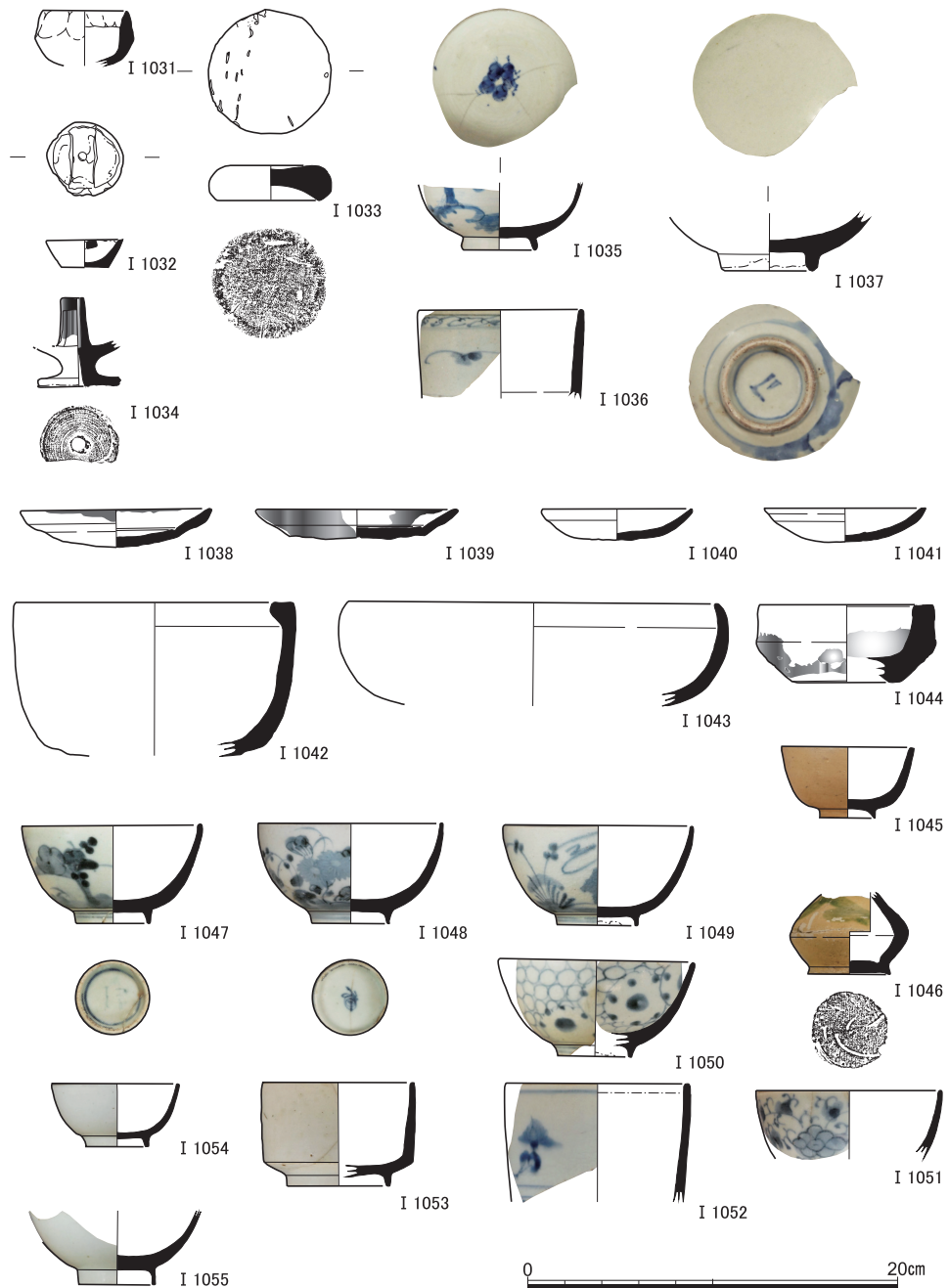


図62 SE7出土遺物（I 1031～I 1033土師器，I 1034陶器，I 1035～I 1037染付），SP116出土遺物(1)（I 1038～I 1044土師器，I 1045・I 1046軟質施釉陶器，I 1047～I 1052染付，I 1053～I 1055白磁）

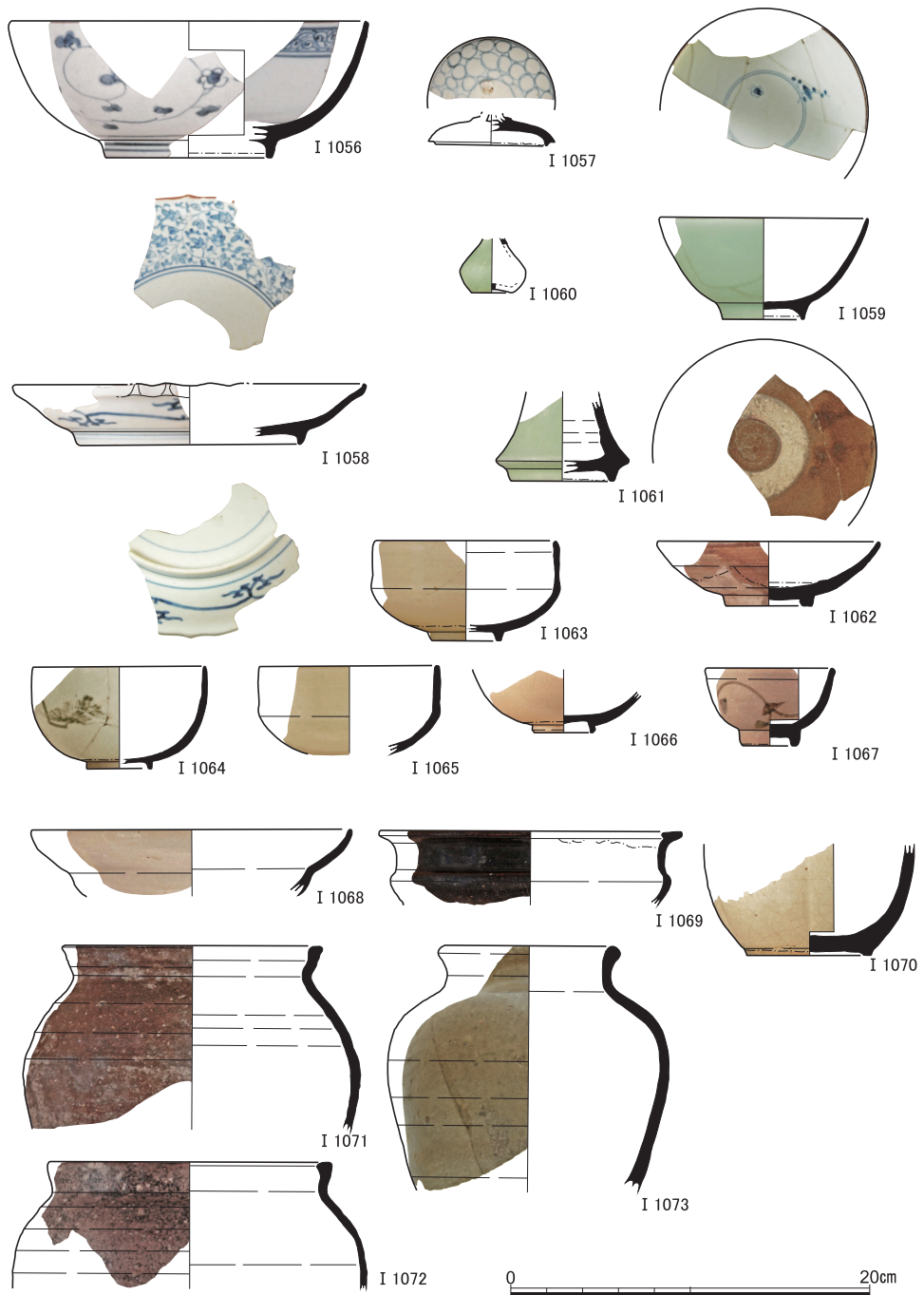


図63 S P116出土遺物(2) (I 1056～I 1058染付, I 1059～I 1061青磁, I 1062～I 1073陶器)

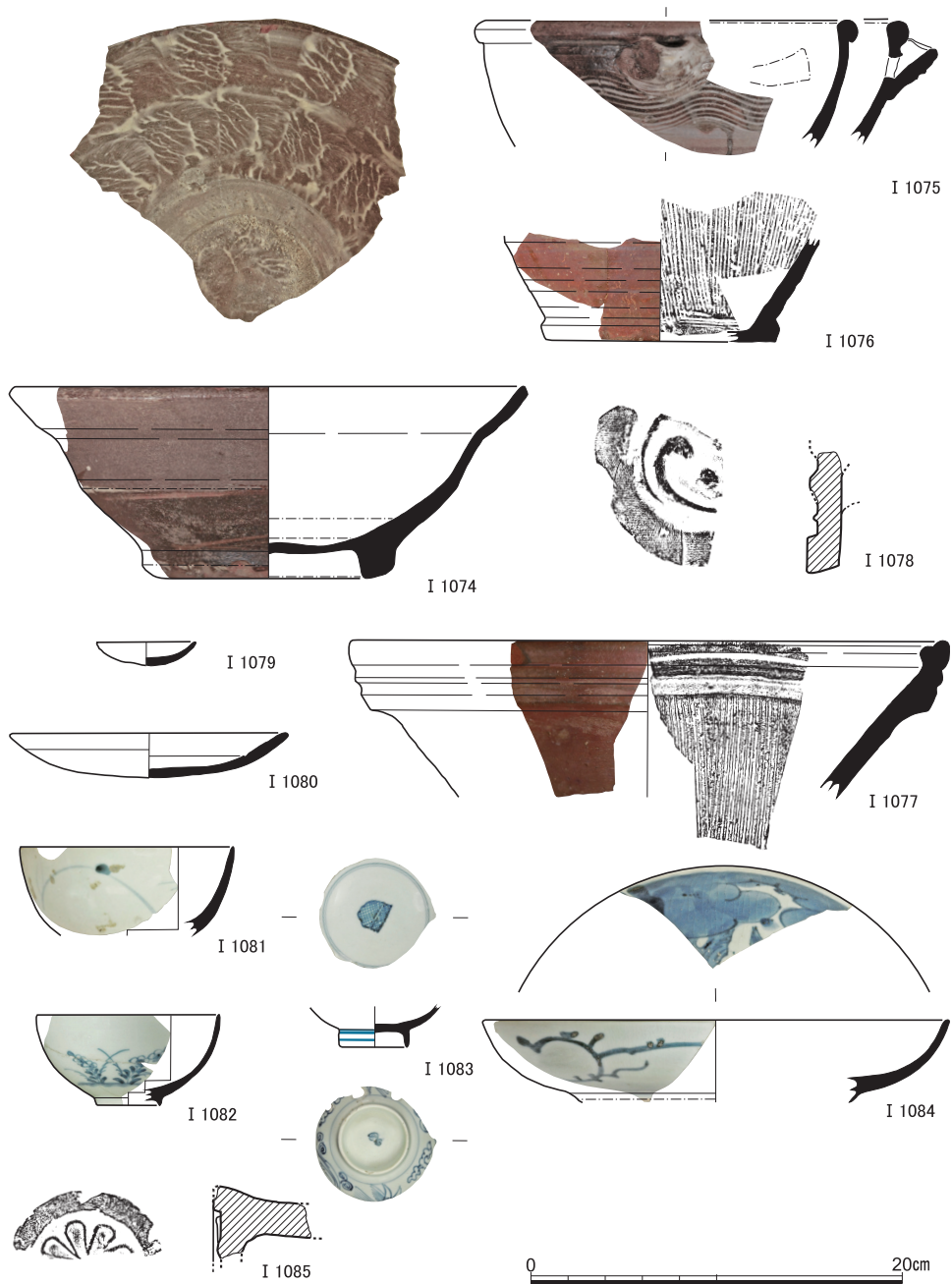


図64 S P116出土遺物(3) (I 1074～I 1077陶器, I 1078軒丸瓦), S D28出土遺物 (I 1079・I 1080土師器, I 1081～I 1084染付, I 1085軒丸瓦)

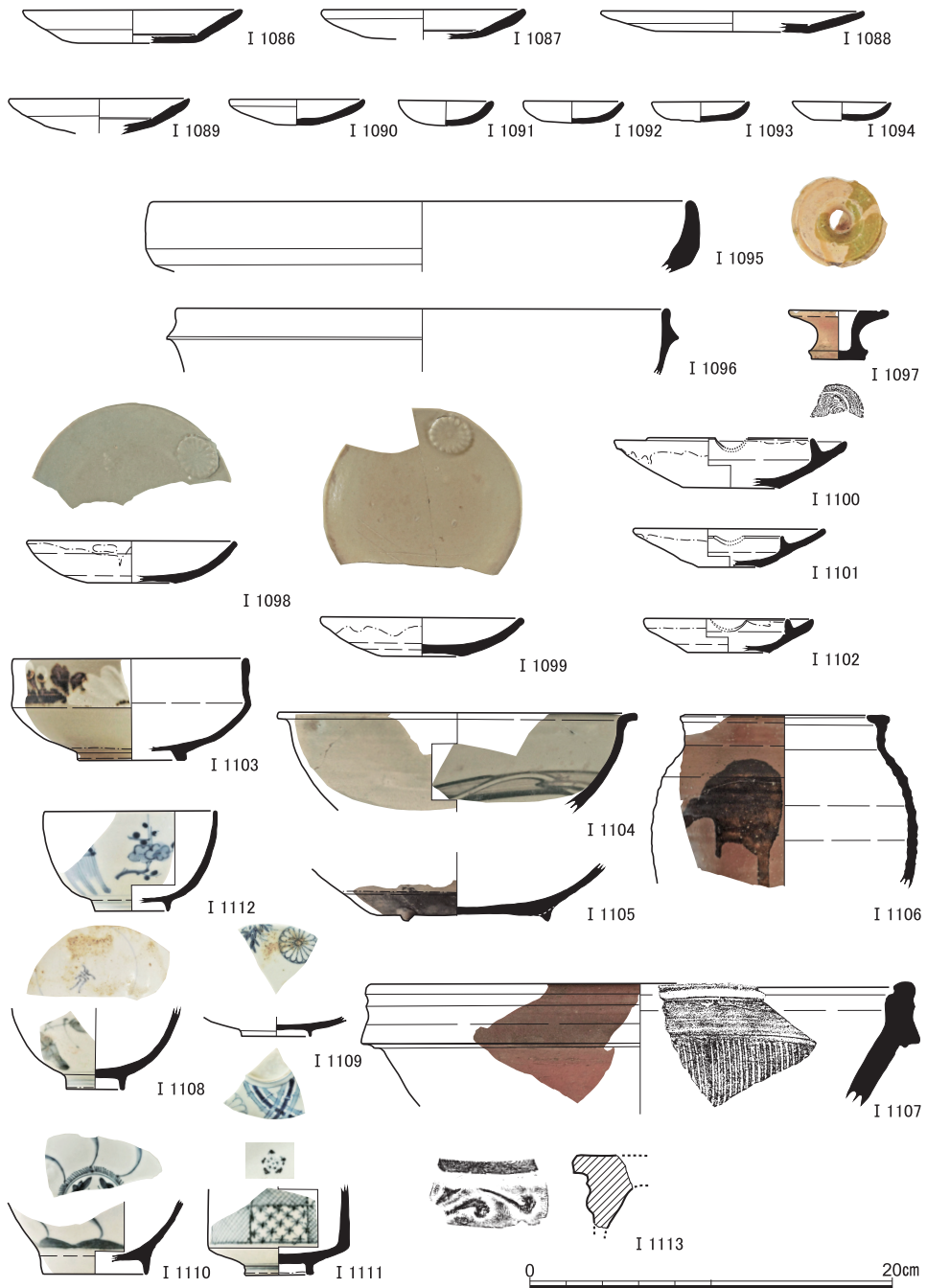


図65 S X39出土遺物 (I 1086～I 1096土師器, I 1097～I 1107陶器, I 1108～I 1111染付, I 1113軒平瓦), S X46出土遺物 (I 1112染付)

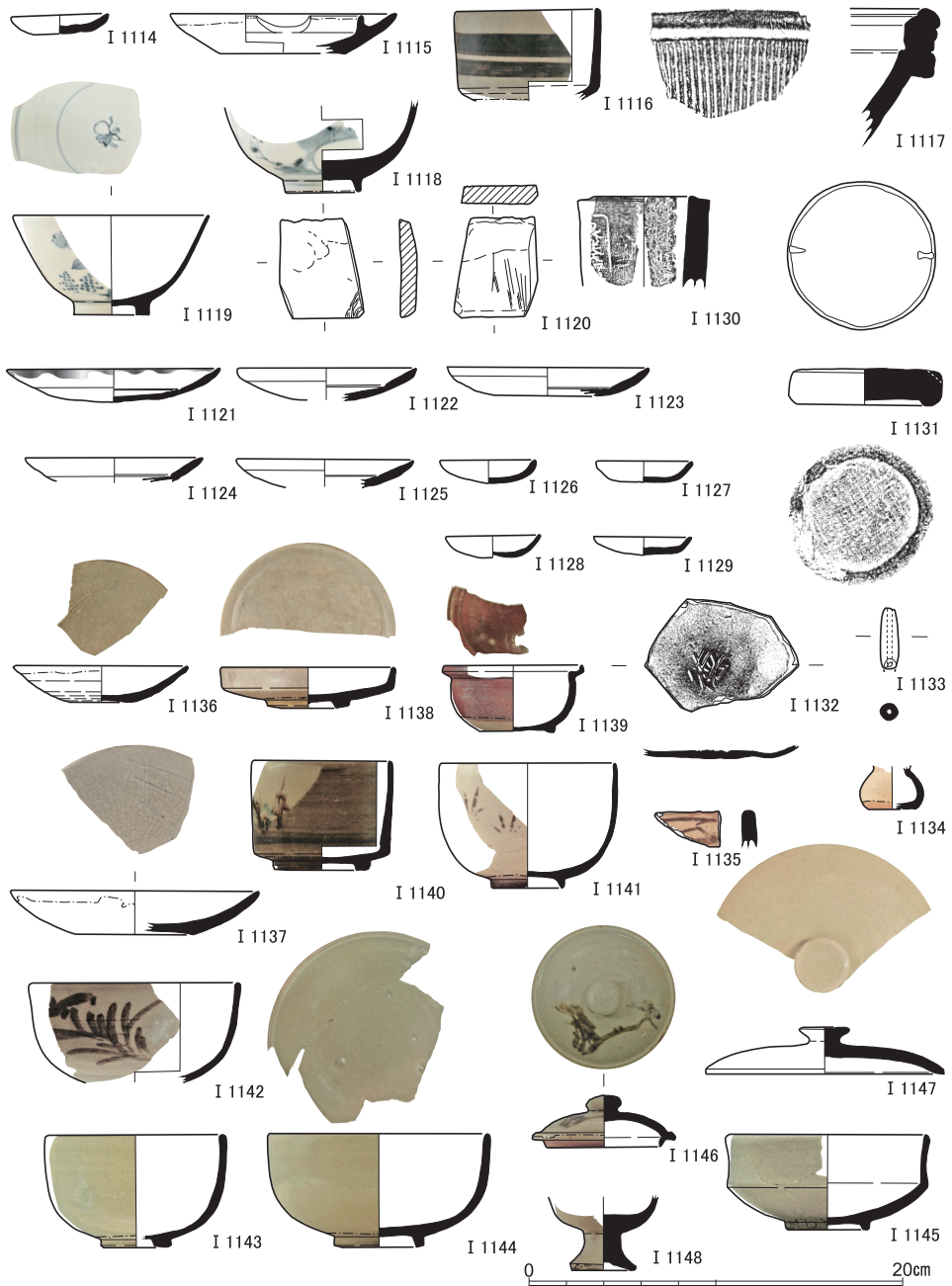


図66 S X40出土遺物（I 1114土師器，I 1115～I 1117陶器，I 1118・I 1119染付，I 1120砥石），不定形土坑群出土遺物(1)（I 1121～I 1132土師器，I 1133・I 1134土製品，I 1135軟質施釉陶器，I 1136～I 1148陶器）

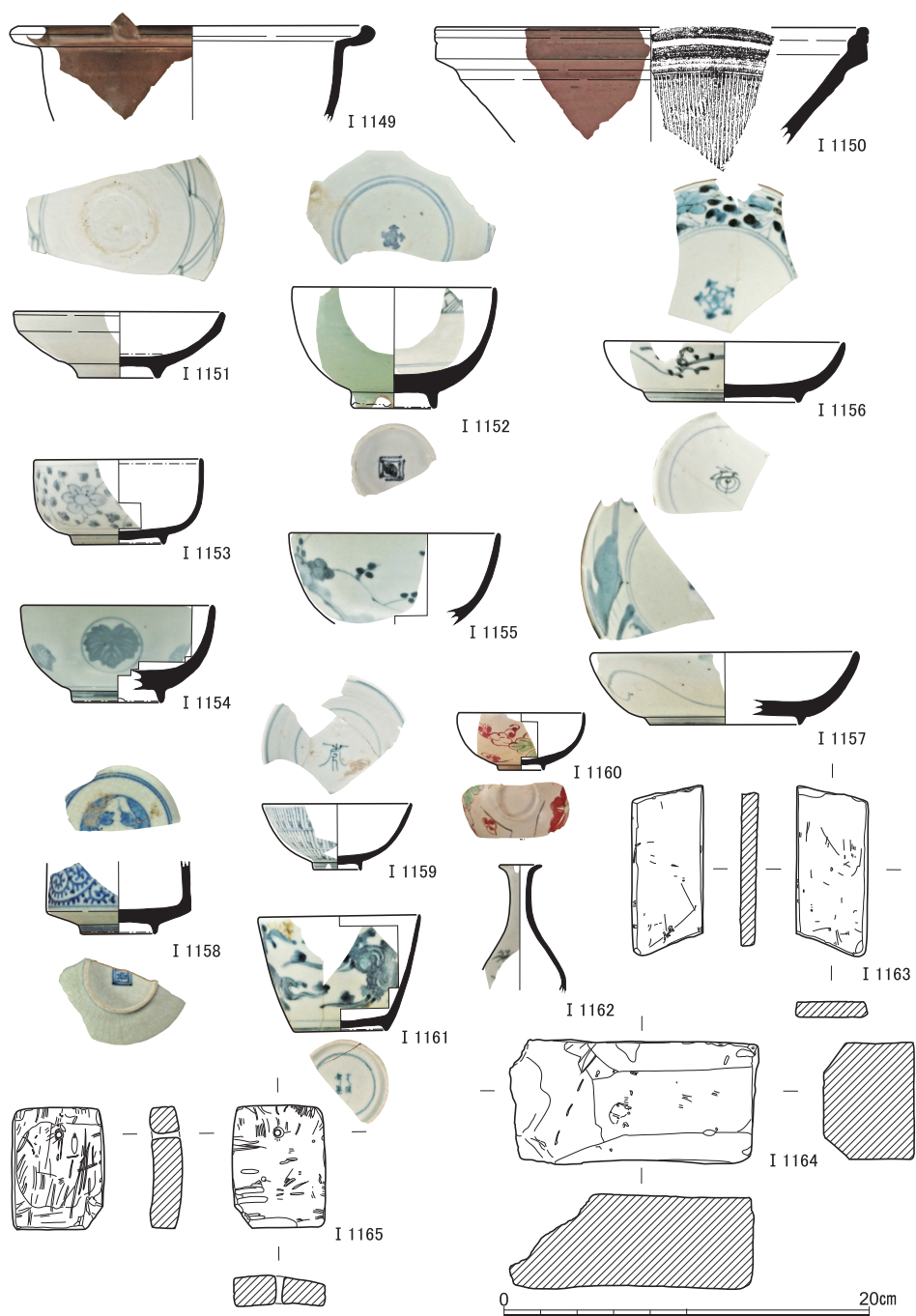


図67 不定形土坑群出土遺物(2) (I 1149・I 1150陶器, I 1151～I 1162染付, I 1163・I 1164砥石, I 1165滑石製品)

278地点でまとまって見つかった。I 1136以下の陶器では、京・信楽焼系の製品が主体を占める。I 1151～I 1162は磁器の染付。I 1160は色絵の小椀である。I 1164は大形の方柱状の砥石で、研ぎ減りが各面に認められる。I 1165は温石とみられる滑石製品。中軸線上に紐孔が1ヶ穿たれている。湾曲しており、石鍋破片の転用加工品であろう。

近代の大学関連遺物（I 1166～I 1193） 表土・攪乱の機械掘削作業中に、北調査区を中心として、まとまって投棄された大学関連の近代陶磁器類を発見した。現在も調査地東側に建物が残される吉田寮食堂は、学生寄宿舍吉田寮とともに大正2年（1913）に建設されたものであり、今回の陶磁器類はおもにそこで使用されたものであろう。大学史や学生厚生史の歴史、あるいは近代の陶磁器流通などを考えるうえでも有意な資料と判断し、極力器種のバラエティに配慮しながら遺存の良いものを回収した。ここに報告する。

主体となるのは、緑色のクロム釉で口縁端部に二重線をめぐらす意匠の磁器製食器群で、皿・湯呑・飯碗・丼碗・蓋などの種類があり、皿や湯呑には大小の法量規格もある。そして、同じ緑色釉の印判で、

A：花と「大」の文字を組み合わせたデザインの円形意匠、

B：枠囲みされた「京都帝国大学寄宿舍」の文字、

C：扇の意匠と「美濃窯業製」「MINO YOGYO LTD.」の文字を組み合わせたマーク、

D：小さな正方形枠の「美濃窯業」印

などが組み合わせて施されている（図71参照）。

I 1166～I 1171は皿で、直線的な逆ハ字形に立ち上がる器形。高台付で、口縁端部は短く外反する。大小2つの規格があり、小のI 1166～I 1168は口径10.5cm前後、器高2.0cm、大のI 1169～I 1171は、口径15.2cm器高2.7cmをはかる。見込み中央に意匠Aを置くのが基本のようだが、無いものもみられる（I 1171）。また、外面側は意匠の組み合わせに幾つものパターンがあり、高台内側にAとD（I 1166・I 1169）、高台内側にCで体部外面にA（I 1167）、高台内側にBのみ（I 1168）、それに体部外面にAやCを付加（I 1171）、などが認められる。なお、皿のみは口縁内面側に緑色二重線をめぐらす。

I 1172は蓋。口径10.2cm、器高3.2cm。体部外面に意匠Aを置く。碗の蓋であろうが、これと組み合うものを見いだせていない。

I 1173～I 1176は湯呑。口径に大小2つの規格があり、小I 1173・I 1174は口径7.2cm器高5.1cm、大I 1175・I 1176は口径11.0cm器高5.3cm。小については、側面にAとBを配し、高台内側にはCかDのいずれかが認められる。一方大については、側面にAとC、あるい

近世・近代の遺跡



図68 近代の磁器(1) (I 1166～I 1177表土・攪乱層出土)



図69 近代の磁器(2) (I 1178～I 1193表土・攪乱層出土)

はAとDを配しており、高台内側はBである。

I 1177は、上記の一群と異なり二重線や意匠は施さないコップ形の胴部片。口径は7cm程に復元され、縦書きで「京大寄宿舍」と緑色釉の上絵で記されるが、剥落している。

I 1178～I 1181は飯椀で、体部の屈曲が深い位置にある丸椀タイプのI 1178・I 1179と、体部が直線的な平椀タイプのI 1180・I 181がある。丸椀タイプは口径11.0cm器高6.2cm、I 1178は側面にA、高台内側にはBとDを配しているが、I 1179はDを体部下半に離して配している。平椀タイプのI 1180は口径10.8cm器高5.5cm、I 1181は口径11.6cm器高5.8cmと、規格が揃っていない。このことは、I 1180が側面に「學」字をあしらった意匠、高台内側にCのうち扇の意匠のみといったイレギュラーな特徴をもつことと関係するのかもしれない。I 1181は、側面にA、高台内側にBのパターンである。

I 1182～I 1188は、いわゆる井椀（I 1187はそれとセットの蓋）で、他の器種と異なりA・C・Dの意匠を付けたものはみられない。また、I 1187・I 1188のセットは緑二重線ではなく、呉須を基調とした鮮やかな草文の意匠である。ただし、法量規格としては比較的良く揃っており、I 1185が口径16.5cm器高8.0cmと若干大きめのほかは、口径は15.0cm±0.5cm、器高は7cm～8cmの間にほぼおさまる。I 1182は高台内にAが付されるが、それ以外は統制番号が付される。

統制番号については、昭和15年（1940）8月頃から昭和21年（1946）頃までの統制経済下において各地の生産者に割り当てられたものとされる〔萩谷2013〕。I 1183にクロム釉印で「瀬716」、I 1184に凹印で「瀬512」、I 1185にクロム釉印で「瀬512」、I 1188は呉須印で「肥12」が付されている。「瀬」は愛知県瀬戸市、「肥」は佐賀県塩田町の窯業者。なおI 1186は、胴部側面にLとNを組み合わせたマークがコバルト釉により付されており、高台内は無文である。

I 1189は小杯で、口径8.8cm器高4.9cm。口縁が弱く外反する。体部の半分を欠失しているために、本来どの意匠が付けられていたかは不明であるが、残存部分は無文で、高台内に鳩の意匠と「KOSHITU TOKI」の組み合わせ意匠がクロム釉印で施される。I 1190も小杯で、口縁がまっすぐ立ち上がる器形。口径7.4cm器高5.1cm。高台内に「岐438」のクロム釉印をもつ。「岐」は岐阜県東濃地方の窯業者を表している。

I 1191は薄手の杯で、見込みに金色で「京都帝国大学創立10年記念」と上絵で書かれている。また高台にも赤絵で「萬珠」と書かれる。「萬珠堂」として近世以来の窯業者が京都に存続しており、その製品であろうか。I 1192は徳利で、外面は金色の絵付けで「記

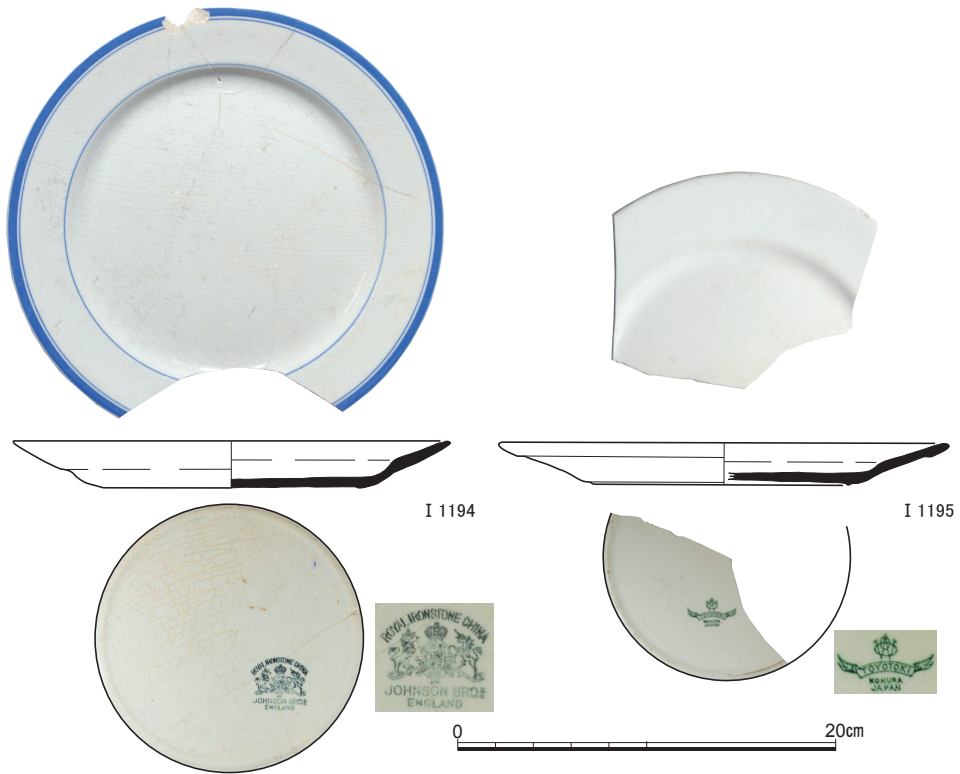


図70 近代の磁器(3) (I 1194・I 1195表土・攪乱層出土) 釉印については縮尺1/2

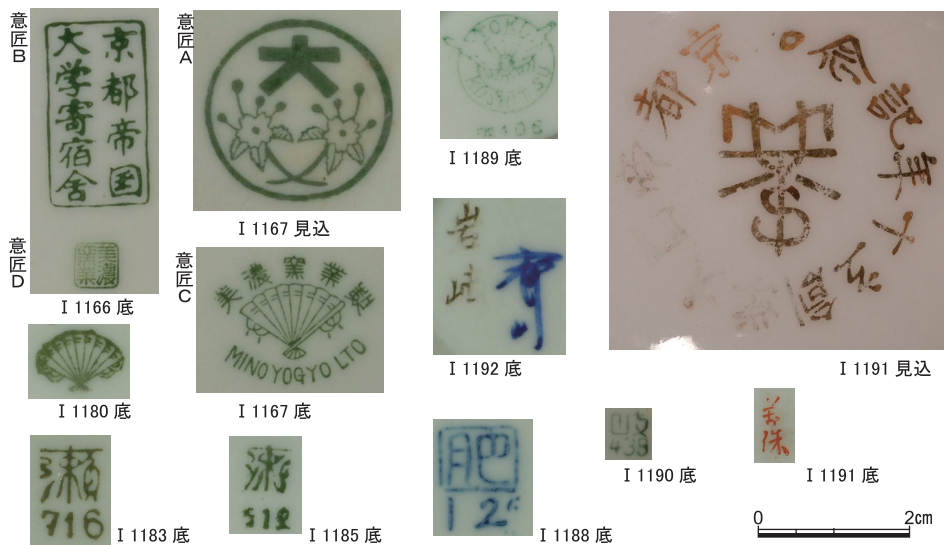


図71 近代磁器の意匠・釉印など 原寸大

念☆砲兵□二十二聯隊」の文字が書かれるが、ほぼ剥落している。また底部には同じ金文字で「岩崎」と記されている。I 1193は湯呑。口径9.1cm器高5.2cm外面にコバルト釉で右から左に向かって「楽友会館」の文字がめぐる。楽は「楽」の略字であり、現在も大学施設として存続する楽友会館で使用されていたものだろう。

その他の近代遺物（I 1194・I 1195） 洋食器といえる浅い皿2点。いずれも、真っ白な粉質の精良緻密な胎土で、硬質陶器などとも呼称されている製品であり、後述する西洋陶器と質感は類似する。

I 1194は、口径23.0cm器高2.5cm。内面側の口縁と見込み外縁にコバルト釉の圈線をめぐらしている。底面に紋章と組み合わせた「ROYAL IRONSTONE CHINA/JOHNSON BROS ENGLAND」の暗緑色の釉印が付されている。Johnson Brothersは、1883年にイギリスで創業した陶器会社であるが、本例のような印章は1888年～1913年に使用されたものとして紹介されている⁽¹⁾。

I 1195も同様な器形と胎土をもつが、透明釉のみの白色。口径23.7cm器高2.2cm。底面に「TOYOTOKI KOKURA JAPAN」の文字を組み込んだ緑色釉の印が付される。この印は1917年に小倉で創業した東洋陶器株式会社（現在のTOTO）のもので、中央のOCW（東洋陶器株式会社の英訳であるORIENTAL CERAMIC WORKSの頭文字を組み合わせたもの）の意匠とリボンを配したモチーフは、創業初期の1917年～1921年の輸出用衛生陶器に使用されたとされている⁽²⁾。本例は食器であるが、その段階の製品であろう。

西洋陶器（I 1196～I 1198） 白色粉質の精良な胎土で、銅版転写した絵画風図柄をもつヨーロッパ製の陶器が3点出土している。以下、遺物写真をもとに、岡泰正氏（神戸市立小磯記念美術館館長）にご教示をいただいた内容をもとにして、報告する。

I 1196は、北区の東南辺の表土下にみられた黄色粘土混じりの灰褐色土中から、多数の破片が一括出土し、完形に近く復元される。この出土層は、粉碎された近世野壺の漆喰片等を交えるもので、本来の近世層を近代以降に攪拌・整地したものの可能性が高い。したがって本例は、原位置を保った出土ではなく、二次堆積したものとみられるが、遺存が良好であることから、本来の廃棄位置に近い出土とみてよからう。

平面形が24cm×20cm深さは8cm程度の容器に、高さ5cm程度の脚台が付される。器種名としてはチュリーンと呼ばれ、スープやソースなどを容れる食器として、本来は蓋とレードル（玉杓子）がセットになっていたものであろう。コバルト釉とみられる藍色で、見込みに水辺での釣りの風景、内外の周縁部には農村風景とともに巻き貝や魚を飼う鉢の図柄



図72 西洋陶器(1) (I 1196黄色粘土混じり灰褐色土出土)

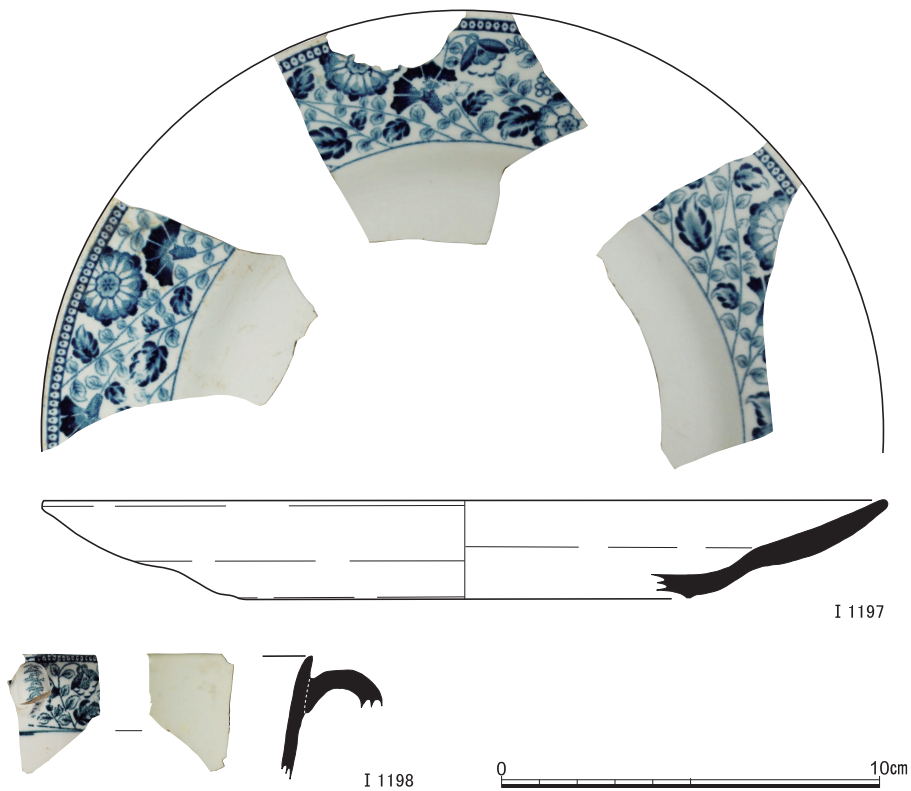


図73 西洋陶器(2) (I 1197・I 1198表土出土) 縮尺1/2

をめぐらしており、「フィッシング」と呼ばれるパターンとみられる。また脚台内面には、小さく「23」の数字が印字されている。特徴からみて本例は、イギリス、スタフォードシャー（現在のストック・オン・トレントStoke-on-Trent）のバーズレム（Burslem）に19世紀前半に所在していた、イノックウッド&サンズ（Enoch Wood & Sons）窯のアメリカ向けの製品か、その他窯の海賊版と推測される。質的にもよく、上品で、プリントウェアとして優品と言え、19世紀初期、文化末から文政の1810～30年頃の輸入ではないかと推測される。同じフィッシング意匠の西洋陶器は、大阪市中央区平野町における調査（OS93-47次）において皿破片の出土が報告されている〔豆谷1995〕〔大文協2003 p.149〕。

I 1197は、同一個体とみられる皿の破片3片。うち2片は南区東辺部の表土から、1片が南区中央のAM21a5・b5区の表土から出土している。復元口径は22.2cm、器高2.4cm。内面の周縁にやや若い感じを受ける花卉（かき）文がめぐるが、正式なパターン名としては不詳である。イギリスないしオランダ製かと思われるが、年代や製作地とも決め手を欠い

ている。I 1198の把手付の椀も、I 1197と同じ文様パターンであり、椀と皿とでセットとなる可能性が高い。こちらの破片も南区中央のAM21a5・b5区の表土から出土している。

8 小 結

今回の調査では、先史時代から近代にいたるまで、各時代の多様な内容の成果が得られた。最後に、簡潔に成果のまとめを記するとともに、時代毎に課題と思われる点を示したい。

縄文・弥生時代の遺跡 調査地一帯は、弥生前期末～中期初頭の洪水層である黄色砂の堆積する範囲に当たると予想されたが、東方は尾根状の微高地が張り出しており、堆積は確認されなかった。黄色砂のみられる範囲でも、その下面から人為による遺構は検出されず、南流する流路SR1のほか、自然の流れの痕跡や旧地形を知る情報を得たにとどまる。ただし、SR1は、既往の調査成果も合わせると、弥生前期に吉田南構内の西辺を200m以上にわたり流下していたことになり、一帯の基幹的流路として重要な役割を担っていたことが、あらためて確認できたと言える。今回は、調査区西辺域が後世の土取りにより広く滅失していたこともあり、確認には至らなかったが、近接して水田や集落が存在している可能性は充分に残されていると言え、今後も留意しておく必要があろう。

上記に関連して、出土遺物の内容でみると、弥生時代前期の土器は、SR1からを中心にして若干の点数が出土しているものの、量的に最も多いのは縄文後期前葉～中葉の北白川上層式期の土器であり、次いで晩期後葉の土器、であった。南方の聖護院地区や病院東構内では、これまでも縄文後期遺跡の存在が知られているほか、北方の吉田南構内北辺の288地点などでも、当該期の資料はまとまって出土している。今回の資料は特定の時期にまとまるものではないけれども、吉田から聖護院地区にかけての広範囲に、縄文後期前半期の活動域が展開している可能性を示唆する成果といえるだろう。

なお、遺構こそ明確に確認されなかったが、弥生中期初頭～前葉の資料が出土している点も注意されよう。北側の261・378地点では中期後葉の方形周溝墓が確認されてきたところであるが、それに先行する時期の遺跡の存在を示すものであり、洪水による埋積後も、比較的早期にかつ継続的に、一帯で土地利用がなされていたものとみられる。今後さらに資料を得ることで、より具体的に弥生中期以降の遺跡群の展開が復元可能になろう。

古墳時代の遺跡 調査区の北方一帯、111・220・322・378の各地点でそれぞれ5世紀代の方形墳が総計9基確認され、「吉田二本松古墳群」と呼称されてきたところであるが、今回は、378地点発見の9号墳の南周溝が、北区北辺でかろうじて把握されたのみで、あ

らたに古墳と認定できる遺構は検出されなかった。攪乱範囲も広いことから、後世の破壊と滅失の可能性を完全に否定できるものではないが、5世紀代の遺物はごくわずかしか出土しておらず、古墳の存在を敢えて想定するのは難しい状況といえよう。

一方で、注意されるのは、古墳時代終末期（飛鳥時代）といえる6世紀末～7世紀前半代の遺物が一定量出土している点である。その時期に限定できる遺構を検出することはなかったけれども、黒色土や淡褐色土を埋土として弧状にはしる時期不詳の溝などが該当している可能性は考えられる。今後の調査にあたっては、この段階の遺跡存在にも注意していく必要がある。

奈良時代の遺跡 8世紀代の井戸や溝がみついているほか、比較的まとまった量の遺物が出土している。とくに井戸については、この地における居住の存在を裏付けるものとして重要であろう。吉田地域では、本部構内南辺の75地点で竪穴建物が、また吉田南構内では238・288地点および111・220地点で掘立柱建物や井戸などがみついている。また今回よりも南側では、約200m西南の病院東構内191地点で、竪穴建物の可能性のある遺構が8世紀代末の遺物とともに報告されている。わずかに時期が下るものであるものの、この地点も含めて考えるならば、およそ700m程度の範囲にわたって、扇状地の縁部に小規模な単位が直線的に散住しているような様相ともいえる。これらすべての地点をひとつの集落とみなして、当該時期の交通ルートを反映したような居住形態であると考えられるのか、あるいは、別個の単位ととらえるべきか、など、遺跡の性格の解明も含めて、今後吟味をおこなっていく必要がある。

平安時代の遺跡 9～10世紀代のまとまった遺物と、東西や南北の溝などがみついている。近隣では、北方の111・220地点でこの時期の梵鐘鑄造遺構や井戸などが知られているが、隣接する261・378地点では平安期の遺構はほとんど見つかっておらず、空白地帯となっていた。今回、南区において検出された東西溝S D43は、塀状の基礎かともみられるような土坑や根石を内部にとまうなど、非常にしっかりとした掘り込みが50m近くにわたって検出されたもので、東西の土地区画を示す重要な遺構の可能性が高い。上記の空白地帯を介しながらも、鑄造遺構を含んだ平安中期の遺跡のまとまりの南限を示す可能性があり、今後、より南方への平安時代遺跡の展開を検証していく必要がある。

中世の遺跡 今回の調査地において、遺構・遺物ともにもっとも密度濃い成果が得られているのが、おおむね鎌倉～室町時代に相当する13世紀～15世紀代の遺跡である。多様な遺構が検出されているが、それらは①東西および南北方向の溝、②土器溜・遺物溜、③

建物跡、④土の採取のための不定形土坑、のおおむね4群に大別できる。

①については、調査地が中世に東西および南北方向の区画の要地に位置していることを示すものであろう。とくに、南北溝を境にして西側には④の不定形土坑が広がっている。この不定形土坑についてみると、西方の医学部構内東半で14・15世紀代を中心とする遺構がひろく確認されていることから、今回はその範囲の東限を把握されたことになる。すなわち、面的な土の採取の有無という、中世における土地利用の大きな境界にあたっていたといえる。逆にいうと、土の採取が及ばなかった東方は、何らかの区画内部の空間として位置づけられよう。しかし、今回は井戸などが全く検出されず、中世を通じて②土器溜・遺物溜が存在していることから、生活空間などの核心部ではなく、何らかの敷地とすればその外縁部の廃棄空間にあたっていたと見なすのが自然といえる。中世後半にいたって、SH1など、③建物跡の存在が明瞭化するが、特殊な蔵のような建物であり、やはり外縁部として空間の位置づけは変化していなかったものとみられる。

調査地周辺については、おおむね12世紀半ば～13世紀代に、福勝院という寺院の存在が想定されてきた〔吉江2006〕。比定地の中心は調査地から東方約200mを隔てた旧字名の「壺丁ヶ辻」であり、また遺構の内容からみても、今回検出の遺構群が直接福勝院の核心施設であるとは比定できないものの、関連施設も含めた寺域の外縁と位置づけられる可能性はあろう。今後、既往の成果を再検証しつつ、周辺の調査の際は充分留意する必要がある。

なお、遺物については、中世土師器のなかで「乙訓在地形土師器」などと呼称される異系統の皿類のまとまった出土が注目された。この件は第6節において詳述し、遺物の型式的検討が不十分で定義が曖昧であり、名称が実態に一致していないことを確認した。今後多くの課題が残されているといえよう。

また、層位の検討において、北区の南北溝SD10および東西溝SD13の断面で、地震にともなうとみられる砂脈や堆積の乱れが確認されている。中世段階におけるこうした自然災害がいつ、どの程度の規模で影響を与えたのか、広域的な情報収集と比較により明らかにしていくことが、今後の課題となろう。

近世の遺跡 周辺での調査成果から、耕作地としての土地利用が想定され、おおむねそれに違わない結果であったけれども、北区北西域の一角がひろく土取りされていたことは全く予想外であった。近世段階の土取りの遺構は、これまでは医学部・病院構内では知られていたが、数多くの調査を経ている吉田南構内以北では明確な検出例がなかった。

土取りの様態は、近世におけるその商品化を背景に、採取料算定に適した方形の規格的

な採取へと変化することが指摘されてきた〔五十川1991〕。今回の不定形土坑群も、それに合致するもので、判明する範囲でおおよそ100㎡あまりの内部をきっちりと区切りながら網羅的に取り尽くしている様子がうかがえた。ただし、南区では、独立した深い不定形土坑も検出されている。組織的・規格的な採取と異なる様態もあったと理解するべきなのか、試し掘りの土坑であったのか、今後情報を増やして検討していく必要があろう。また、その採取時期は、切り合い関係や内部に埋積している陶磁器類の様相からみて、近世後半期以降の可能性が高いと思われる。仮に吉田地域での需要に応じた採取であるとすれば、幕末の尾張藩邸設置を契機とした建造物や人口の増加を理由とする可能性もあろう。構内における近世遺跡の諸遺構について、今後は地域の歴史的変動との関連を視野に入れて検証を加えていく視点も求められよう。

近代の遺物 前節において報告したように、今回は、帝国大学寄宿舎関係とみられる磁器製食器類が遺棄されていた。考古学的な検討は今後の課題であるが、大学の歴史のみならず、明治期から第2次大戦中前後にかけての食器生産と流通を考えるうえでも、興味深い資料であろう。『京都大学建築八十年のあゆみ』（1977年）によれば、今回調査地の大学における土地利用の履歴は、明治30年（1897）の京都帝国大学創設に当たって、京都府より寄付を受けた敷地としてはじまる。医科大学の仮教室が一時的に設けられた後、明治43年（1910）以降学生用厚生施設が順次建設され、学生集会所が明治44年（1911）、大正2年（1913）に寄宿舎や食堂が本部構内より移転新築されている。また樂友会館は、大正14年（1925）の竣工である。一方、陶磁器類については、美濃窯業社製の製品が主体を占めている。美濃窯業社の沿革や給食食器については、病院構内での出土品に関連して報告しているが〔伊藤2014〕、大正9年（1920）に給食用食器生産を開始しており、昭和6年（1931）のカタログに得意先として「京都帝国大学学生寄宿舎」を認めることができる（美濃窯業製陶株式会社『美濃窯業社史』2006）。このように、寄宿舎の竣工と、規格的な食器類の納入には時間差が認められ、現在のところ先行する段階の食器類は同定できていない。今後、当初の食器使用の状況やその変動の背景について、検討をおこなう必要があろう。また、ほぼ戦時中の生産とみてよい統制記号をもつ製品が一定量出土している。昭和18年（1943）に美濃窯業製陶は食器生産を中止しており、戦時期には各所から補充したことを推測させる状況であるが、これらの内容の詳細解明も、興味深い課題である。

なお、製品としては近世段階に属するとも言えるが、いわゆる西洋陶器の出土についても報告をおこなった。それらが遺跡地やその周辺において、どの段階で使用され遺棄され

たものなのか、現状では定かにできないけれども、今後検討を加えていきたい。

遺跡破壊の問題 冒頭において記述したように、今回の調査地は、とくに北区において、発掘調査に至近の時期におこなわれたとみられる深い掘削によって、広い範囲で大きな損傷を被るとともに（図2）、攪乱内部には電化製品をはじめとした産業廃棄物などが埋置されていた。『京都大学新聞』2013年7月16日号（No2513）の記事によれば、「吉田寮埋文調査始まる」の見出しとともに今回の調査に関する記述がある。そのなかで、「…工事開始に先立って、吉田寮生らが焼け跡に置いていた単管パイプなどの物品を撤去。その後、焼け跡がなくなることを惜しむ寮生や元寮生らが、7月6日・7日に「焼け跡祭」を開催した。同祭では、焼け跡に寮生が掘った2メートル30センチ近くの穴を用いて24時間耐久キャンプファイヤーを行い、焼け跡の最期の姿を目に焼き付けた…」と記載されている。これが事実であるとすれば、発掘直前の段階に大規模な掘削をおこなっていることになり、きわめて遺憾な事態であろう。

調査地北側においては、2011年度に古墳を中心とする調査成果の現地説明会をおこなうなど、現地の遺跡としての重要性については、周知に努めてきたところであった。しかし、残念ながら理解の及ぶところではなかった可能性がある。今後は、学内の埋蔵文化財保護や調査の意義について、広報や周知の体制を再検討し、このような遺跡破壊の再発を防止する対策の必要性が痛感される。

今回の報告に際し以下の方々にご教示いただいた。末尾ながら、厚く御礼申し上げる。

動物骨について菊地大樹氏（人文科学研究所）、井戸梓樹種について杉山淳司氏（生存圏研究所）、中世建物について山本雅和氏・柏田有香氏（京都市埋蔵文化財研究所）・國下多美樹氏（龍谷大学）、所謂「乙訓在地形土師器」について大立目一氏・上村和直氏（京都市埋蔵文化財研究所）・伊賀高弘氏（京都府埋蔵文化財調査研究センター）・岩崎誠氏（長岡京市埋蔵文化財センター）、西洋陶器について岡泰正氏（神戸市立小磯記念美術館）。

〔注〕

- (1) イギリス、ストック・オン・トレント（Stoke-on-Trent）の地域紹介webサイト<http://www.thepotteries.org/allpotters/607.htm>, およびhttp://www.thepotteries.org/mark/j/johnson_brothers.htmlを参照（2015年12月21日確認）。
- (2) TOTOミュージアムのwebサイト<http://www.toto.co.jp/social/museum/trademark/>を参照（2015年12月21日確認）。